



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

平成 30 年度
養蜂経営における女性の貢献調査事業
調査結果

2019 年 3 月

JAICAF ジェイカフ

公益社団法人 国際農林業協働協会

平成 30 年度
養蜂経営における女性の貢献調査事業
調査結果

2019 年 3 月

JAICAF ジェイカフ

公益社団法人 国際農林業協働協会

はじめに

当協会では今年度、日本中央競馬会より助成を受け、養蜂分野での女性の貢献について調査を実施しました。

養蜂は蜂蜜、ローヤルゼリー、プロポリス、花粉等の他、ポリネーターとしての蜂群の供給等、わが国にとってなくてはならない産業です。しかし、わが国では、市場に流通する蜂蜜のうち9割が輸入品であるうえ、消費者が国内の養蜂業に接する機会が限られていることから、農業生産や環境保全に養蜂がいかに貢献しているか等の社会的な理解は、未だ限られているようです。

養蜂産業の今後の振興のためには、養蜂家が社会に対して積極的に正確な情報を発信していくことが求められます。情報発信機能の拡充は、社会の理解を促進し、また、六次産業化やグリーンツーリズムといった他産業との連携など、経営多角化や地域振興につながることも期待できます。こうした他産業との連携には女性が参入しやすい面もあり、女性からの一層の貢献を得ることは、今後の養蜂産業の振興にとって、極めて重要であるといえるでしょう。

一方、養蜂では、女性の貢献がまだ十分に認知されていません。養蜂業者に占める女性の割合、養蜂業における女性の労働負担および活躍についての調査研究は限られており、養蜂業にどのように女性が参画しているのかわからないのが現状です。

こうした背景から当協会では、本調査を実施し、アンケート調査と事例調査により、女性がどのように養蜂に関わり、その関わりが養蜂経営とどのような関係にあるか、実際に女性がどのような問題を抱え、その対処のためにどのようなアイデアや希望を持っているかを明らかにしました。

本報告書は、調査の結果をとりまとめたものです。調査対象件数や地域が限定されていることから、結果も限定的なものとならざるを得ませんでした。こうした情報が少ない現状においては、貴重なデータを提示したものと思います。今後、養蜂を主業とする経営体を対象に全国規模で調査するなど、本調査をきっかけに調査研究が蓄積されることを期待します。

本調査事業の実施に当たっては、埼玉県養蜂協会の皆様に多大なご支援と惜しみないご協力を賜りました。調査に対応してくださった養蜂家の皆様がおられなければ、本調査は実施できませんでした。また、検討委員の皆様からもご支援と貴重な助言をいただきました。

ここに深謝申し上げます。

最後に、本報告書は当協会の責任において作成したものであることをお断りいたします。

2019年3月

公益社団法人 国際農林業協働協会
会 長 松原 英治

目次

はじめに	3
1. 調査事業の概要	5
2. アンケート調査結果	7
(1) アンケートⅠ 養蜂への女性の関わり	8
(2) アンケートⅡ 養蜂事業の概要	25
(3) 経営拡大と女性の貢献	34
(4) アンケートⅢ 女性の経営参画に関する意向	38
3. 事例調査概要	45
菅野菊枝さん	45
松本鮎子さん	49
コラム1：女性が活躍するモンゴルの養蜂	52
高田美穂さん、孝子さん	53
飯田典子さん	57
川端美穂さん・可兒優さん	60
榎本佐和子さん	63
廣田亮子さん	66
コラム2：家畜保健衛生所と養蜂協会の役割	69
4. 付属資料	70
(1) 養蜂経営における女性の貢献調査事業 事業評価検討委員 名簿	70
(2) アンケート調査票	71
(3) アンケート集計データ	81

調査・分析

公益社団法人国際農林業協働協会

西山亜希代（業務グループ調査役：総括）、森麻衣子（同 主任研究員）、
田中麻理（同 研究員）

アンケート調査実施期間：2018年7月～9月

アンケート調査回答者の居住地：埼玉県、長野県、静岡県、東京都

1. 調査事業の概要

調査は、①アンケート調査と②事例調査によって構成された。

1) アンケート調査

埼玉県を中心に、長野、静岡、東京の101軒の養蜂世帯／法人から回答を得た。
アンケートは3部構成とした。

- ①女性と養蜂への関わりを質問（回答件数：82件）
- ②養蜂家の事業概要を質問（回答件数：90件）
- ③女性の経営参画に関する意向を質問（回答件数：女性50件、男性82件）

アンケート①は4ページ、②は2ページ、③は2ページにわたるもので、①は世帯／経営内の女性、②は世帯内の代表者（男女問わず、経営が分かる者であればだれでも可）、③は世帯／経営内の男女それぞれに回答いただいた。そのため、101軒の養蜂世帯／法人から回答を得たが、①は82件、②は90件、③は計132件の回答であった。

アンケート① 養蜂への女性の関わり

- 目的：「女性がどのように養蜂に関わっているか」を明らかにする
- 回答者：世帯内の女性
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
養蜂との関わり（始めたきっかけ、経験数、時間、発言）	I-1～I-5（p.1）
お客さんとの関係（販売、消費者情報、販売方法、情報発信）	I-6（p.1、p.2）
研修・技術習得の状況	I-7～I-8（p.2）
他の養蜂に関わる女性との関係	I-9（p.2）
今後の希望1（継続、内容、研修）	I-10～I-12（p.2、p.3）
今後の希望2（ネットワーク）	I-13～I-14（p.3）
今後の希望3（改善の希望）	I-15（p.3）
回答者の情報	I-16～I-17（p.3）
実際の仕事、作業の分担	I-18（p.4）

アンケート② 養蜂事業の概要

- 目的：生産の有り様が様々であるため、IおよびIIIの回答分析の基礎情報とする
- 回答者：経営内で、養蜂・ミツバチ飼育のことが分かる者
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
養蜂形態（専業、兼業、趣味的）	II-1（p.1）
届出者	II-2（p.1）
飼育概要（蜂群数、移動、経験）	II-3～II-5（p.1）
生産物、販売、売上金	II-6～II-8（p.1）
5年前との変化（収入、多角化）	II-9～II-11（p.2）

質問の内容	質問番号
労働負担、労働力	II-12～II-13 (p.2)
団体登録	II-14 (p.2)
経営の課題	II-15～II-16 (p.2)
法人、後継者	II-17 (p.2)
回答者の情報	II-18 (p.2)

アンケート③ 女性の経営参画に関する意向

- 目的：女性の経営参画のための環境整備に必要な事項を明らかにするとともに、農林水産省が実施する男女共同参画意向調査に沿った質問によって、他部門との比較を行う。
- 答えていただきたい人：男女双方
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
回答者の情報	III-1 (p.1)
養蜂経営への女性の理想的な関わり	III-2～III-3 (p.1)
家族経営協定について	III-4 (p.1)
女性の経営参加促進に必要な環境整備	III-5 (p.1)
男女の養蜂・地域活動・家事育児介護への理想的な関与	III-6～III-7 (p.2)
報酬の在り方	III-8～III-9 (p.2)

2) 事例調査

全国7ヵ所でインタビュー調査を実施した。北海道（1件）、埼玉（2件）、東京（1件）、岐阜（1件）、愛知（1件）、山口（1件）であった。

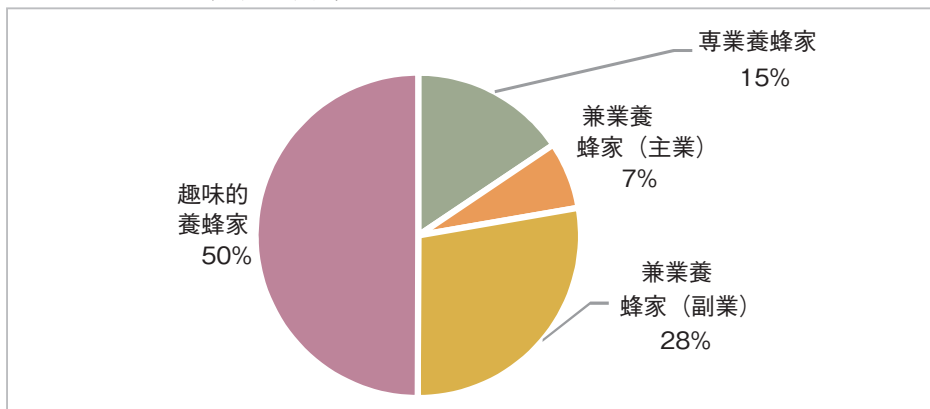
主要な収入源として養蜂に取り組む養蜂経営を対象とし、その上で、できるだけ多様な関わり方の事例を扱うことを狙った。女性自身が養蜂を始めたケース、経営主の夫とともに養蜂を行う女性、父親から養蜂を引き継ごうとする女性、女性たちだけで必死に家業を守るケース、また、教育現場に関わるなど社会的な活動を行う女性、ブランド化を進めて蜂蜜の新しい可能性を探る女性、野菜や家畜などとの複合経営を目指す女性など、できるだけ様々なアプローチで関わる事例から、声を聴きだしたいと考えた。

事例調査に当たっては、女性ならではの課題や悩み、喜びの他、他の女性にとって参考となるような事柄やアイデア、養蜂に関する課題などを、これまでの来歴を聞く中で、明らかにするように努めた。

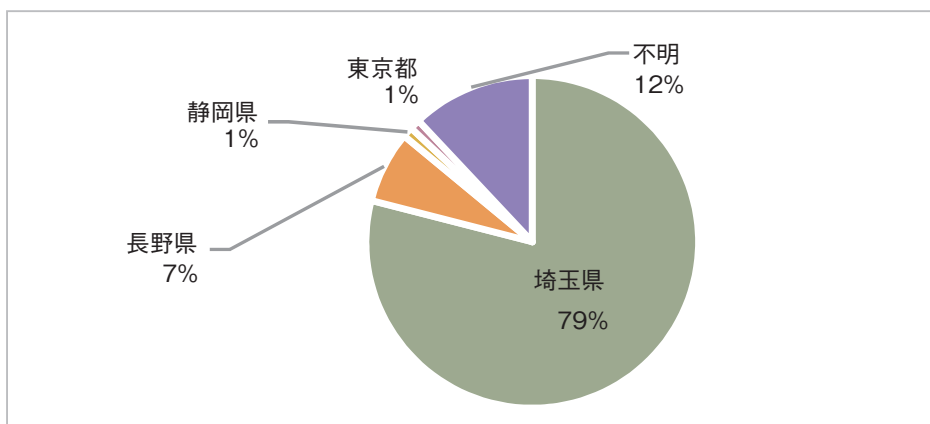
2. アンケート調査結果

アンケート対象者の概要

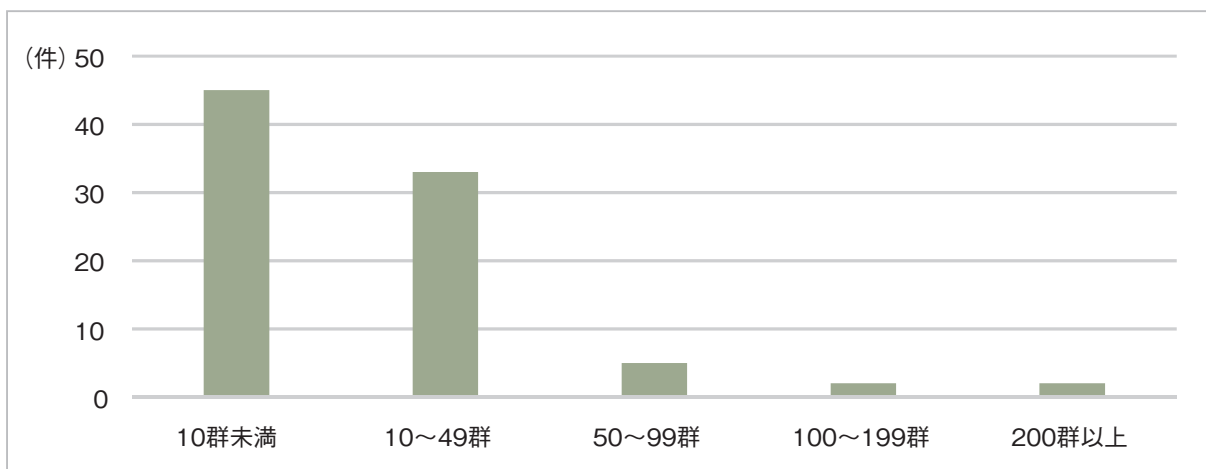
アンケート回答者の養蜂の概況は、下記の通りであった。



養蜂形態*



居住地*



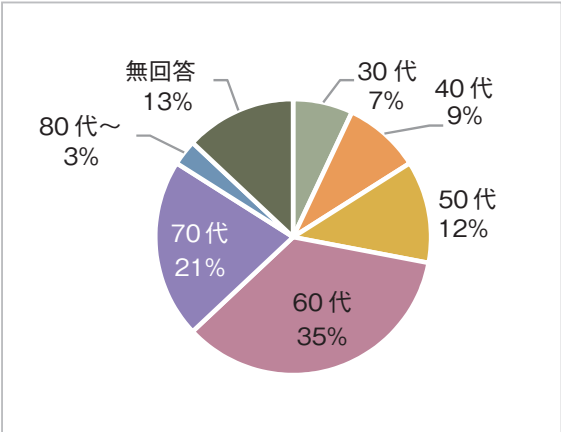
蜂群数*

*アンケートⅡ「養蜂事業の概要」の回答者90名の情報

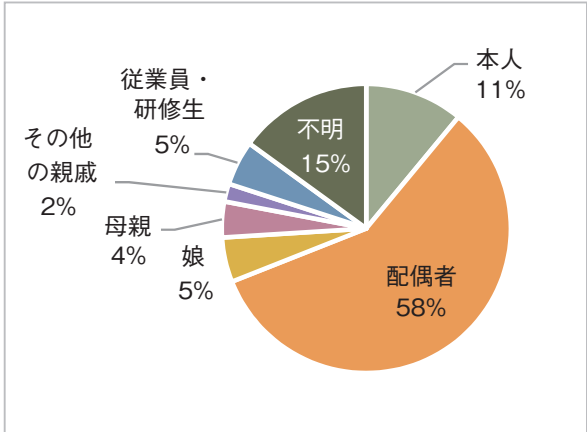
1 | アンケート | 養蜂への女性の関わり

養蜂に携わっている世帯の女性に対し、養蜂にどのように関わっているかを尋ね、82名の女性から回答を得た。

回答者の年齢は、30～40代が16%、50代が12%、60代以上が59%を占めた。
 経営主（飼育責任者）との関係は、「配偶者」が6割弱で最も多かった。



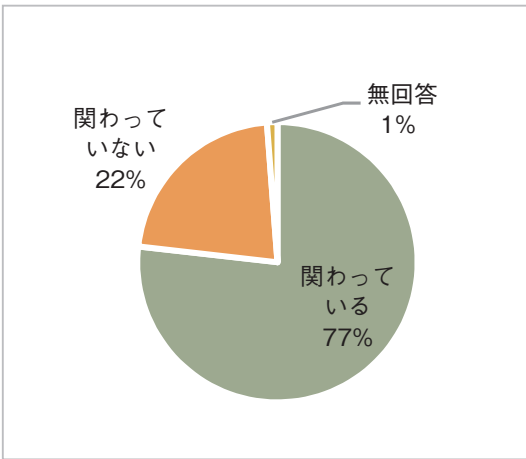
回答者の年齢



経営主（飼育責任者）との関係

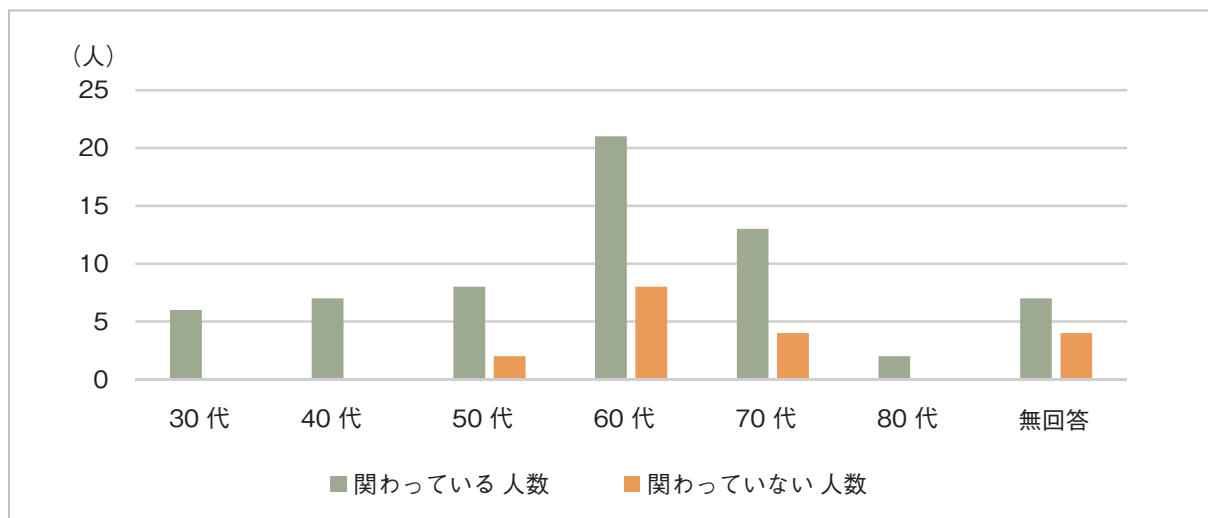
養蜂との関わり——始めたきっかけ、経験数、時間、発言

Q. あなたは養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関わっていますか



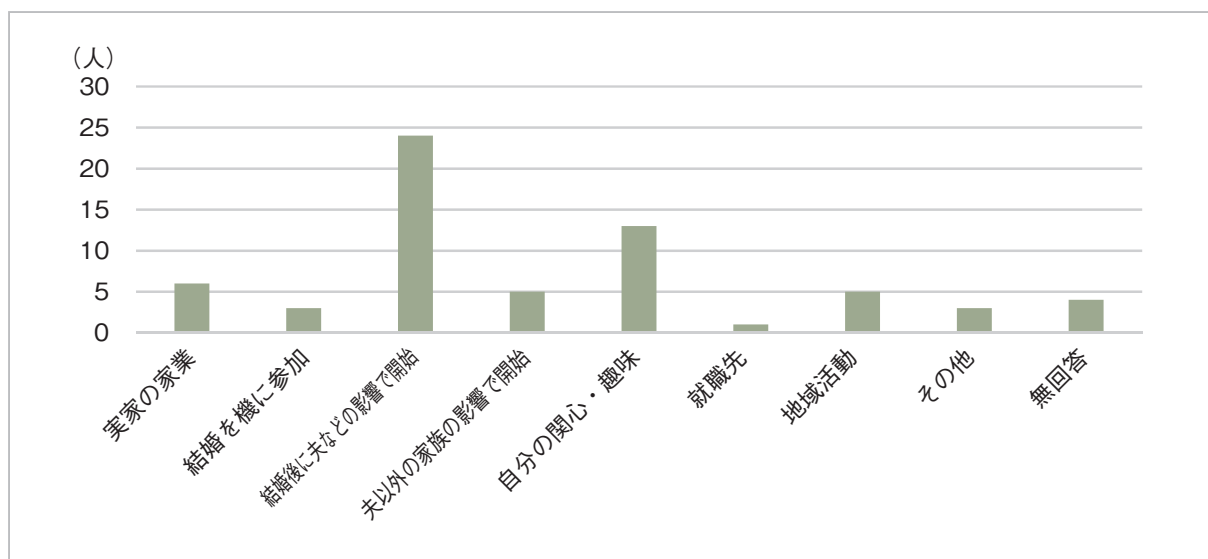
女性の77%が「関わっている」と回答。無回答の1人も、その他設問の回答状況から、養蜂に関わっていると判断できるため、82人中64名が養蜂に関わっている。

年代で見る養蜂への関与の有無



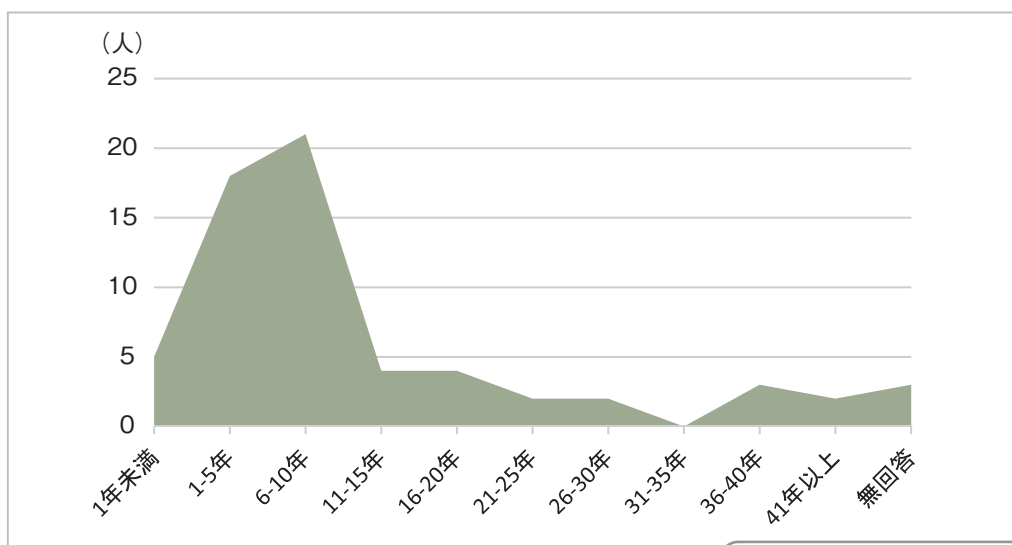
女性の養蜂への関わりを年代別に見ると、「関わっている」女性は60～70代に多い。「関わっていない」人も60～70代に多いが、30～40代にはいない。

Q. 養蜂を始めたきっかけは何ですか？



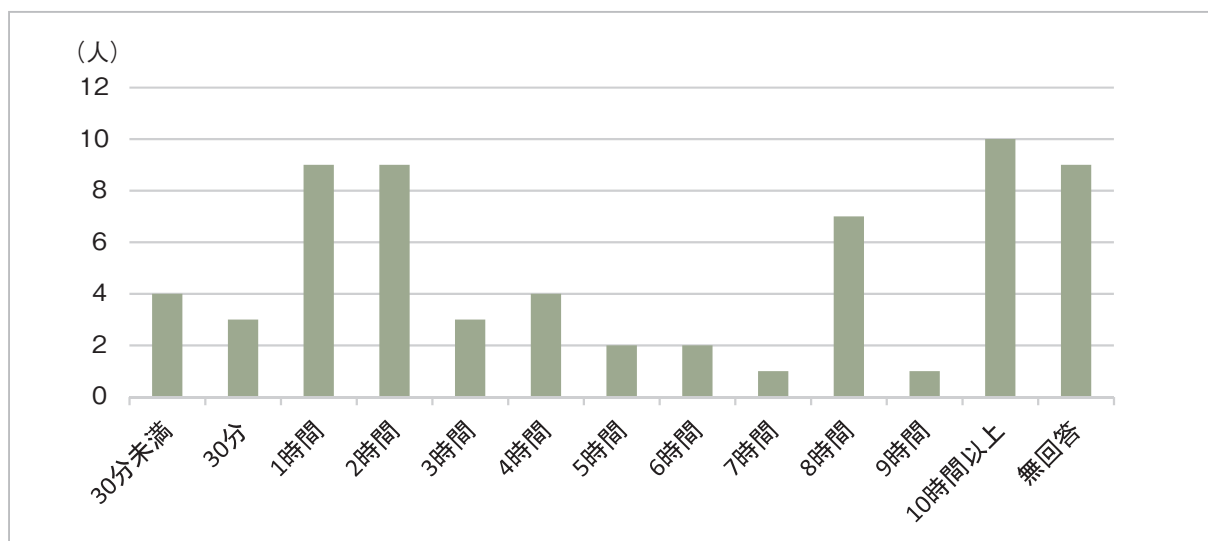
「結婚後に夫などの影響で開始」が最も多く、次に「自分の関心・趣味」が多い。

Q. 養蜂に関わるようになって何年くらい経ちますか



「1～10年」が最も多い。

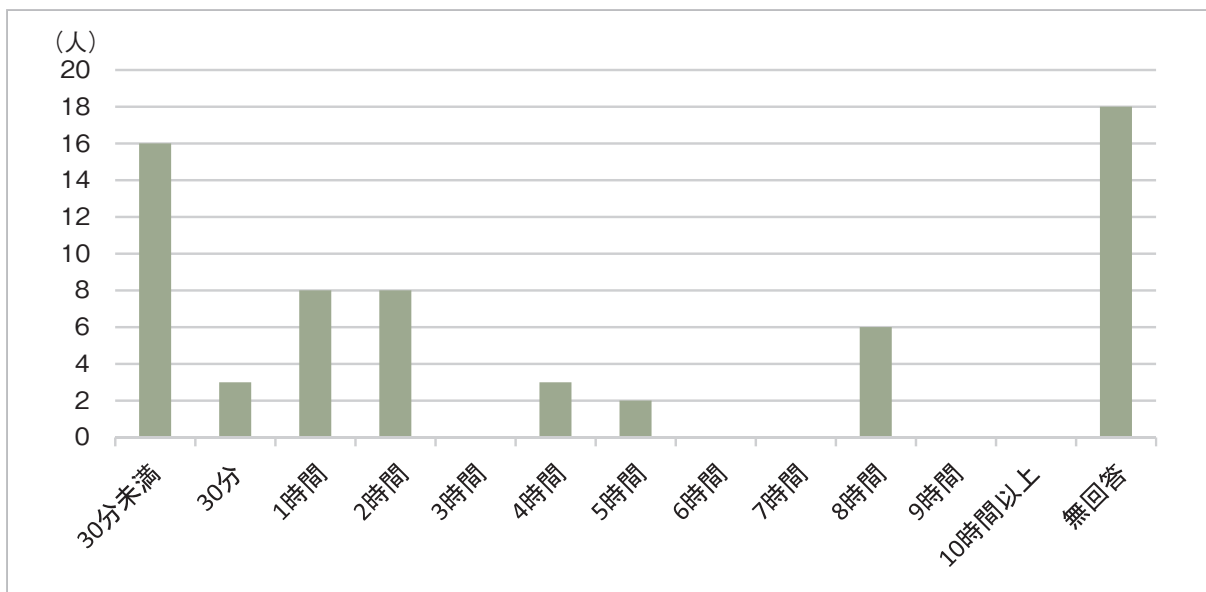
Q. 一日のうち、養蜂に割く時間はどのくらいですか？



繁忙期の労働時間

繁忙期の時間は、1日当たり平均で4時間54分であるが、1～2時間と8時間以上に二極化している。専業養蜂家のみで見ると、繁忙期の労働時間は、平均9時間37分。同じく兼業養蜂家（主業）は6時間50分、兼業養蜂家（副業）は4時間4分、趣味的養蜂家は2時間13分。経営形態不明は57分。（いずれも、「無回答」と「養蜂に関与していない」女性を除く。）

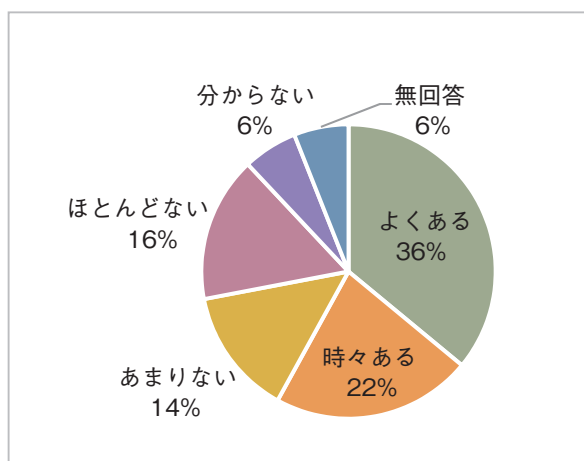
最長は16時間で、10時間以上も10人いた。



閑散期の労働時間

閑散期の労働時間30分未満とした16人のうち、14人は0分であった。繁忙期と閑散期との差が大きいことがうかがえる。

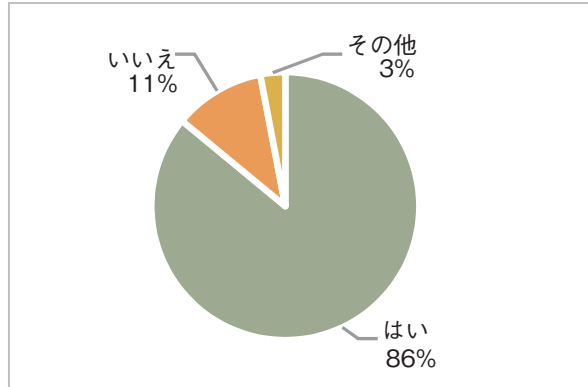
Q. 養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関して、自分の意見を言い、それが採用されることがありますか



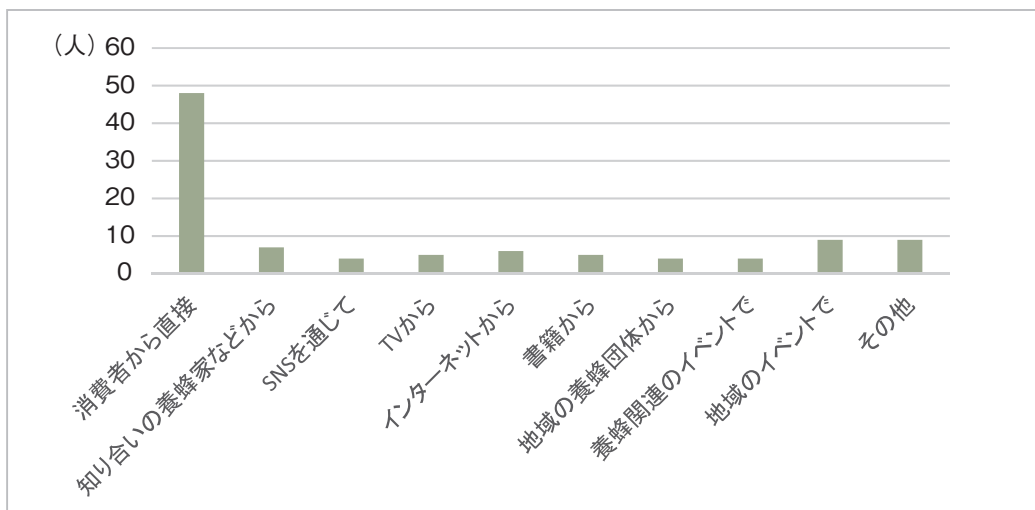
「よくある」「時々ある」を合わせると58%となり、6割弱の女性が、養蜂に関して自分の意見が採用されていると感じている。

消費者・顧客との関係——販売、消費者情報、販売方法、情報発信

Q. 蜂蜜などを販売することがありますか



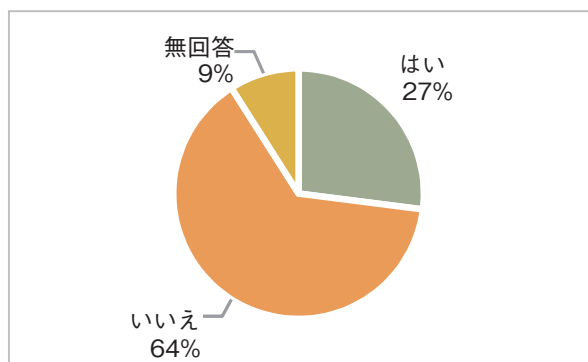
— 販売している場合、消費者の情報や顧客ニーズをどこから得ていますか（複数回答可）



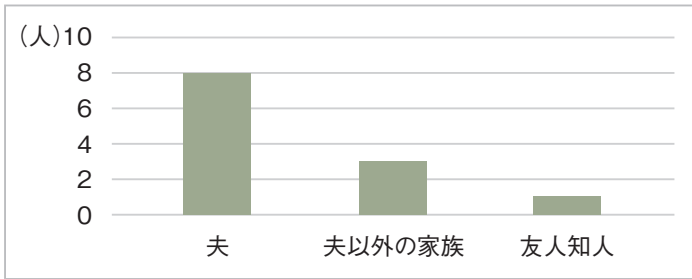
86%が蜂蜜等の蜂産品を販売している。

このうち、消費者の情報や顧客ニーズは「消費者から直接」得ている人が圧倒的に多かった。

Q. これまで、新しい販売方法を提案／実行したことはありますか



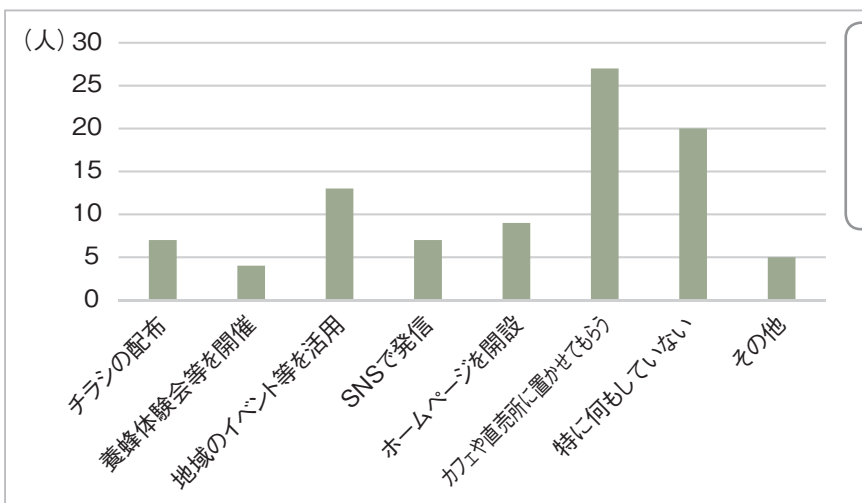
— 「はい」の場合、誰かに相談しましたか



販売に携わる女性の4人に1人は、新しい販売方法を提案／実行したことがある。

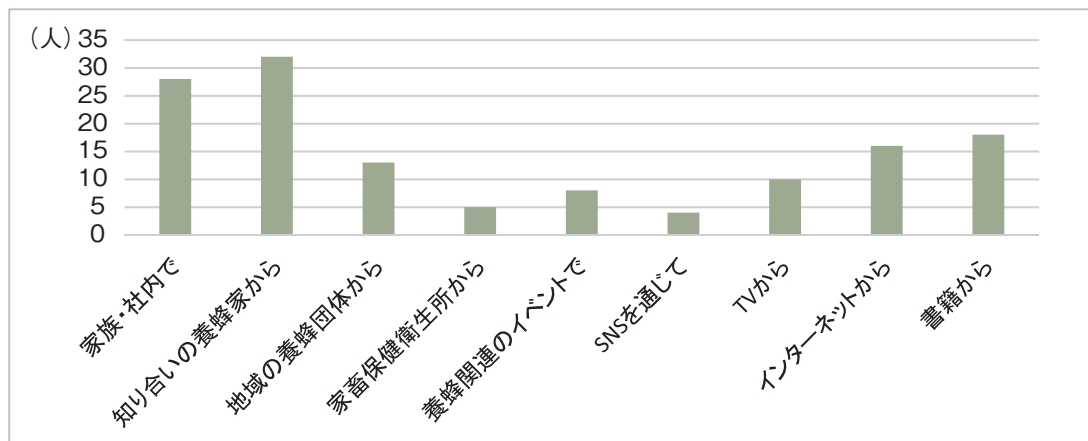
提案したことがある女性12名（無回答3名を含む）のうち、8名は「夫」に相談した。

Q. 消費者への情報発信は、どのようなことを行っていますか（複数回答可）



「カフェや直売所経由」で発信している女性が最も多く、次に「特に何もしていない」が多かった。

Q. 養蜂全般に関する情報や飼育技術に関する情報は、どこから得ていますか（複数回答可）

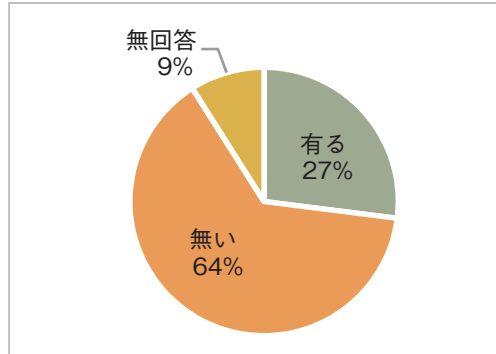


「知り合いの養蜂家から」得ている女性が最も多く、次に「家族・社内」が多かった。個人的なつながりが重要な役割を果たしているとともに、本やインターネットなど、誰もがアクセス容易な情報源を活用している。

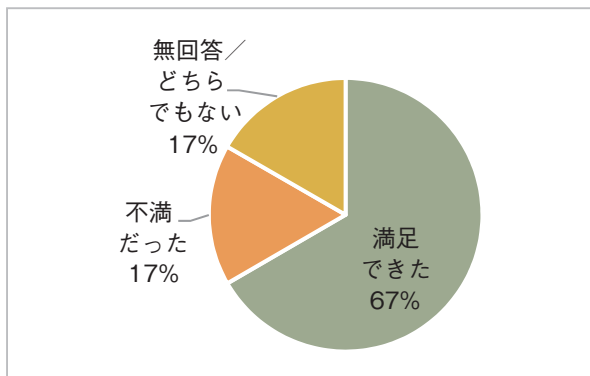
一方、地域の養蜂団体や家畜保健衛生所など、養蜂の公的な窓口へのアクセスは比較的少ない。

研修・技術習得の状況

Q. これまで飼育技術研修を受けたことがありますか



— 「有る」場合、研修は満足できるものでしたか

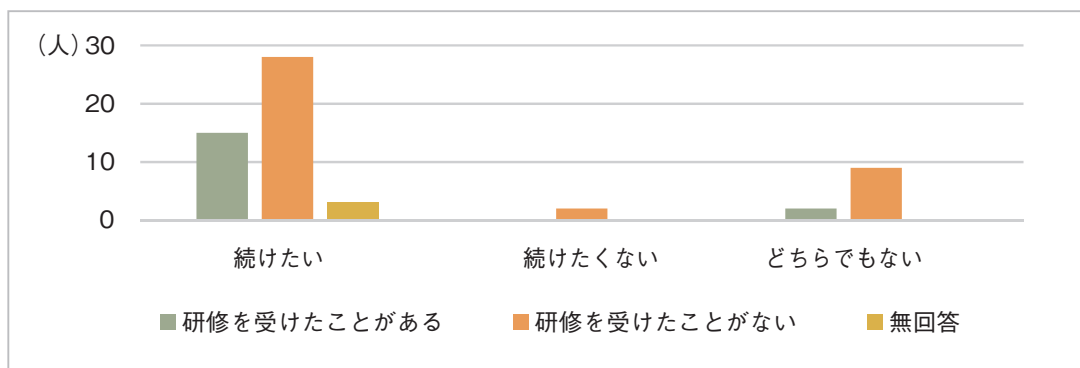


飼育技術研修を受けたことのある女性は27%。64%の女性は「受けたことがない」と回答した。

「受けたことがある」女性のうち、66.7%が「内容に満足」し、16.7%は「不満だった」と回答。

※小数点以下を四捨五入しているため、合計は100にならない

研修受講経験の影響



研修を受けたことのある人ほど「養蜂を続けたい」人が多く、「続けたくない」人はいなかった。

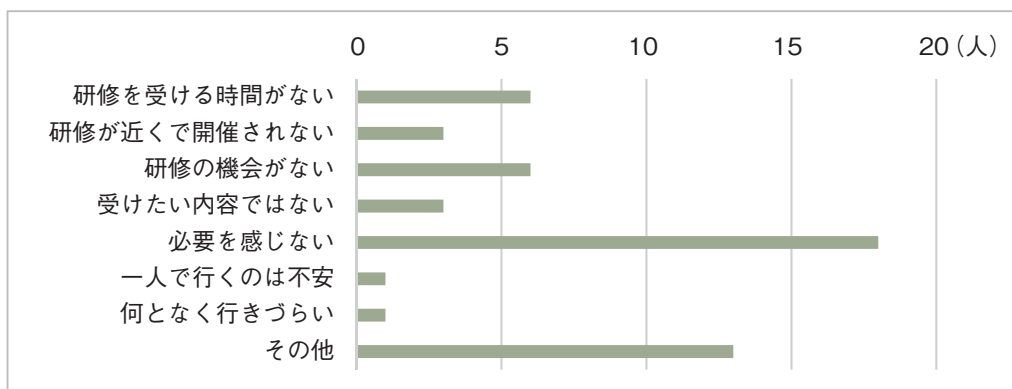
研修を受けた経験のある女性は、ない女性に比べて：

- ①養蜂全般や技術に関する情報源が多様である
- ②今後、主体となってやってみたい仕事が多い

研修受講経験の有無と情報アクセスの状況や希望

	受講経験あり	受講経験なし／無回答
人数	17人	47人
養蜂全般に関する情報や飼育技術に関する情報の取得先として挙げた情報源の数（1人当たり平均）	3.5種	1.6種
うち、地域の養蜂団体、家畜保健衛生所を挙げた人数とその割合	10人（58.8%）	4人（8.5%）
主体となって今後やってみたい仕事や、拡大していきみたい仕事とした数（1人当たり平均）	2.2種	1.1種
うち、やってみたい仕事や拡大したい仕事が「特にない」あるいは無回答とした人数とその割合	5人（29.4%）	19人（40.4%）
受けたい研修の数（一人当たり平均）	1.9種類	0.9種類
うち、受けたい研修が「特にない」あるいは「無回答」の人数とその割合	0人（0%）	22人（46.8%）

Q. 飼育技術研修を受けたことが「無い」場合、それはなぜですか（複数回答可）



「受けたことがない」女性の理由としては「必要を感じない」が最も多かった。「必要を感じない」を選んだ者18人のうち7人は他の理由も選択している。他の理由として挙げたのは、「時間がない」「機会がない」「受けたい内容ではない」「一人で行くのは不安」であった。

また、「必要を感じない」女性の多くは、今後主体となって担いたい仕事の具体的なイメージを持たないか、あるいは、商品としての蜂蜜を扱う部分を指向している（今後主体となって担いたい仕事が「特にない」あるいは「無回答」は18人中10人、同じく「商品開発」「販路開拓」「販売・PR」が7人、「社会的活動」が1人；複数回答、p.18参照）。

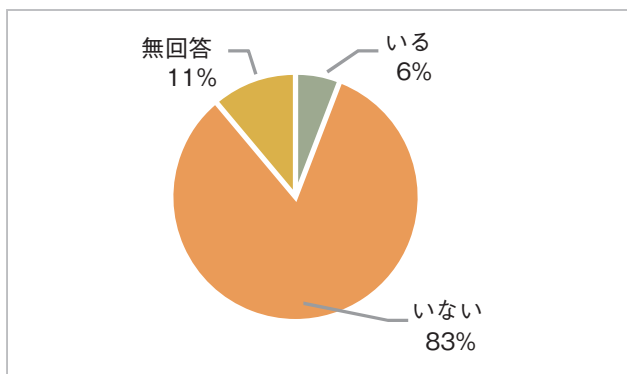
「その他」の理由としては、「夫が主体で自分は手伝い程度」「飼育には携わっていない」といったものが挙げられた。「先生を頼んでいる」という理由も1件あった。また、「幼児がおり、預けられない」という人もいる。

「研修の機会がない」「受ける時間がない」「近くで開催されない」といった理由からは、家事や育児との両立が課題となっている可能性があることがうかがえる。

「受けたい内容ではない」という理由からは、採蜜や商品販売に携わることの多い女性のニーズに対応できていない面があることが推測できる。

他の養蜂に関わる女性との関係

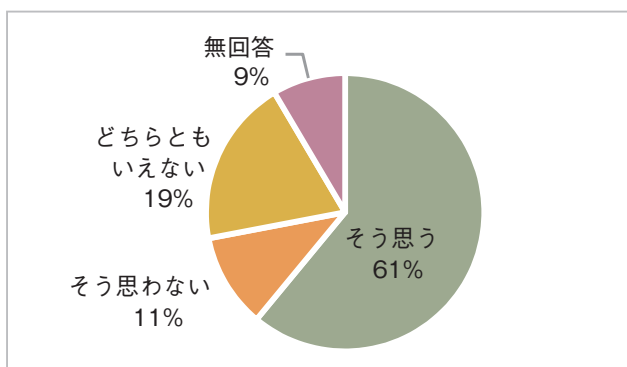
Q. 相談できる女性養蜂家（養蜂に携わっている女性）はいますか



女性の約8割には、相談できる女性養蜂家がない。女性同士で、悩みや優良事例を共有する場は限られている。

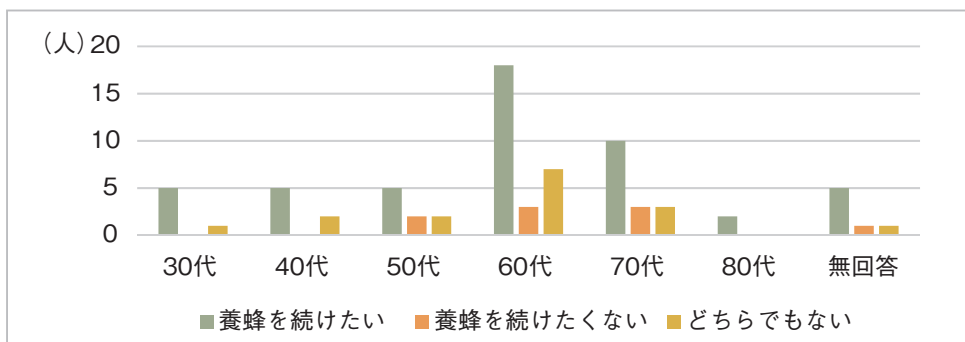
今後の希望 1（継続、内容、研修）

Q. 今後も養蜂に関する活動を続けたい、あるいは、今後やってみたいと思いますか



女性の約6割は、今後も養蜂に関する活動を「続けたい」と思っている。一方、「どちらともいえない」「そう思わない」と思う女性は3割を占めた。

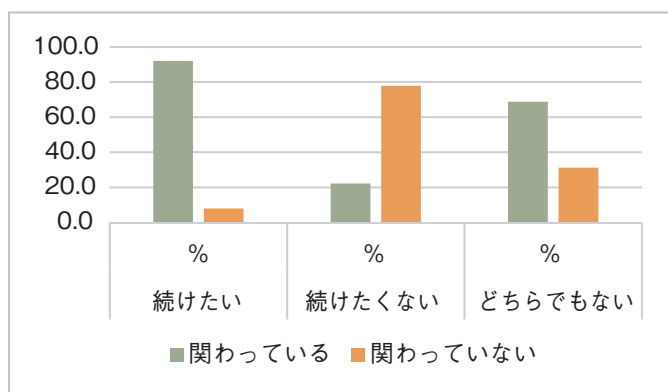
年代で見る将来への意欲



年齢別にみる継続意欲

「今後も養蜂を続けたいか」という意欲と「年齢」との関係を見ると、30～40代では「続けたくない」とする人はいない。ただし、「どちらでもない」層はあり、迷いが見られる。

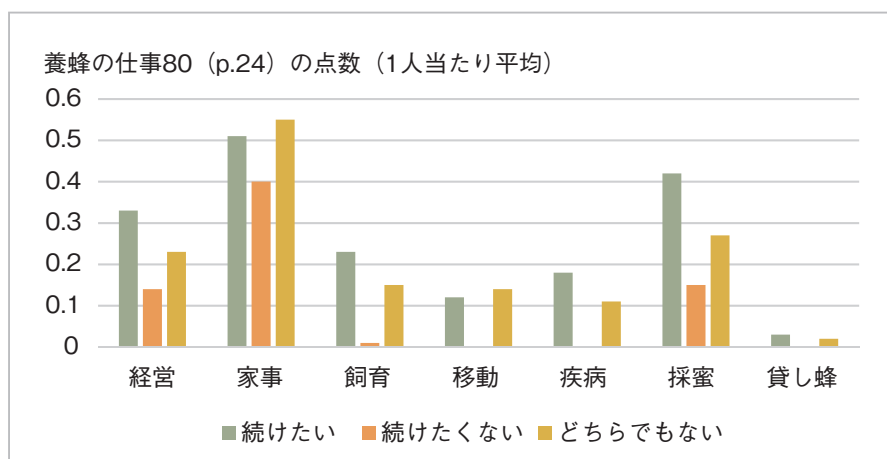
現在の関与から見る将来の意欲



現在の関与と「今後も養蜂を続けたいか」という意欲との関係を分析した。

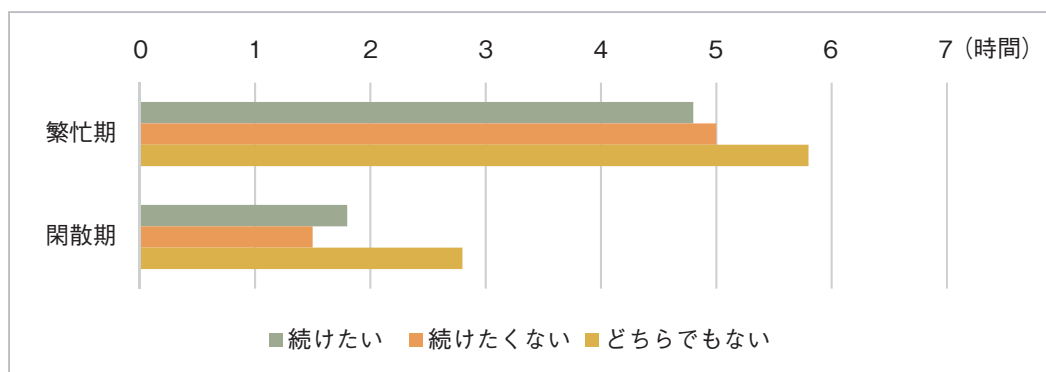
継続を希望する女性の多くは現在も養蜂に関わる人だが、現在は関与していないとした女性18人のうち2人は、今後やってみたいと回答した。

現在の関与と継続意欲



「続けたい」人の関与度が大きい部門は「家事」「採蜜」「経営」であった。ただし、家事部門では、「続けたくない」「どちらでもない」との回答も多かった。

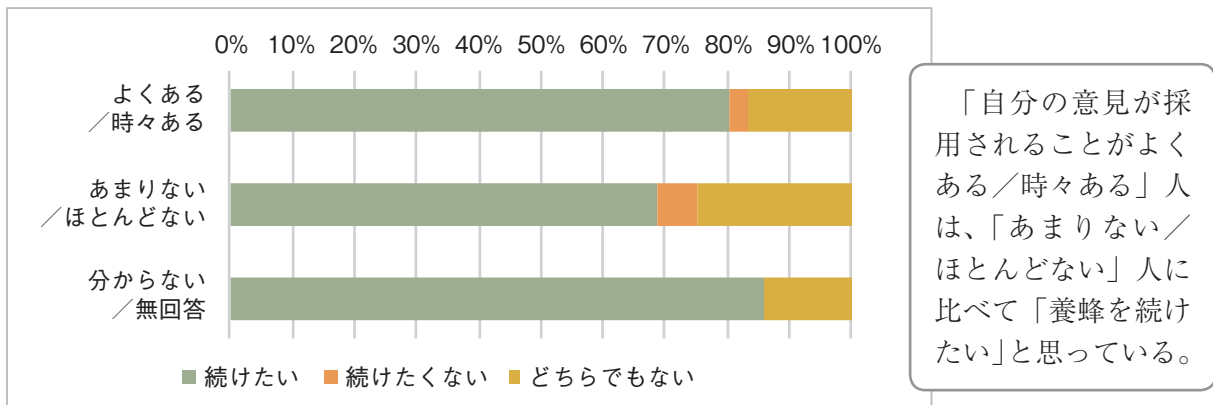
部門別にみる継続意欲



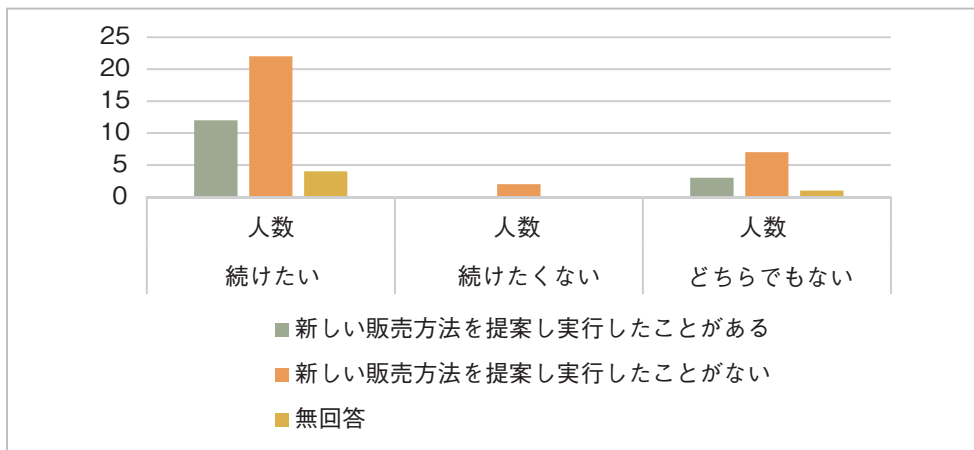
平均労働時間と継続意欲

「どちらでもない」人は、繁忙期・閑散期とも労働時間がより長く、将来への意欲が過重労働によって妨げられている可能性がある。

家事、育児、介護等を担う女性にとって、労働時間が問題となるケースが多いと考えられ、女性の貢献を得るためには、労働の在り方に留意する必要があるかもしれない。



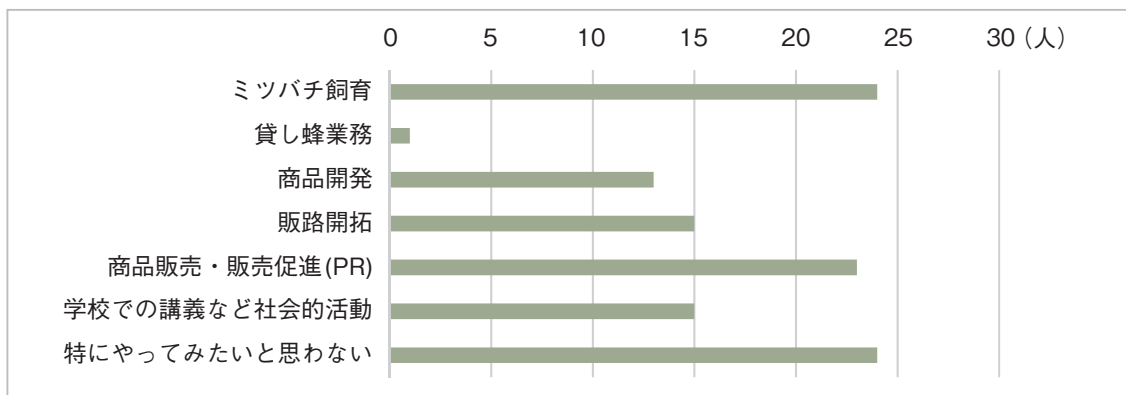
意見の採用状況と継続意欲



販売方法を提案/実行した経験の有無と継続意欲

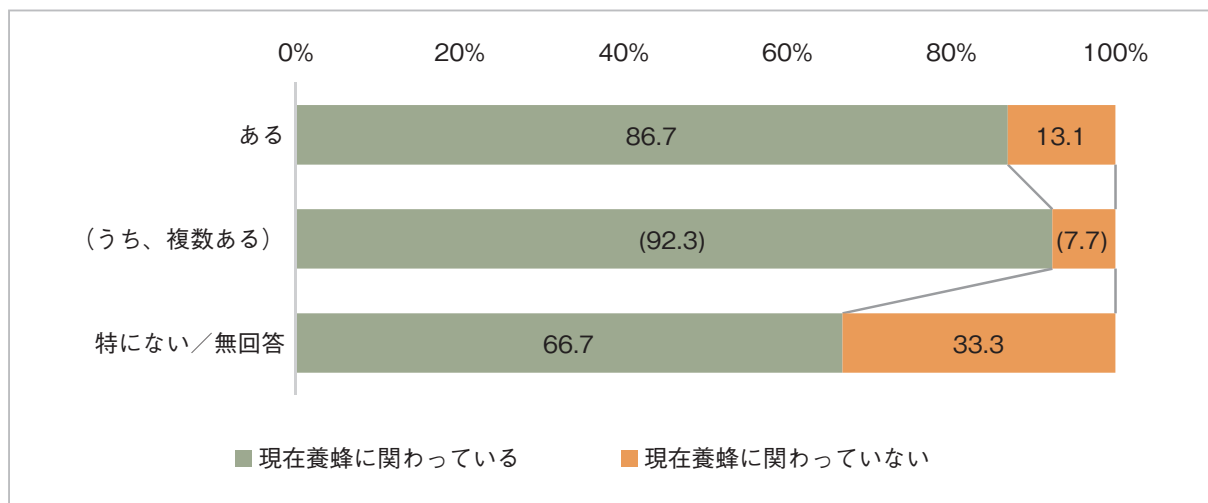
「新しい販売方法を提案・実行したことがある」人は、今後も「養蜂を続けたい」と希望する人が多く、「続けたくない」とする人はいなかった。

Q. 養蜂で、あなたが主体となって今後やってみたい仕事や、拡大していききたい仕事があれば教えてください（複数回答可）



「ミツバチ飼育」と「特にない」が同数で最も多く、僅差で「商品販売・販売促進」が続いた。

現在の関与と将来の意欲



主体となってやりたい仕事の有無と現在の関与

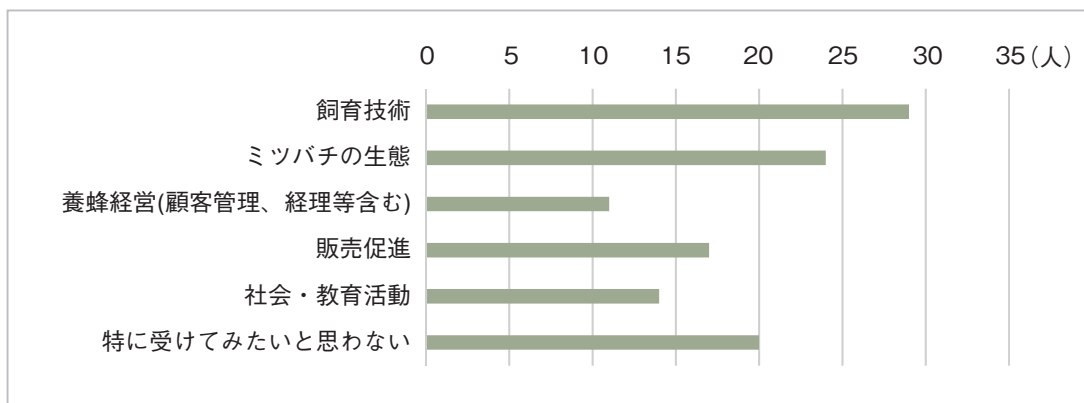
現在関わっている人ほど、「主体となってやりたい仕事・拡大したい仕事」があり、そうした仕事が「複数ある」と回答している。

今後も養蜂に「関わりたい、続けたい」と希望する女性は平均1.6種の仕事を、「どちらともいえない」とした女性も、平均0.7種の仕事をやってみたいと回答した。

養蜂継続・実施の希望と具体的な仕事の希望

今後も養蜂を続けたいか	続けたい	どちらでもない	続けたいと思わない/無回答
選択した人数	50人	16人	16人
うち、現在、養蜂に関与している人数	46人	11人	7人
うち、現在、養蜂に関与していない人数	4人	5人	9人
「自分が主体となってやりたい/拡大したい」と選択した仕事の数	1.62種	0.69種	0種

Q. 受けてみたい研修がありますか、ある場合それは何についてですか（複数回答可）



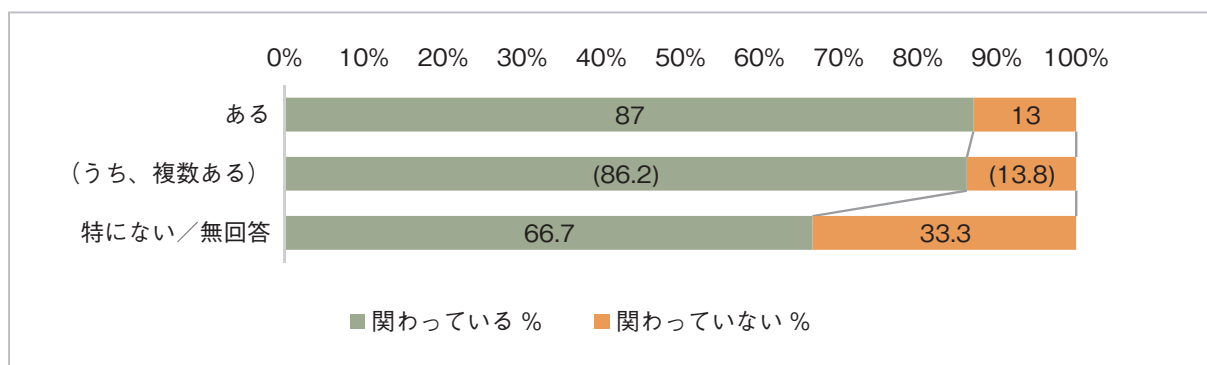
受けたみたい研修のテーマは「飼育技術」が最も多く、次に「ミツバチの生態」「販売促進」が続いた。女性は、現状では販売分野での関与が大きいですが、飼育部門やミツバチそのものにも関心があることが窺える。

販売促進や社会・教育活動への関心も高い。

ただし、「特に受けてみたいと思わない」との回答も20件ある。

技術研修を受けた経験がある女性は、全員が何らかの研修受講を希望しており、かつ、受けた経験がない人と比べて、より多くのテーマに関心を持っている（p.15「研修受講経験の有無と情報アクセスの状況や今後の希望参照」）。

現在の関与と研修意欲



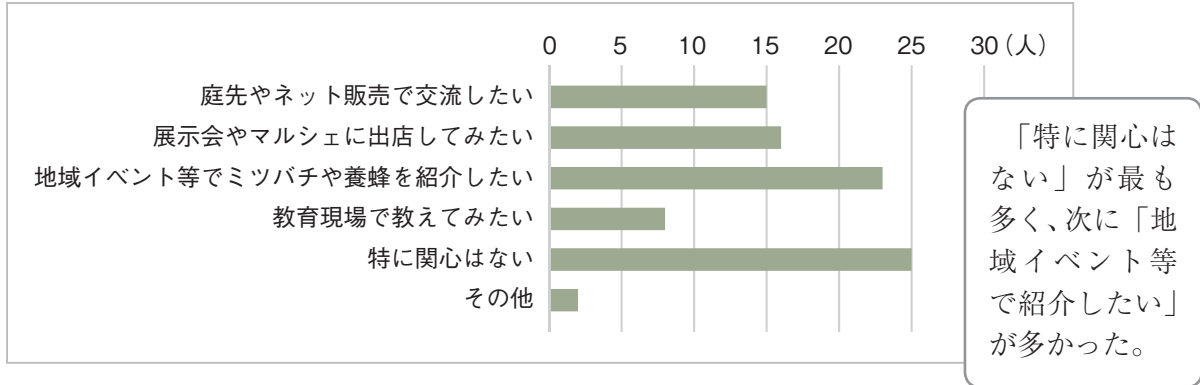
現在の関与と研修意欲の有無

現在関わっている人ほど、受けてみたい研修があり、希望する研修テーマが複数ある。

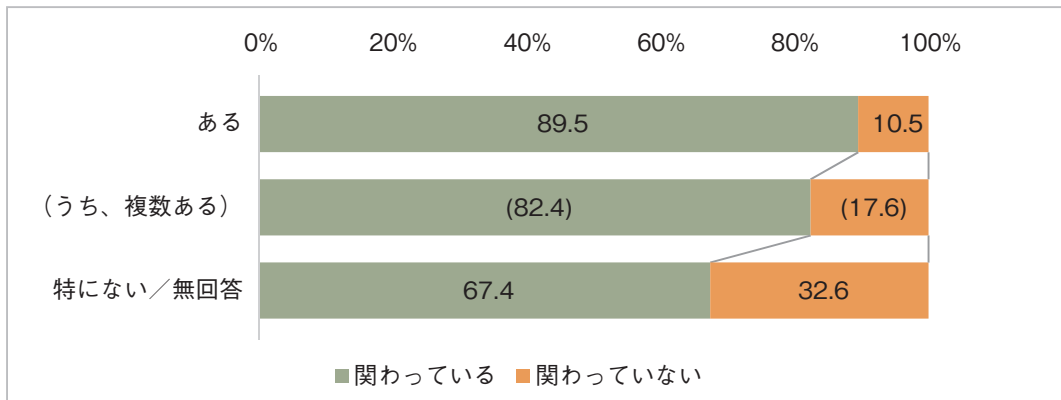
現在関わっている人ほど、知識の吸収にも意欲的で、勉強したいことも多いといえる。

今後の希望 2 — ネットワーク

Q. 下記のような消費者との交流に関心がありますか（複数回答可）



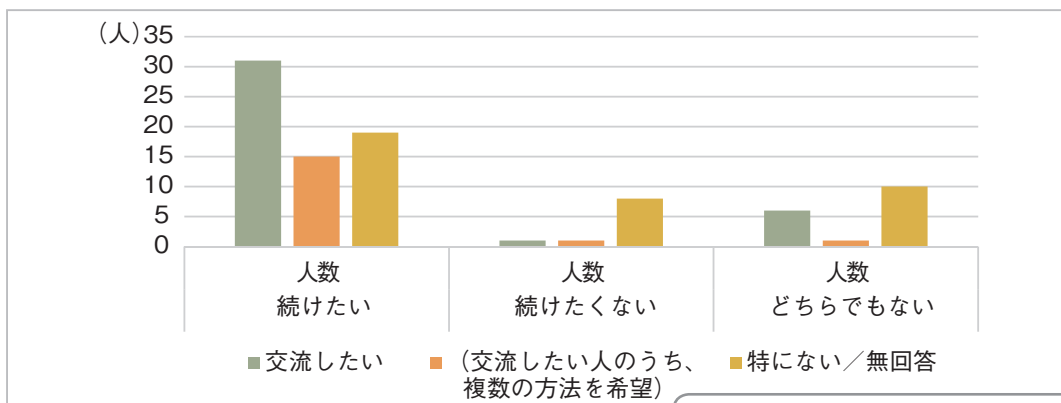
— 現在の関与と意欲



現在の関与と消費者交流への関心

現在関わっている人ほど「消費者との交流に関心がある」と回答。現在関わっている人は、消費者への情報発信を担う人材かもしれない。

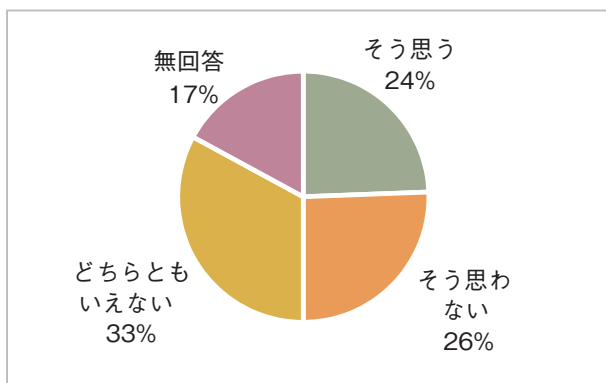
— 将来の意欲



継続意欲と消費者交流への関心

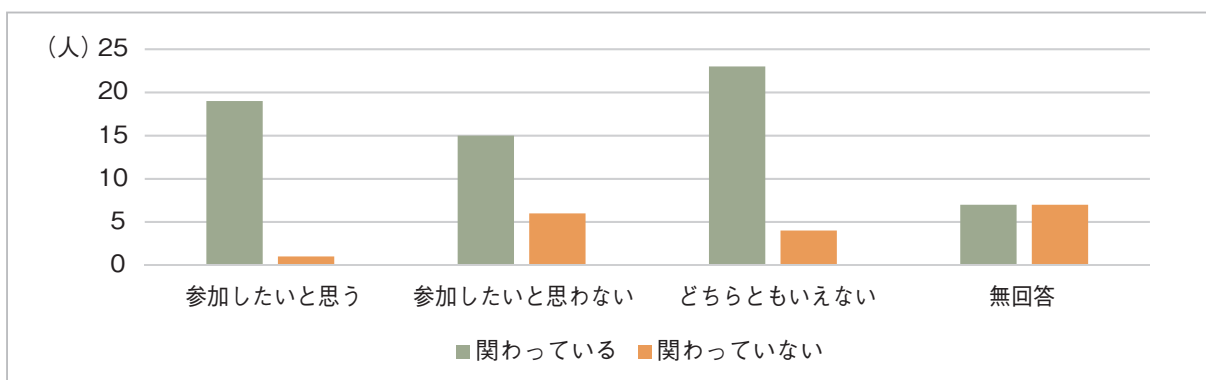
「養蜂を続けたい」人は、「消費者と交流したい」と思っている人が多い。

Q. 今後、女性養蜂家を対象としたイベント等があれば、参加したいと思いますか



「そう思う」「思わない」「どちらともいえない」がそれぞれ2.5割～3割を占め、回答が分かれた。

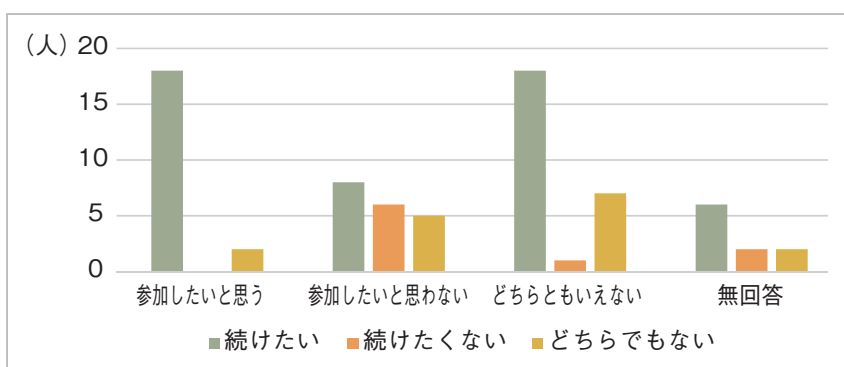
— 現在の関与と女性イベントへの関心



現在の関与と女性向けイベントへの関心

現在関わっている人が「女性養蜂家対象のイベントに参加したいか」については、「どちらともいえない」が最も多いが、「そう思う」「思わない」も一定数おり、女性を前面に出したものには迷いが見られる。しかし、「参加したい」人の中では、現在関わっている人が圧倒的に多い。

— 将来の意欲



「養蜂を続けたい」と思っている人は、「女性養蜂家イベントに参加したい」とどちらともいえないが多い。「そう思わない」と「無回答」は少数派である。

継続意欲と女性向けイベントへの関心

今後の希望 3 — 改善の希望

Q. あなたが養蜂に関する活動を行う、あるいは、拡大するとしたら、何が問題ですか。家内の仕事を含めて、改善したい点、不満な点などがあれば教えてください

〈家事・子育て・他の仕事との両立〉

- 子供が小学生なのでまだ親の手が必要。朝、夕、夜のミツバチの移動時間が大変（家の仕事の時間と重なる）
- 内検など一定の時間がかかる作業は、幼児をかかえて一人では無理がある。夫はサラリーマンなのでふだんは不在であるため、飼育に関わるができない
- 他に仕事がある
- 場所の確保が問題
- 週末の土日は、休みが休みでなくなってしまう。収穫の喜びはとても大きいですが、兼業でやるのはけっこう大変
- 家事、外でのパート仕事以外の時間で手伝いをしているので、これ以上の負担は体力的にもきびしい
- 理解力、協力のあるパートナーが必要。家庭や子供を持っていたら難しい

〈重労働〉

- 蜂の飼育にしても、蜂蜜のビン詰め作業にしても、重いのが難点。重い物の持ち下げを手助けできる器械があればと思う
- あまり体力もないので炎天下での蜂の世話は、とても大変。1人では無理
- 重労働の為、1人だけでは難しさを感じます

〈販売〉

- 拡大したらしたで、販売ルートを見つけるのが大きな問題
- 販路拡大と価格

〈その他〉

- 天候に左右される仕事なので予定が読めない。お金がかかる
- 仕事の効率化、役割分担、社員同士の協力が必要

養蜂の仕事80

「主に自分（女性）が実施している」「誰かと協力しながら実施している・相談しながら実施している」「誰かを手伝っている」「他の人がやっていて、自分はやっていない」「作業が該当しない（無回答含む）」からそれぞれ1つ選択。それぞれに係数を掛けて、点数化し、女性の関与度を計った。

各項の係数は下記の通り。

1. 「主に自分（女性）が実施している」×1
2. 「誰かと協力しながら実施している・相談しながら実施している」×0.8
3. 「誰かを手伝っている」×0.5
4. 「他の人がやっていて、自分はやっていない」×0
5. 「作業が該当しない／無回答」×0

40点以上
30-40点
20-30点
10-20点
1-10点
0-1点

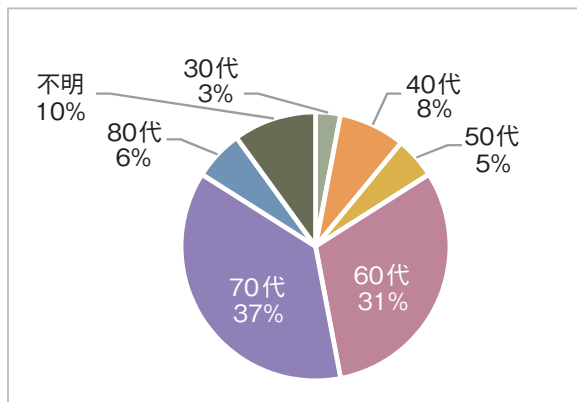
経営・販売	何を販売するか決める	どこに販売するか決める	いくらで販売するか決める	採蜜したハチミツを保管する	包装容器を調達する	ハチミツをびん詰める	マスク・衛生帽等を準備する	ラベルのデザインを決める
	29	31.7	30.8	28.4	28.9	41.4	36.5	34
	ラベルを貼付する	お客様に販売する	伝票を作成する	委託先と交渉する	商品在庫を管理する	蜂群の購入を決める	実際に蜂群を発注する	納品された蜂群を受取る
家事	42.3	44.8	28.6	15.6	29.6	9.6	8.1	9.2
	今年度の経営方針を決める	従業員の勤怠管理を行う	経理事務を行う	確定申告の準備をする	確定申告書を提出する	HPを作成・更新する	SNSで発信する	養蜂協会の会合に出席する
	11.6	5.9	17	17.4	13.9	6.9	6.3	5.4
飼育	作業に合わせて食事を作る	作業に合わせて配膳する	作業に合わせて食事を片付ける	作業に合わせて洗濯する	作業に合わせて掃除する	作業に合わせて日用品を調達する	状況に応じて家計をやりくりする	隣近所との付き合いに気を配る
	42.3	35.7	40.1	41.3	38.8	37.1	37.4	37.5
	内検する	巣を合同する	巣箱を保温する	巣箱の保温材を取り除く	建勢のタイミングを決める	給餌する	給餌用の花粉や糖液を準備する	継箱を乗せる
移動	13.5	13.1	13.8	13	10.6	15.7	17.6	14.4
	新しい女王バチを作る	育成箱を準備する	巣板・巣箱を清掃する	巣板・巣箱を保管する	ハイブツールを点検・保管する	蜂場を清潔に保つ	保管場所を清掃・整頓する	作業記録を整理する
	13.3	14.3	15	14.5	11.9	13.9	16.7	9.6
疾病	届出書類を作成する	届出書類を確認する	巣箱を運搬用に荷造りする	巣箱をトラックに運ぶ	巣箱を荷台に積む	転出先蜂場を整える	移動のため運転する	転出元蜂場を片付ける
	7.2	7.2	6.4	10.2	10.4	5.1	9	8.5
	病虫害の情報を収集・共有する	薬剤の購入を決める	薬剤を発注し、受取る	薬剤を保管・在庫管理する	薬剤を使用する	異常な巣を抜く	疾病管理を記録する	家畜保健衛生所に連絡する
採蜜	10.4	10.7	11.4	10.4	11.8	12.3	9.6	10.1
	採蜜のタイミングを決める	採蜜する巣を抜く	採蜜する巣を運ぶ	分離機を回す場所を清潔にする	分離機にかける	分離機を保管・管理する	蜜蓋を切る	切った蜜蓋を処理する
	13.1	17.5	25.2	34.2	38.6	27.2	33.1	28.5
貸し蜂	農家から注文を受ける	顧客管理を行う	蜂群の貸し出し計画を作る	蜂群を配達する	蜂群を回収する	伝票を作成する	農家に蜂群の扱いを伝える	農家から相談を受ける
	3.7	3.4	1.3	1.8	0.8	3.1	0.5	0.5

2 | アンケートⅡ 養蜂事業の概要

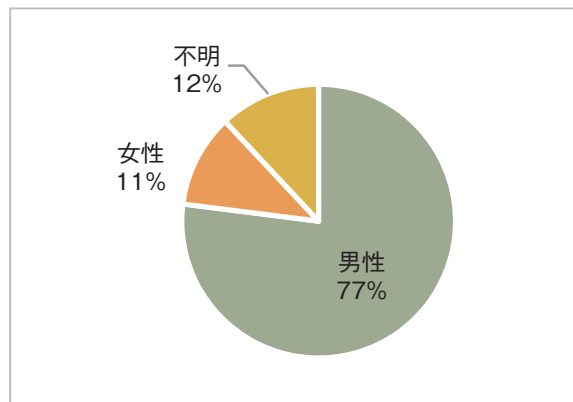
飼育関係者（男女いずれか）に対し、養蜂経営の実態を尋ね、90名から回答を得た。

回答者の年齢は、60代以上が74%を占めた。

回答者の性別は、男性が77%を占めた。



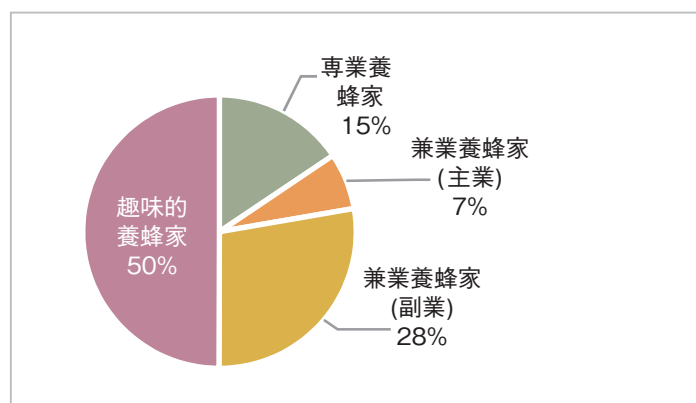
回答者の年代



回答者の性別

養蜂形態について

Q. 最もあてはまる養蜂形態は何ですか（1つ選択）

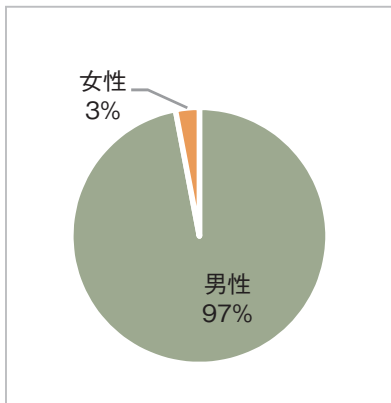


「趣味的養蜂家」と「専業・兼業養蜂家」がそれぞれ半数を占めた。

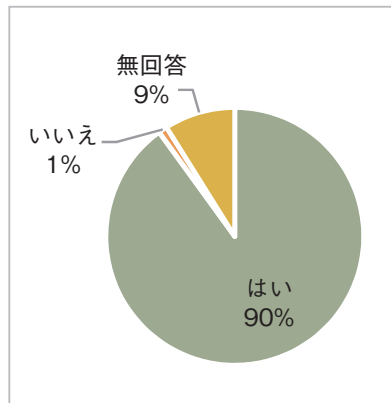
届出者について

Q. 飼育届出者は誰ですか

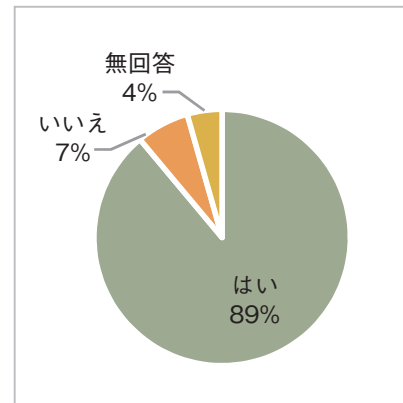
- 飼育届出者の性別は何ですか
- 飼育届出者は実質的な経営主ですか
(趣味的養蜂家の場合は届出者は飼育責任者ですか)
- 届出者は世帯主ですか



飼育届出者の性別



届出者は実質的な経営主か

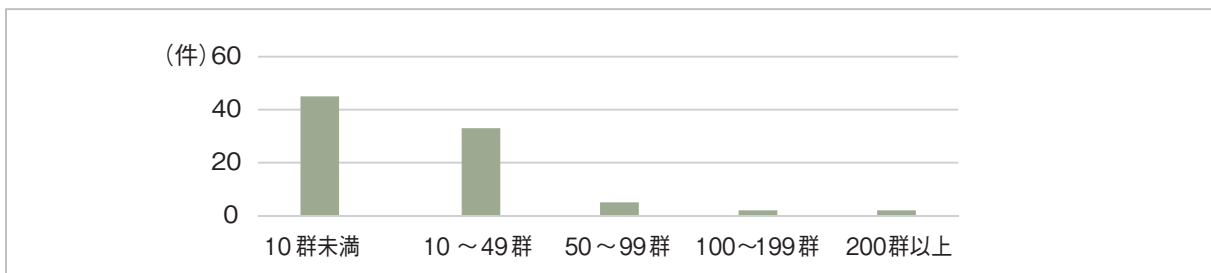


届出者は世帯主か

飼育届出者の性別は男性が97%と圧倒的に多く、そのうち約9割が「実質的な経営主」であり、「世帯主」である。

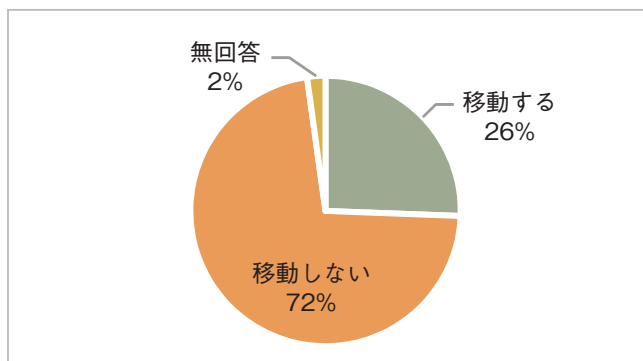
飼育概要——蜂群数、移動、経験

Q. 届出蜂群数は何群ですか (2018年1月1日時点)



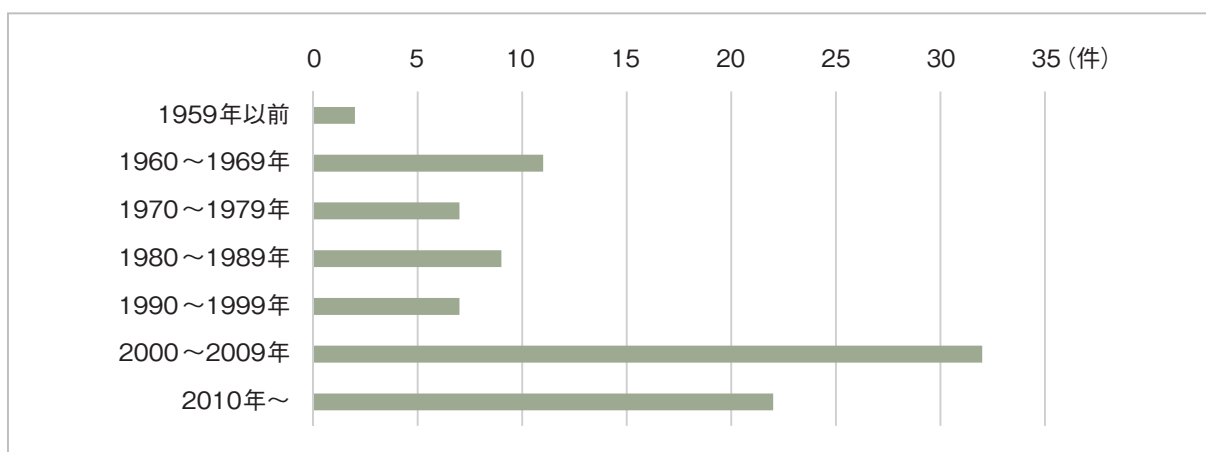
10群未満が最も多く5割余りを占め、次に「10～49群」が多い。100～199群は2軒、200群以上も2軒であった。

Q. 蜂群の移動はありますか



「蜂群を移動しない」人が約7割を占めた。

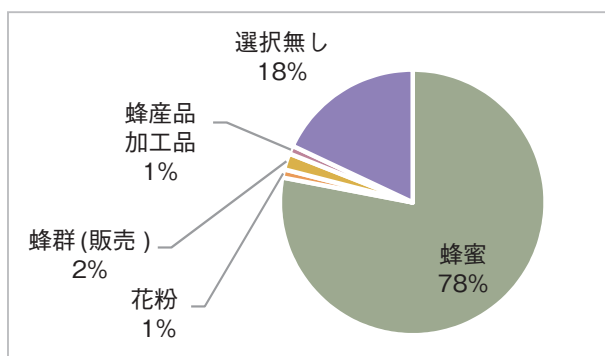
Q. 養蜂を始めたのはいつ頃ですか



「2000年以降」が最も多く、6割を占める。

生産物、販売、売上金

Q. どんな生産物（商品）を扱っていますか（該当する項目を○で囲む。複数回答有）
そのうち、主たる産品／商品は何ですか（1つに◎）

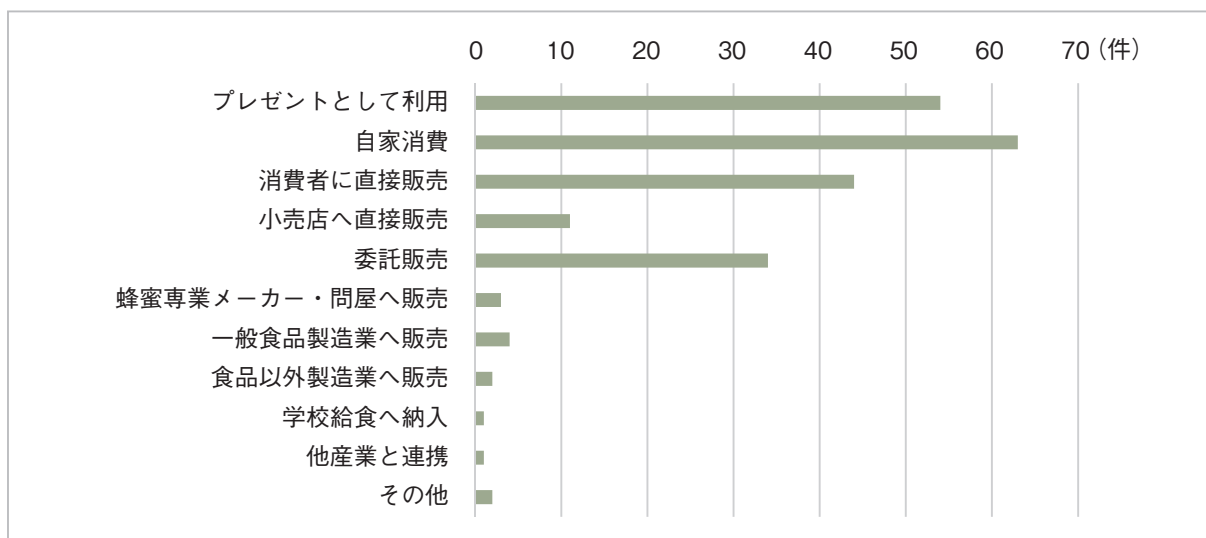


主たる生産物は「蜂蜜」が78%で最も多い。

なお、主たる生産物か否かを問わず、蜂蜜を扱っていると回答しなかったのは、90軒中6世帯／法人のみ。

主たる生産物

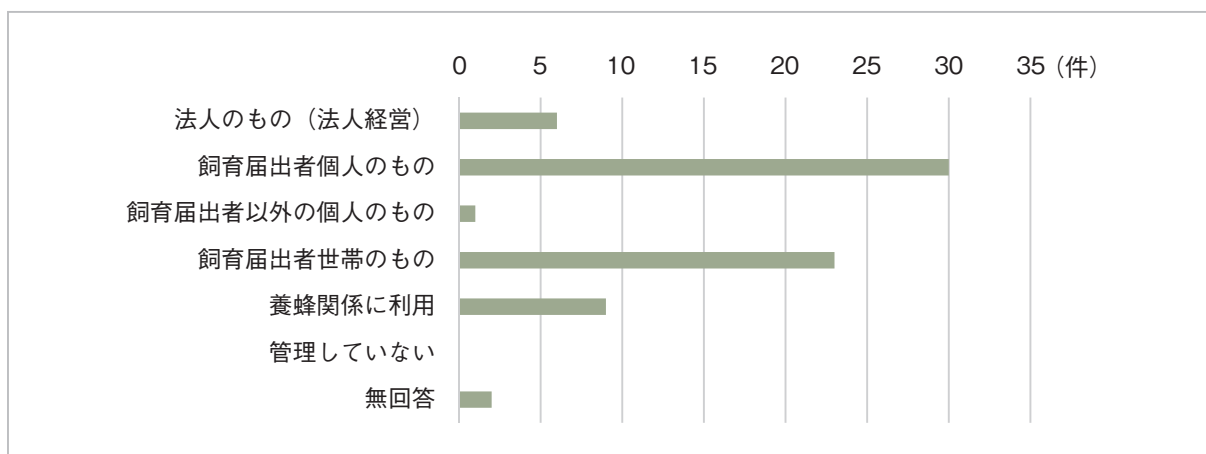
Q. 採った蜂蜜をどうしていますか（複数回答有）



「自家消費」が最も多く、次に「プレゼントとして利用」「消費者への直販」「委託販売」が続いた。回答者の半数が趣味的養蜂であることが反映されていると推測される。

なお、「アンケートⅠ 養蜂への女性の関わり」からは、採蜜以降の川下への女性の関与が大きいことが明らかになっている。

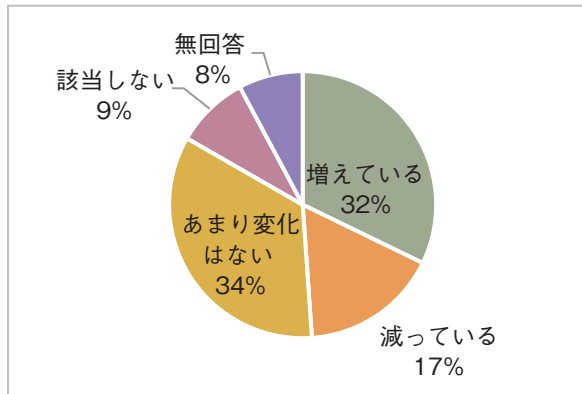
Q. 販売している場合、その売り上げは誰のものになりますか



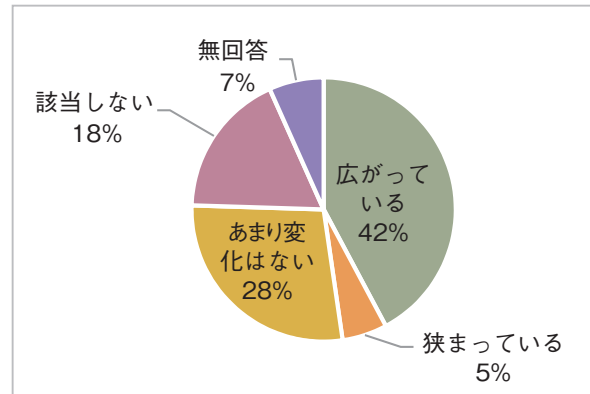
売り上げの帰属は、「飼育届出者個人」が最も多く、次に「飼育届出者世帯」が続いた。趣味的養蜂が半数であることが、結果に影響していると考えられる。

5年前との変化——収入、多角化

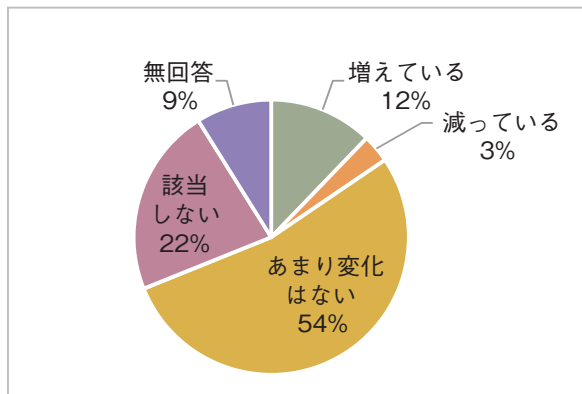
Q. 5年前と比べて、飼育群数は増えていますか



Q. 5年前と比べて、売り先や買ってくれる人は広がっていますか



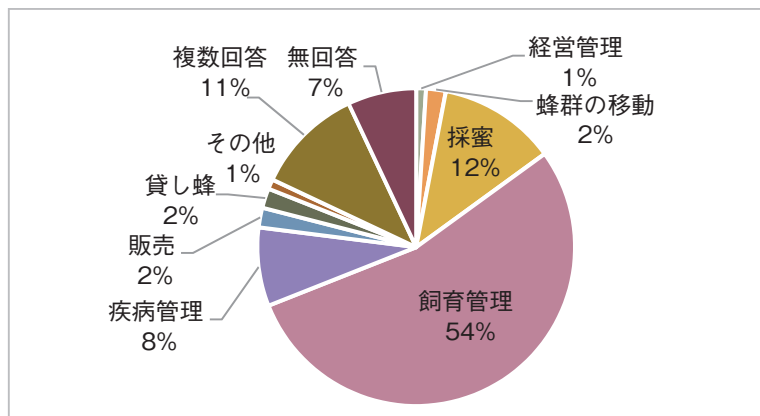
Q. 5年前と比べて、扱う生産物や商品の種類は増えていますか



5年前と比べて「飼育群数が増えている」人は約3割、「売り先や買ってくれる人が広がっている」人は約4割、「扱う生産物や商品の種類が増えている」人は1割余りであった。

労働負担、労働力

Q. 養蜂に関する仕事で、最も負担が大きいものは何ですか（1つ選択）

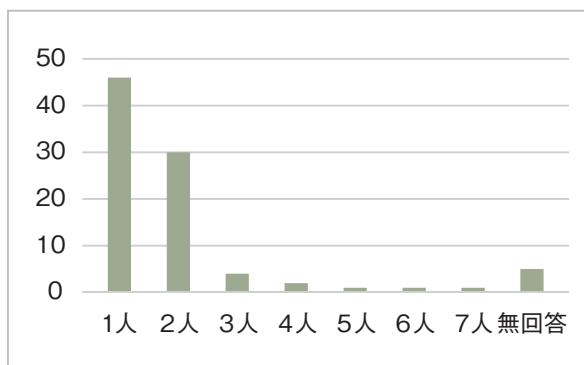


「飼育管理」54%、「疾病管理」8%で、飼育関連が約6割を占めた。一方、女性の関与が大きい「採蜜」も12%を占めた。

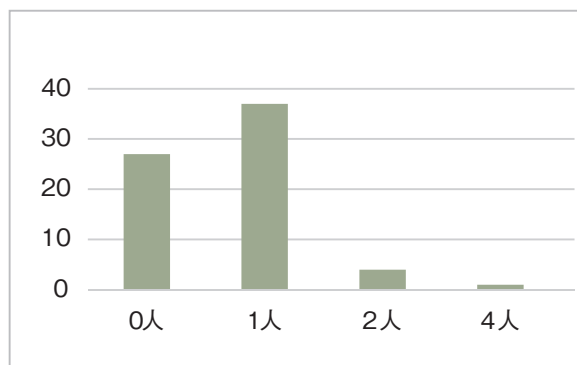
飼育部門の比重が高いのは、飼育責任者であることの多い男性が回答者の8割を占めていることが影響している可能性もある。

今回のアンケート調査では、蜂群移動を行う養蜂家は4分の1にとどまることが、蜂群の移動を挙げた養蜂家が2%にとどまった理由の一つと考えられる。

Q. 労働力は何人ですか



Q. —そのうち、女性は何人ですか

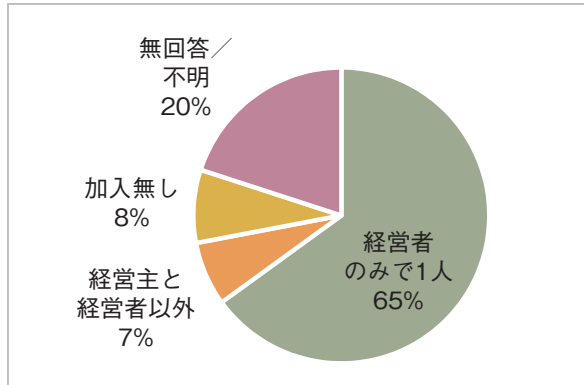


労働力は「1人」が最も多かった（46件）。労働力を1人とした46件のうち、26件は女性の労働力を「0人」と回答。無回答は16件。合計42件は男性が1人でやっているケースだと推察される。

ただし、アンケート回答者の8割近くが男性であること、および、アンケートIによると、女性0と答えた26件のうち5件は女性が養蜂に関与していると回答していることから（4件では女性は「養蜂に関与している」と回答、他の1件では「養蜂の仕事80」で“家事”以外も選択）、女性の労働が認識されていない可能性もあることが示唆される。

団体登録について

Q. 地域の養蜂団体に参加している場合、登録メンバーは誰ですか



90件の回答のうち、「加入していない」としたのは7件。

明確に「加入している」とした回答者では、「経営者のみで1人」との回答が最多で59人、65%を占めた。

「経営主と経営者以外」が6人。女性が登録している、との回答があったのは、このうち4件（4人）のみだった。

経営の課題

Q. あなたの養蜂に関する課題は何ですか、将来の希望や計画は何ですか [自由記載] (抜粋・要約)

〈飼育技術・疾病対策〉

- 飼育を始めて日が浅いので飼育技術の確立をめざしたい
- 満群にする方法
- ダニの消毒、病気等の対処
- ダニ対策と増群。採蜜で蜂分けが遅れるので蜂分けを早める
- 病気に強い蜂づくりと地域と密に関わり合う養蜂
- ミツバチヘキイタダニの防除。ダニ類は世代交代が早いので防除薬をローテーションでつかう必要がある。防除薬を多種、認可してもらいたい
- 越冬、ダニ強群の安定化
- 将来西洋ミツバチが薬剤耐性を獲得してしまい、さらに薬剤の使用量が多くなって行くのが心配
- 蜂蜜の品質の向上。1群当り採蜜量の向上。優良な蜂群の養成を図る。養蜂知識技能の向上を図る

〈蜜源・環境〉

- 春の短期間しか蜜がとれない。増やしたいがエサ代が大変
- 農地のため、蜜源が少ない
- 自然の変化、ミツバチの生活状況の変化により、毎年、対応を変えなければならないこと。管理方法の基準化を進め、管理の手間を少なくしたい。道具の改善や蜜源の確保等、取りまく環境の改善を図り、安定した収入を得られる養蜂業を目指したい

- 拡大したいが、蜂場がないこと
- 養蜂にとって条件が良い場所（養蜂場）を探すこと
- 飼育場所の確保とトラブル時の転置場所の確保
- 蜜源の確保と拡張

〈労働力〉

- 労働力の確保（夜中の移動）
- 年齢のこと、重い作業が多いこと、暑さの中での作業であること等々。夢中になりすぎずに続けていきたい
- 現在は、サラリーマンのため土、日しか養蜂の仕事ができないが、退職後は、養蜂業で生計を立てたいと思っている
- 主業の野菜農家が忙しく、養蜂に多くの時間を取れないこと
- 農業、造園業との複合経営であることから、ミツバチの飼育管理が行き届かない。将来的には、経営形態を絞らないとならないと考えている

〈販売〉

- ハチミツ販売経路の確保
- 販路と価格
- 蜂蜜加工品の開発
- 自家製野菜とハチミツのコラボ商品の開発・販売

〈その他〉

- 後継者がいないこと。養蜂のすばらしさをもっと知ってもらいたい
- 養蜂家の育成
- 盗難（ミツバチ泥棒、年10回程有）

Q. 日本の養蜂に関して、課題やあるべき姿は何だとお考えですか [自由記載] (抜粋・要約)

〈蜜源・環境〉

- 蜜源の問題、蜜源不足
- ミツバチ用の薬の少なさ
- 農薬だけではなく、給餌に依存することも、蜂には良くないのではないかな？
- 農薬への考え方が人間中心すぎる。蜂がいなければ農業生産にどれくらいダメージになるのかをもっと広く周知すべき
- 蜂生産物の医療分野での活用をもっとすすめるべきと思う

〈飼育技術〉

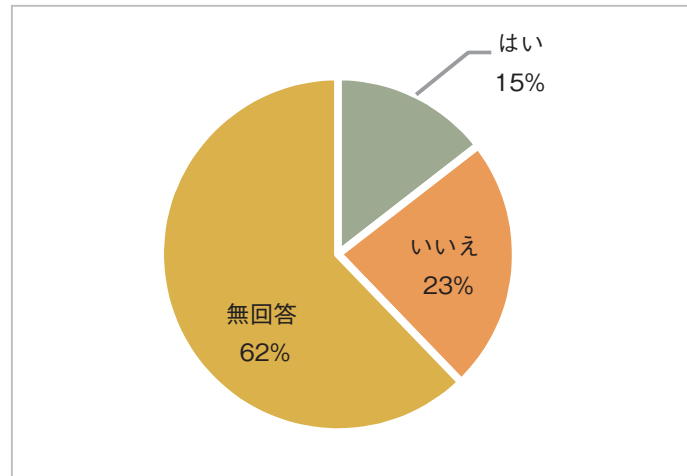
- 日本の養蜂スタイルを、ミツバチの生態に促した、養蜂の基本に沿う養蜂形式に改めたい

〈コスト〉

- 資材が高価
- ダニ対策、飼料などが安価ではない、薬も高く、コストがかかりすぎる

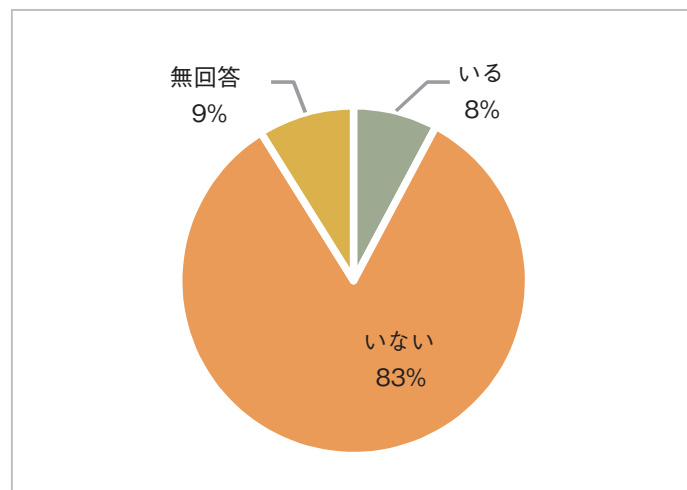
法人、後継者について

Q. あなたの養蜂経営が法人経営である場合、申告は青色申告ですか



「青色申告」と答えた経営体は15%であった。

Q. 後継者はいますか

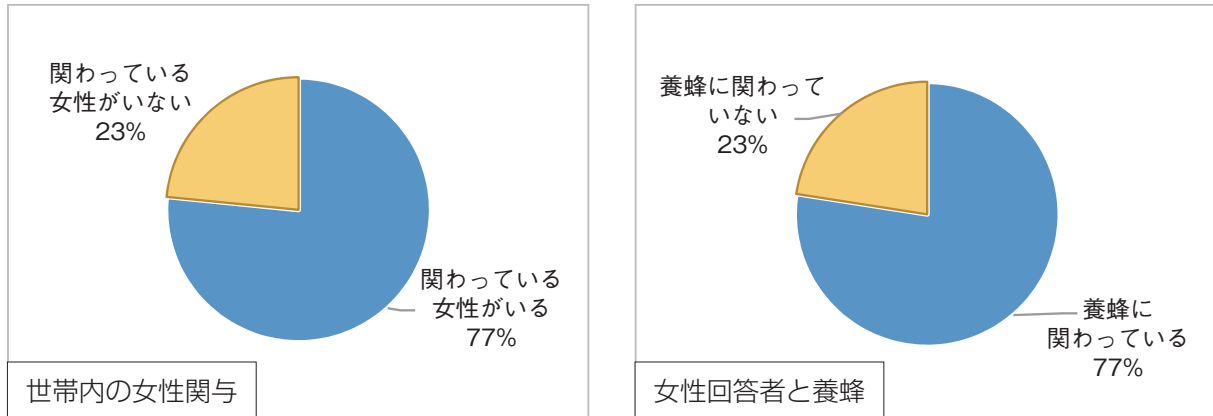


「いる」が8%、「いない」が83%であった。

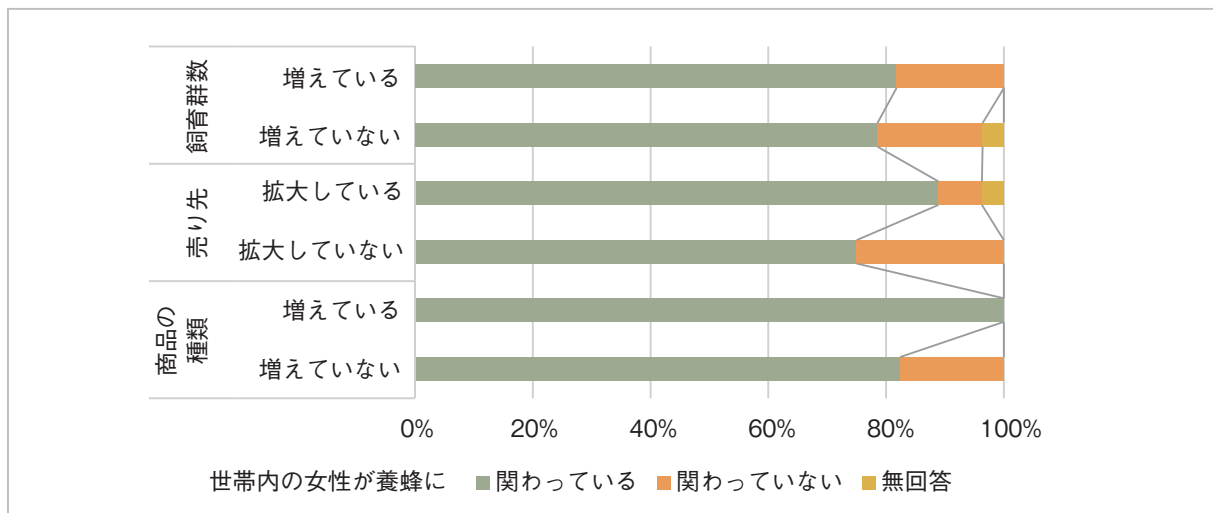
3 | 経営拡大と女性の貢献

アンケートⅠとアンケートⅡ両方を回答した共通回答者の回答結果〔64世帯（女性回答者71人*）〕から、それぞれの養蜂経営における女性の役割・貢献を見てみる。

アンケートⅠとアンケートⅡ両方を回答した64世帯、女性回答者71人の背景

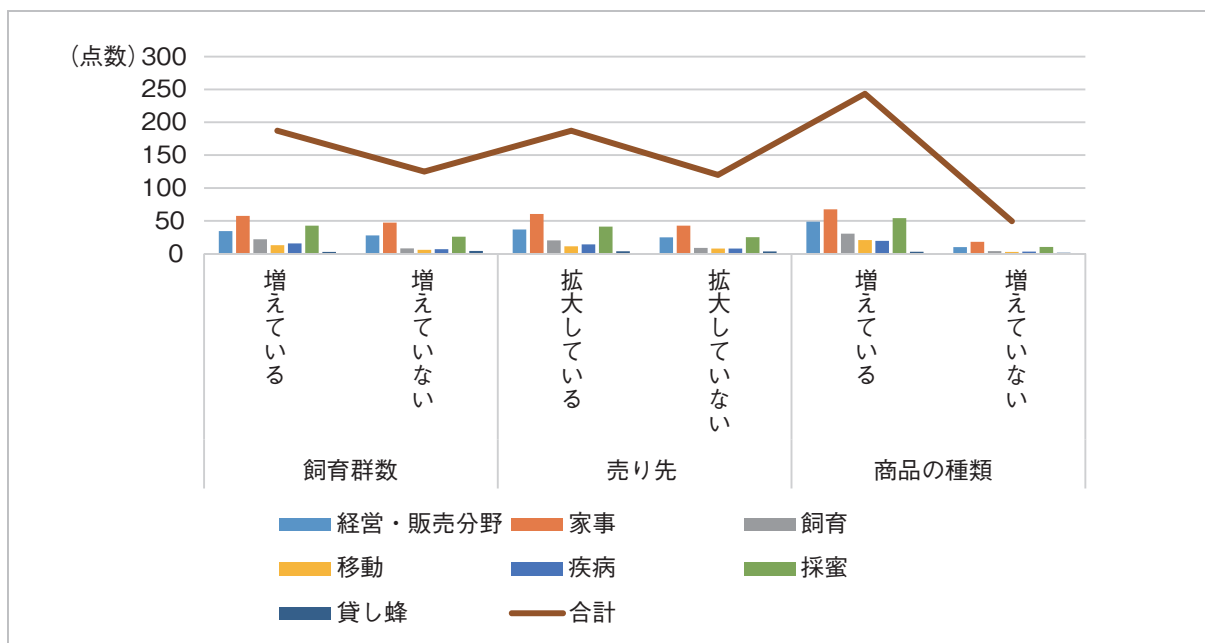


1) 女性の関与と経営拡大の傾向



女性の関与の有無と経営拡大

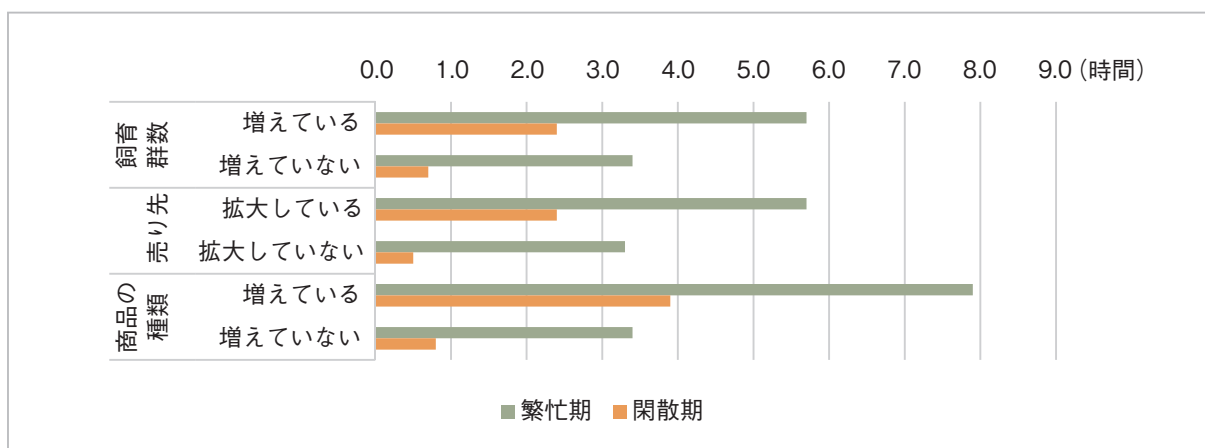
*同一世帯内に女性が複数いる場合、複数の女性から回答を得た。



分野ごとの貢献度と経営拡大

※養蜂への貢献度指数（タスク80）——分野ごとの平均点数（主体的に関与を1点、協力しながら実施を0.8点、手伝いを0.5点として配分としたものを、該当人数で割り、便宜的に100を掛けたもの）——と経営拡大との関係を示した

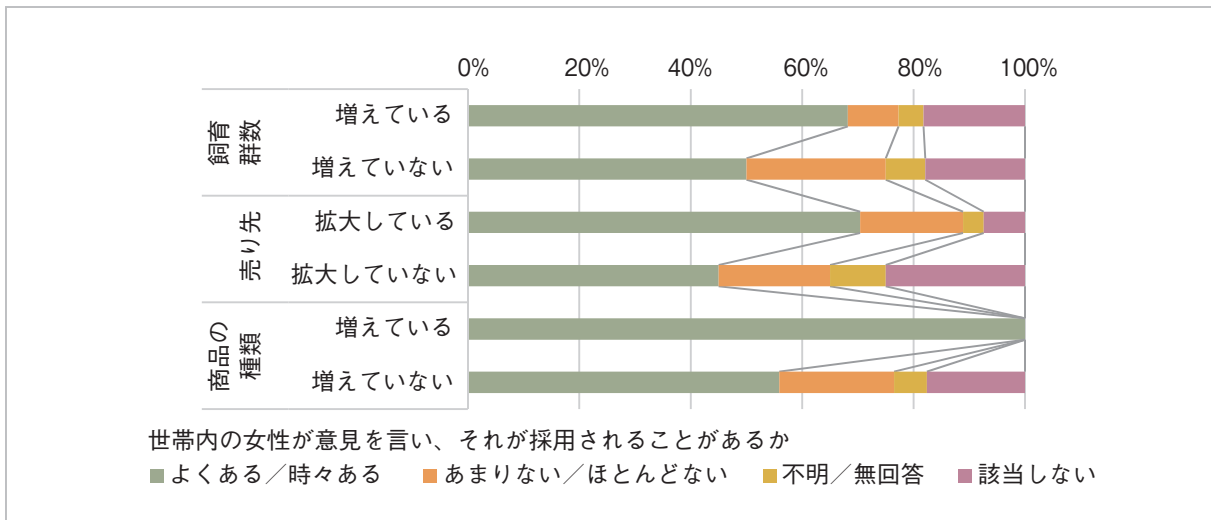
女性の関与度と「飼育群数・売り先・商品種類の拡大」との関係を見ると、女性が関与している養蜂経営（家）ほど拡大している傾向にある。



経営拡大と平均労働時間

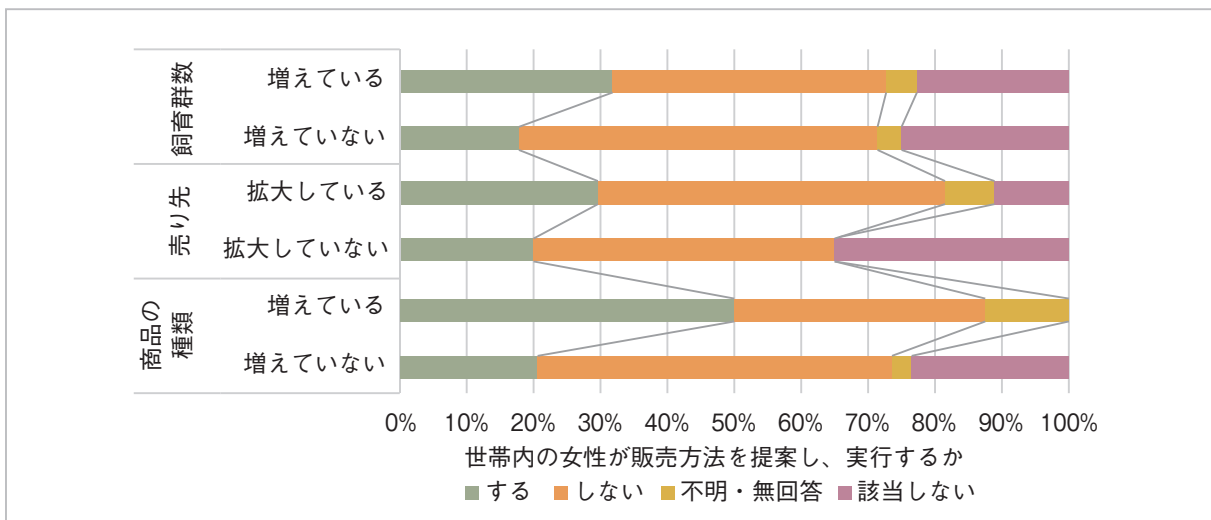
女性の平均養蜂労働時間と、「飼育群数・売り先・商品種類」の拡大にも正の相関関係が見られる。

女性の労働を得られるか否かは、経営の拡大に影響すると推測できる。



経営拡大と女性の参画

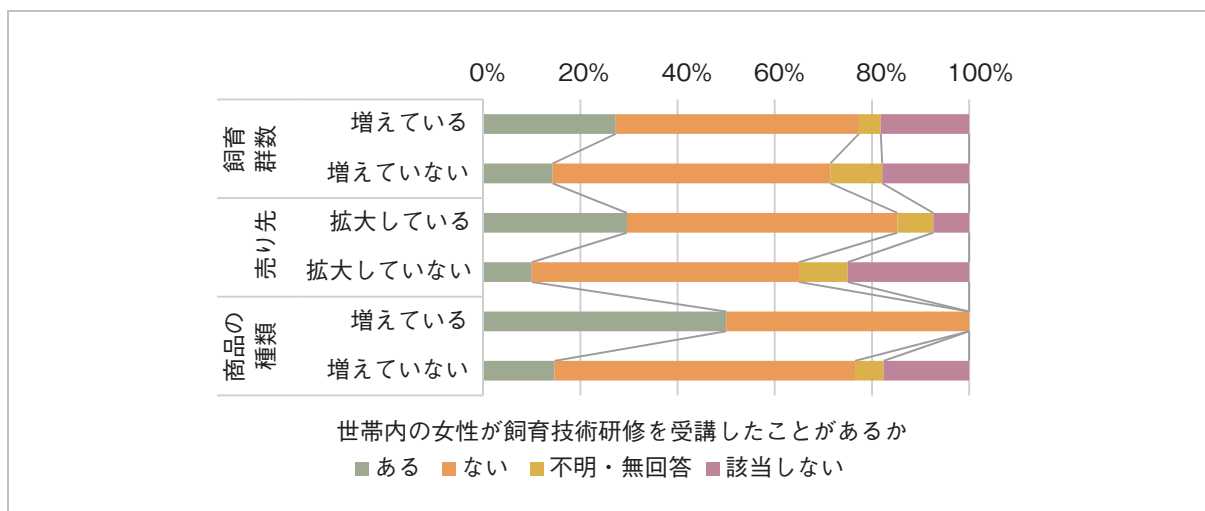
女性が意見を言い、それが採用されることと、「飼育群数・売り先・商品種類」の拡大にも、正の相関関係がある。



女性による新しい販売方法の提案／実行状況と経営拡大

「女性が販売方法を提案し、実行している」ことも、「飼育群数・売り先・商品種類」の拡大と、正の相関関係にある。

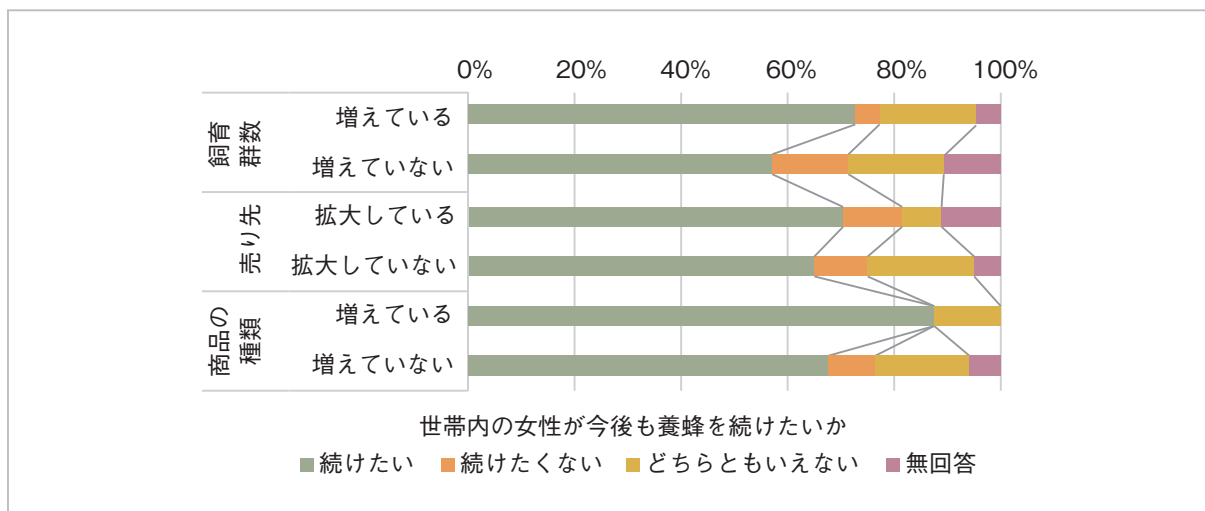
2) 女性の知見と経営拡大の傾向



研修受講経験と経営拡大

女性の研修受講経験と、「飼育群数・売り先・商品種類」の拡大にも、正の相関関係が見られる。

3) 女性の意欲と経営拡大の傾向



継続意欲と経営拡大

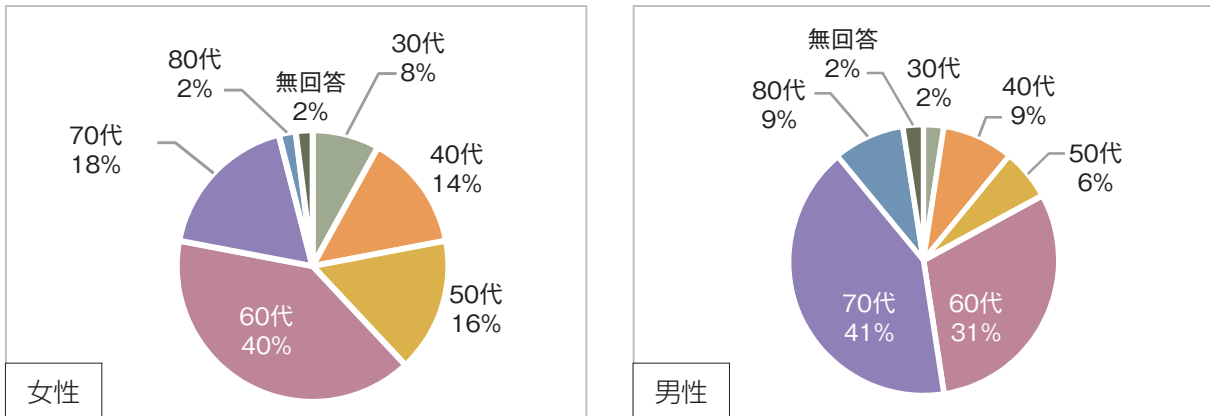
女性が「今後も養蜂を続けたい」と思っている養蜂経営（家）でも、「飼育群数・売り先・商品種類」がより拡大している傾向にある。

4 | アンケート III 女性の経営参画に関する意向

養蜂に携わる世帯の男女それぞれに対し、女性の経営参画に関する意向を尋ね、合計132件の回答を得た。

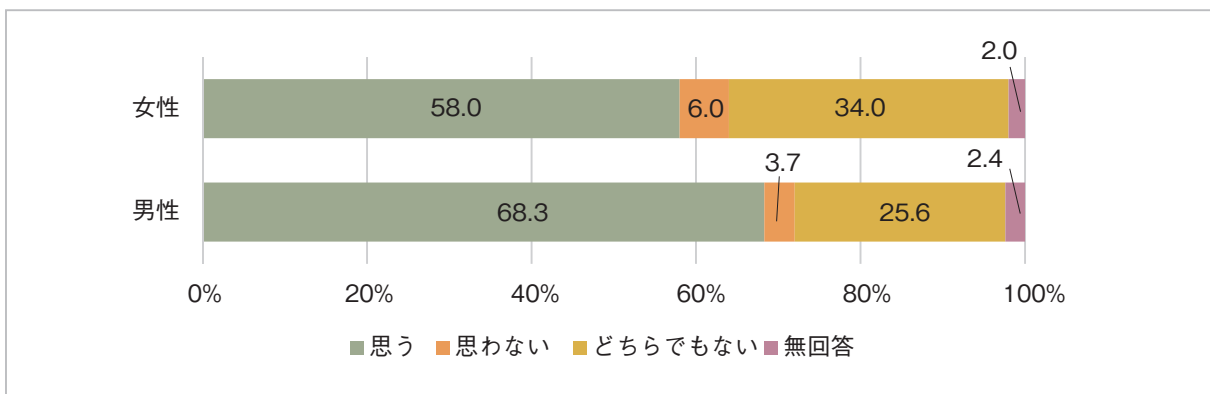
このうち男性が82名で、約8割が60代以上であった。女性は50名で、このうち6割が60代以上であった。

設問は、農業他分野の動向と比較できるように、農林水産省「農家における男女共同参画に関する意向調査」(2008年実施。女性農業者2000名およびその配偶者(男性農業者)2000名を対象に実施：以下、「農林水産省調査」という)をベースとし、養蜂分野の状況を加味して作成した。



養蜂経営への女性の理想的な関わり

Q. 養蜂経営において女性が重要な役割を果たしている、あるいは、果たした方が良いと思いますか

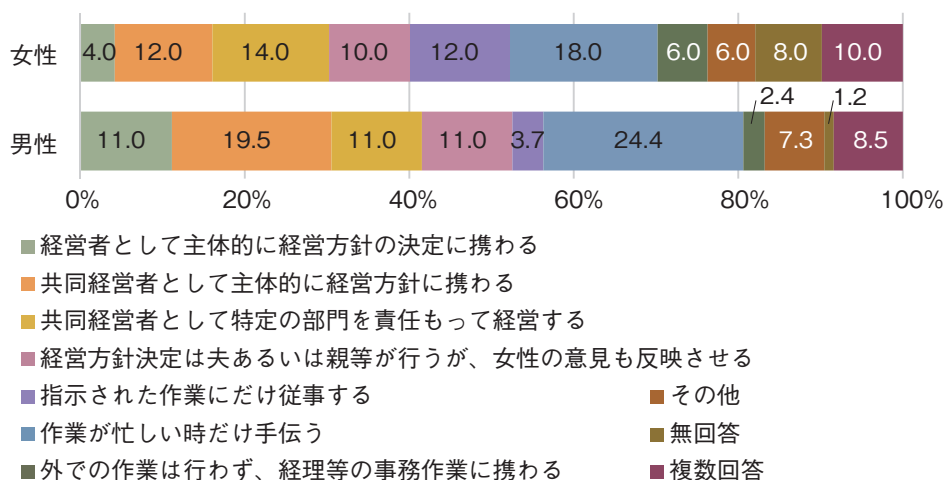


「養蜂経営において女性が重要な役割を果たしていると思う／果たした方が良いと思う」と回答した人は、男性が7割弱、女性が6割弱で、男性の方が多かった。

「重要な役割を果たしていない」との回答は、女性が6%、男性が3.7%で、女性の方が多かった。

※ (2009年公表調査結果) http://www.maff.go.jp/j/finding/mind/pdf/20090311_enquete2.pdf。なお、農林水産省は、2017年度も同様の調査を実施(以下、「2017年度調査」という)。2017年度調査の結果は <http://www.maff.go.jp/j/finding/mind/attach/pdf/index-10.pdf> で確認できる。

Q. 女性は、養蜂経営にどのようにかかわるのが望ましいと思いますか。女性は“あなたの希望”について、男性は“あなたの意見”について、最も近いものを1つ選んでください



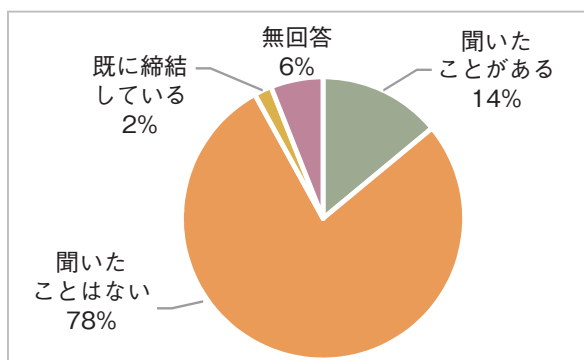
「女性は作業が忙しい時だけ手伝う」が男女とも最多だった。
次に多かったのは、男性の場合「共同経営者として主体的に経営方針に携わる」で、女性は「共同経営者として特定の部門を経営」であった。

「経営者として主体的に経営方針に携わる」は男性11.0%に対して女性4.0%。「共同経営者として主体的に経営方針に携わる」は、男性19.5%に対して女性は12.0%であった。
男性の方が、女性に対して養蜂に積極的に関わってほしいと考えている。

農林水産省調査においても、「男性は、女性が考えているよりも、女性に対して農業経営に主体的に携わってもらいたいと考えていることがうかがえる」との調査結果が出ている。
ただし、女性の最多意見は「経営方針決定は夫あるいは親等が行うが、自分の意見も反映させたい」で31.9%、男性の最多意見は「共同経営者として主体的に農業経営方針の決定に携わってもらいたい」で34.0%であった。2017年度調査においても、傾向は変わらない。

家族経営協定について

Q. “家族経営協定”について、聞いたことがありますか

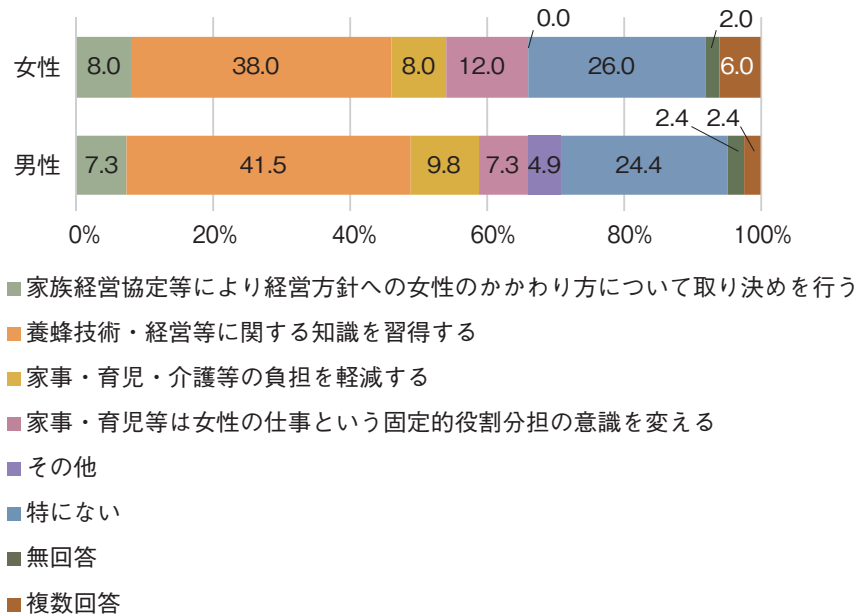


家族経営協定について「聞いたことがある」人は14%。「聞いたことがない人」は78%にのぼった。「既に締結している」は2%（2件）で、これは農業と兼業している夫婦による回答だった。

養蜂分野では協定についての認知度が低いことがうかがえる。

女性の経営参加促進に必要な環境整備

Q. 女性が養蜂経営方針の決定に参画しやすい環境を整えるうえで、最も必要だと思うことを1つ選んでください



「養蜂技術・経営等に関する知識の習得」が男女とも最多だった（男性41%、女性38%）。

次に多かったのは、女性の場合「特にない」「家事・育児等は女性の仕事という固定的役割分担の意識を変える」「家事・育児・介護等の負担を軽減する」の順で、男性は「特にない」「負担を軽減する」「固定的役割分担の意識を変える」であった。

農林水産省調査においても、男女ともに「農業技術・経営等に関する知識の習得」が最多であり、女性35.1%、男性48.1%を占めた。

農林水産省調査では、「女性の意向は、いずれの年齢階層においても『農業技術・経営等に関する知識の習得』と回答する割合が3~4割、次いで『家事・育児・介護等の負担の軽減』と回答する割合が2~4割となっており、農業経営方針の決定に参画するに当たって、農業技術・経営等に関する知識の不足、家事・育児・介護等の負担を感じている傾向となった。一方で、男性の意識は、女性の回答と同じく、『農業技術・経営等に関する知識の不足』と回答する割合が高いものの、いずれの年齢階層においても、『家事・育児・介護等は女性の仕事という固定的役割分担の意識の打破』と回答する割合が1割以下となっており、家事・育児・介護等の負担感において、女性の意向および男性の意識に差が見られた」と分析している。

男女の養蜂・地域活動・家事育児介護への理想的な関与

Q. 女性が、養蜂、地域活動、家事・育児・介護等に携わる時間はどのようなものが望ましいと思いますか。それぞれ1つお答えください

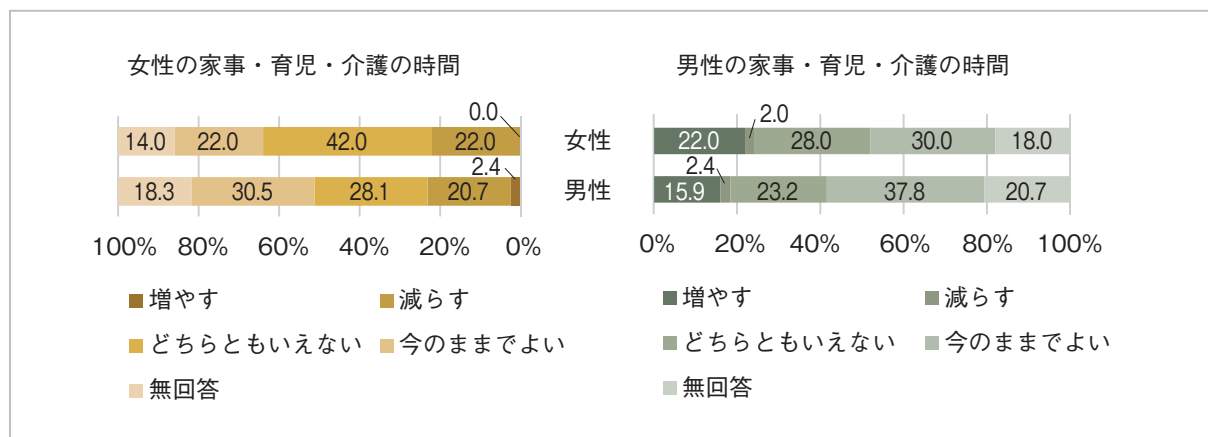
Q. 男性が、養蜂、地域活動、家事・育児・介護等に携わる時間はどのようなものが望ましいと思いますか。それぞれ1つお答えください

女性の時間配分については、「家事・育児・介護等」、「養蜂」および「地域活動」いずれについても、「今のままでよい」「どちらともいえない」が多かった。男性の時間配分についても同様であり、概ね、現在の状況にあまり過不足を感じていない様子が窺える。農林水産省調査では、「女性が農業、地域活動や家事・育児・介護等に携わる時間に関する女性の意向および男性の意識」のみを調査し、「男女ともに現在の状況にあまり過不足を感じていない傾向」にあると分析している。

農林水産省調査において、「農業、地域活動、家事・育児・介護等にバランスよく携わっていない」と回答した者のうち、今後、どのようにしたいと思うか尋ねたところ、『携わる時間を増やしたい』では『家事・育児・介護等』が最も高い割合（23.8%）となり、『携わる時間を減らしたい』では、『農業』が最も高い割合（24.6%）」となっている。

2017年度調査では、女性が増やしたいとしたのは、「家事」（27%）が最も多く、次いで「農業」（19.4%）となり、減らしたいとしたのは、「家事」（28.3%）が最多で、次いで「農業」（25.7%）であった。

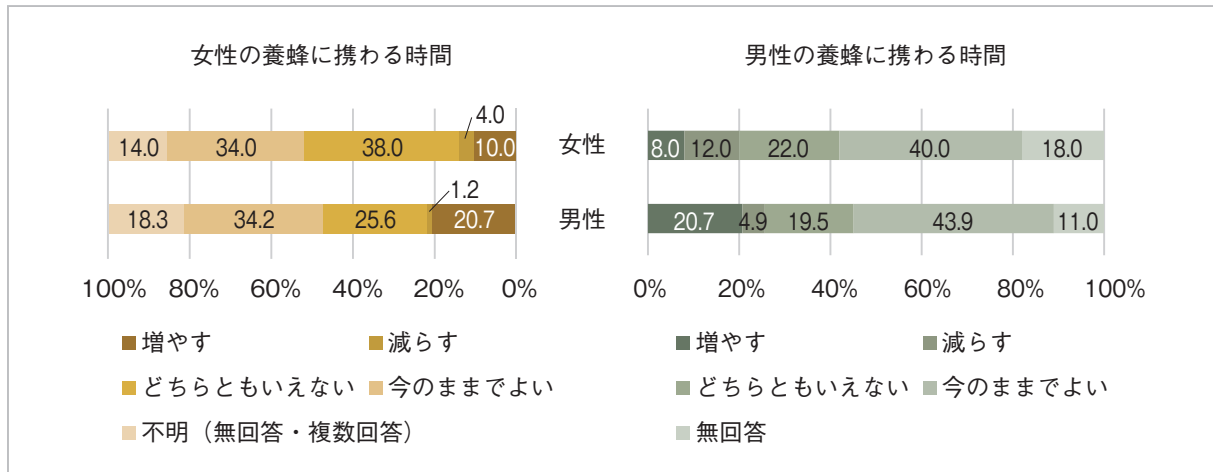
① 家事・育児・介護等に携わる時間



「女性が家事・育児・介護等に携わる時間」については、女性は「どちらともいえない」が最多で、「減らす」「今のままでよい」が同率で次に多かった。男性は「今のままでよい」が最多で、次に「どちらともいえない」「減らす」の順に多かった。

「男性が家事・育児・介護等に携わる時間」は、男女とも「今のままでよい」「どちらともいえない」「増やす」の順に多かった。「減らす」は男女とも約2%と少なかった。ただし「増やす」は女性16%、男性9.8%で、男女に開きがあった。

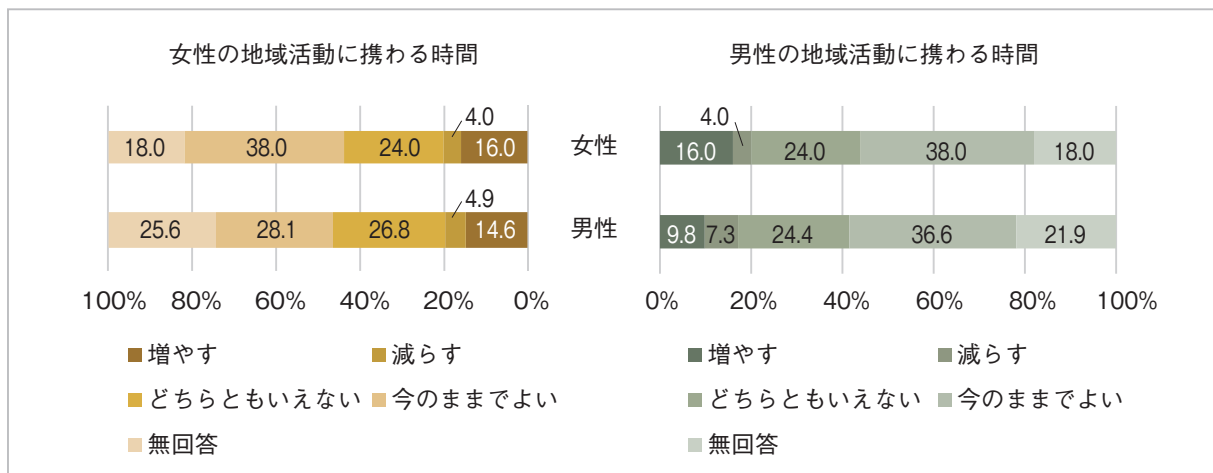
② 養蜂に携わる時間



「女性が養蜂に携わる時間」は、女性は「どちらともいえない」「今のままでよい」「増やす」の順に多かった。男性は「今のままでよい」「どちらともいえない」「増やす」の順に多かった。ただし「増やす」は女性10%、男性20.7%で、男女に開きが見られた。

「男性が養蜂に携わる時間」は、女性は「今のままでよい」「どちらともいえない」「減らす」の順に多く、男性は「今のままでよい」「増やす」「どちらともいえない」の順に多かった。「増やす」は女性8%、男性20.7%、「減らす」は女性12.0%、男性4.9%で、男女に開きが見られた。男性は、女性よりも「男女とも養蜂に関わる時間を増やすべき」と考えている。

③ 地域活動に携わる時間

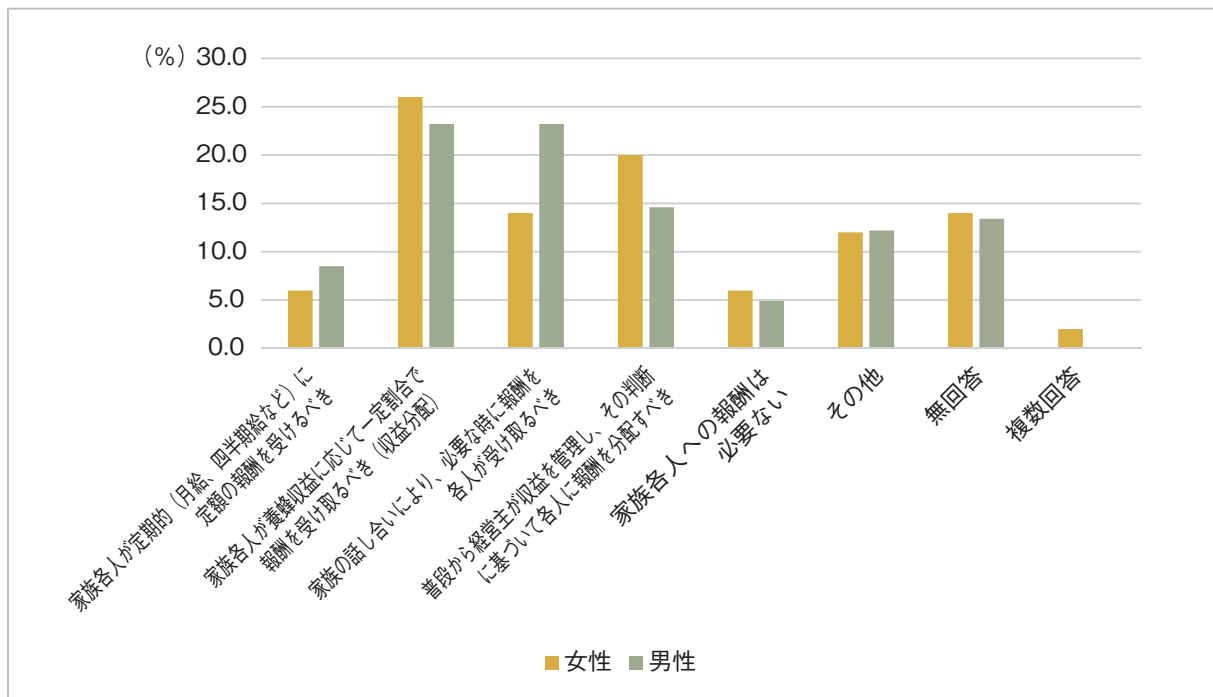


「女性が地域活動に携わる時間」は、男女とも「今のままでよい」「どちらともいえない」「増やす」の順に多かった。

「男性が地域活動に携わる時間」も同じく、男女とも「今のままでよい」「どちらともいえない」「増やす」の順に多かった。ただし「増やす」は女性16%、男性9.8%で、男女に開きがあった。

報酬の在り方

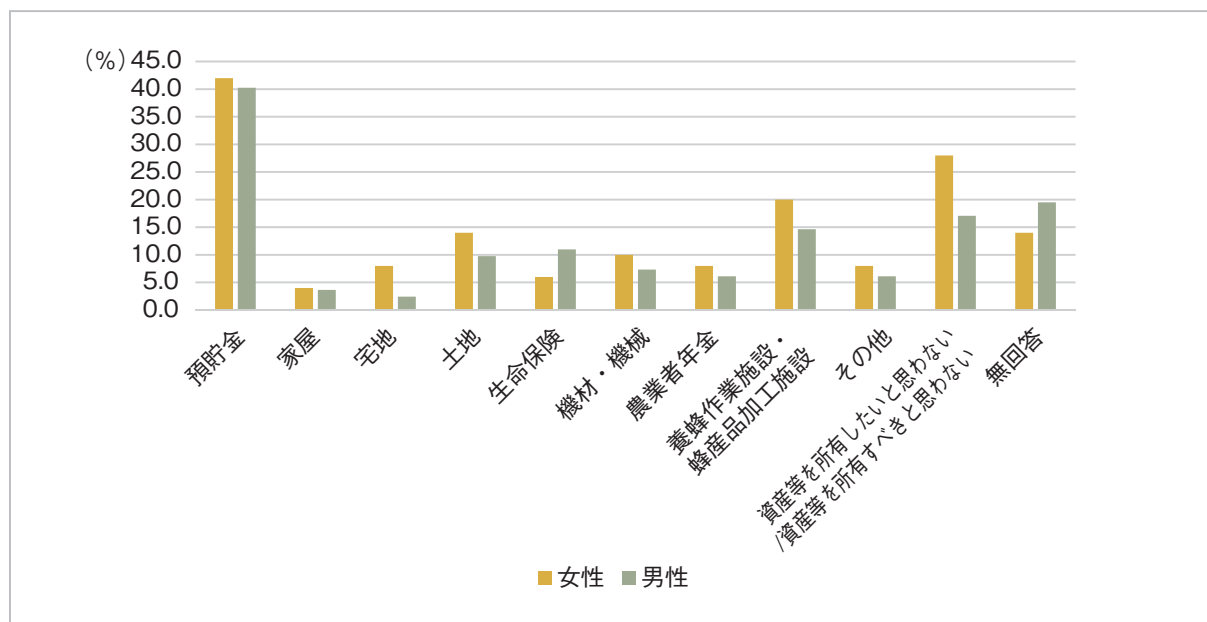
Q. 家族養蜂経営における家族各人の報酬の在り方は、どのようなものが望ましいと思いますか。1つお答えください



「各人が養蜂収益に応じて一定割合で受け取る」が男女とも最も多かった。その次に多かったのは、女性は「経営主が収益を管理し、その判断に基づいて各人に報酬を配分」で、男性は「家族の話し合いにより必要な時に各人が受け取る」であった。

農林水産省調査では、男女ともに、「家族各人が定期的に、定額の報酬を受け取るべき」が最多で、概ね若齢階層ほど、家族各人が定期的に定額の報酬もしくは農業収益に応じて一定割合で報酬を受け取るべきと考えている結果となった。2017年度調査では、この傾向がさらに進んでいる。

Q. 女性が養蜂経営に自立的に携わるために、女性の個人名義で所有したい（所有すべき）資産はどれだと思いますか（複数回答）



男女とも「預貯金」が最多で、次に「養蜂作業施設・蜂産加工施設」が多かった。「生命保険」を除くすべての項目で、女性の方が男性よりも割合が高かった。

農林水産省調査では、男女ともに最多は「預貯金」（女性80.1%、男性84.7%）、次いで「生命保険」（女性48.1%、男性57.6%）となった。

本調査とは逆に、「女性の個人名義で所有したい（すべき）資産等としては、いずれの資産等も女性の意向より男性の意識が高い割合となり、女性の意向よりも男性の意識の方が、女性農業者の経済的自立につながるために、女性の個人名義で所有すべきと考えている傾向」と報告している。2017年度調査も同様の傾向が見られ、また、資産を所有すべきと考える割合が、男女ともに概ね増加している。

3. 事例調査概要

菅野養蜂場

菅野菊枝さん

～蜂が好きだから～



【養蜂の概要】

住 所：北海道常呂郡訓子府町仲町34

蜂群数：300～400群

蜂 場：北海道（春先は静岡に移動）

労働力：菅野富二氏（69）、菅野菊枝氏（62）、菅野裕隆氏（29）

採蜜シーズンのみ、4～5名のアルバイトを雇用

生産物：蜂蜜、花粉交配用の貸し蜂、蜂蜜酒（ミード）

主な販売先：蜂蜜……一般消費者への直販、地元レストランおよび製菓店、アンテナショップ、コープさっぽろ他

貸し蜂…メロンのハウス栽培農家への貸し出し

事業の開始：大正15年頃

URL：菅野養蜂場：<http://honeyfarm-kanno.com/>

始めたきっかけ

東京・浅草で育ち、大学卒業後は民間企業で管理栄養士として勤務していた菊枝さん。当初は現場での仕事が面白かったものの、2年ほどで本社の事務職に異動となり、物足りなさを感じていました。その頃、兄が偶然ラジオで鹿児島島の養蜂場の話を耳にして養蜂に興味を持ち、そのまま鹿児島島の養蜂場に弟子入りすることに。そこで兄弟子となったのが、菅野養蜂場の三代目を継いで鹿児島島で修行中だった富二さんでした。栄養士の知識を現場で活かしたいと考えていた菊枝さんは、その頃から、兄の話す養蜂の話に強い興味を抱いていたといいます。こうしたきっかけから富二さんと菊枝さんが出会い、結婚することになりました。

自身の役割

1983年に27歳で養蜂の世界に飛び込んだ菊枝さん。結婚当初は富二さんが鹿児島島で修行中だったため、富二さんのご両親とともに菊枝さんも鹿児島島に渡り、採蜜シーズンの1ヵ月は親方の家に住み込んで採蜜や瓶詰め等販売作業、家事作業を手伝うという生活が始まりました。その間に長女の綾さん、長男の裕隆さんが生まれ、子育てと家事に追われながら夫の仕事を支える生活が6年間続きました。

この頃に、忘れられない出来事があるといいます。綾さんがまだ赤ん坊の頃、蜂場の横に止めた車に一人残し、夫婦二人で小雨の中、仕事をしなければならないことがありました。

当時は親方の元におり、ミツバチの世話や採蜜は常に親方の箱が優先。そのため、気候条件が悪く中でも作業せざるを得ません。雨が降っていてもどうしてもその日に、自分たちのミツバチを見る必要がありました。小雨の中、作業をしていると、綾さんがずっと泣いているのが聞こえます。気になるけれど、見に行くと蜂も一緒についてくるのでドアを開けて世話をしてやることができない。お母さんの顔を見れば、娘は余計に泣いてしまう。だから様子を見に行くこともできませんでした。泣き声が聞こえるうちは大丈夫と思ってじっと我慢して作業を続け、泣き声が止むと、大丈夫だろうかと様子を見に行ったといいます。子供を連れての移動も大変でした。暑い時期は車を止めると風も止み、巣箱の中の温度が上がり、熱で蜂が死んでしまいます。強勢で良い蜂群ほどその危険が高いため、ろくに休憩も取らず、走らねばなりません。トイレ休憩も駐車する時間を極力短く——。小さな子供にとって、トラックの中で長時間じっとしているのは辛く、トイレに行くと走り回りたくなります。それを追いかけては連れ戻し、無理やり車に乗せなければなりませんでした。

そんな生活を続けていた菅野さん一家ですが、長女の入学を機に、1990年より富二さんの単身赴任生活が始まります。富二さんの修行が終わると一家は北海道に戻り、蜂蜜の生産と貸し蜂を開始しますが、今度は菊枝さんが一人で単身赴任中の夫の留守を預かることになりました。春先から6月頃までは富二さんが蜂の移動先（岐阜、和歌山、静岡）で生活する必要があるため、菊枝さんは子どもとともに北海道に残ることになりました。その間、貸し蜂の管理は菊枝さんが一手に引き受けることに。その頃には長男の裕隆さんも生まれ、二人の子育てと富二さんの両親の介護をしながら、200群の貸し蜂を育成し、毎日30～40軒の貸出先を3回に分けて回りました。幸い、蜂が好きで、鹿児島でも蜂を見ていた経験がここで生かされたといいます。

中国からの安い輸入蜂蜜に押され、国産蜂蜜が売れず苦勞した時期もありました。問屋さんに蜂蜜を持っていくと驚くほど安い値段を言われ、悔しい思いをしたといいます。蜂蜜一斗缶1本の値段は、レンゲが3万円であったとき、地元の植生によって採れるリンデンの蜂蜜が3000円であったこともありました。当時は、地元ならではの質の高い蜜で、何にも代えがたい蜂蜜であるのに、その価値が認められない。それなら、自分たちが良いと思うものを自分たちで売ろうと、菊枝さんはデパートでの対面販売などで蜂蜜の良さを伝えたり、デパートに飛び込み営



写真：菅野養蜂場



自宅に併設した店舗

業で蜂蜜を置いてもらったりして、徐々に販路を広げていきました。

富二さんの単身赴任生活は、裕隆さんが高校に入るまでの16年間続きました。その後は移動先の静岡に拠点をつくり、一家で北海道と静岡を行き来する生活を続けています。現在、菊枝さんは、採蜜、蜂蜜の瓶詰めに加え、自宅に併設した店舗での販売を担当しています。

地域との関わり

1982年から北見市の百貨店がオホーツク物産展を始め、以来、菅野養蜂場も毎年出店しています。菊枝さんはここでの対面販売を通じて、お客さんがいかに蜂蜜や蜂のことを知らないかということに気づかされました。また、その頃周辺の農家では、農業が機械化されるようになったことで子どもが農作業を手伝わなくなり、農家の子どもでも農業を知らないという状況に危機感を覚えていました。「現場を知っている自分が養蜂を伝えていかなければ」という思いを強くした菊枝さんは、1993年頃から、小学校のクラブで屋上養蜂を行ったり、講演会で話をしたりするようになります。2000年からは、小学校で始まった総合学習の一環として、居武士小学校で養蜂の体験学習を行っています。

また、若い世代を支援したいとの思いで、今年から店舗の一角を利用して地元の人向けのワークショップも始めまし

た。たとえばアロマセラピーの経験を持った地元の若い女性を講師に招き、蜂蜜を使った化粧品づくりのワークショップなどを行っています。「子育てなどが一段落して自由になったらやりたいことがたくさんあった」と話す菊枝さん。「自分が若い時に栄養士の経験を現場で活かしたいという思いがあったので、同じような思いを抱えている若い人に、経験を活かす場を提供していきたい」と考えています。



居武士小学校の生徒による体験学習のまとめ



体験学習で養蜂を学んだ小学生が作った版画 写真：菅野養蜂場



店舗の一角に設置したワークショップ用のスペース 写真：菅野養蜂場

女性ならではの課題

北海道養蜂協会には飼育届出者の富二さんのみが加入しており、他の養蜂家も基本的に同様とのこと。女性の参加は自由ですが、協会の会合に参加する女性は非常に少なく、菊枝さんも参加したことがありません。以前、富二さんは、北海道庁の担当者から「女性部のある産業は発展する。養蜂でも女性部を立ち上げたい」との話を持ち掛けられたこともあったといいますが、担当者の異動によって立ち消えになってしまいました。

菊枝さんは養蜂の研修も受けた経験がなく、一度だけ夫婦で参加したカナダでの研修旅行でも、女性の参加者は菊枝さんだけだったそうです。菊枝さんは、研修や会合に出れば、知り合いも増え、相談できる相手や質問できる相手もできるし、何気ない会話に、養蜂の情報が隠れていることもあると思う、として、そうした場に女性も出ていけたら、と希望していました。将来的には、女性も蜂群の名義を持ち、養蜂協会にも夫婦で登録するという形も考えられるのでは、というアイデアも出ましたが、まずは夫が妻を会合に連れていき、女性が会合や研修に参加しやすい環境を作ることが第一歩かもしれません。



左から、裕隆さん、菊枝さん、富治さん

写真：菅野養蜂場

養蜂を取り巻く環境

蜂場のある北見市周辺ではクマの被害が増えており、2018年も地域内で2件被害がありました。また、ソーラーパネルを設置するために山の樹木が伐採され、蜜源が減っていると感じています。

新しい商品の展開

菅野養蜂場では現在、蜂蜜を主体としつつ、貸し蜂やミード（蜂蜜酒）、石鹸、バスソルトなどの商品を開発し、展開しています。

ミードは、カナダ研修で訪問した養蜂家が作っていたことから、自分たちもやってみたくて開発に着手しました。道と東京農業大学と協力し、リンデンの花粉を発酵のスターターとして、産官学で開発したものです。今後は、ミードを国際会議で発表し、世界の人々に紹介したいと夢を描いています。

松本鮎子さん

～ミツバチと共に～



【養蜂の概要】

住 所：埼玉県深谷市

蜂群数：1000群（採蜜シーズン）

蜂 場：10ヶ所

労働力：松本文男氏（72）、松本洋子氏（66）、松本鮎子氏（41）、従業員3名

生産物：蜂蜜、種蜂販売

主な販売先：蜂蜜…消費者への直販、道の駅、JA直売所での委託販売、デパート、ゴルフ場など

事業の開始：1998年

URL：花園養蜂場 <http://www.7a.biglobe.ne.jp/~hanazonoyoho/>

養蜂を始めたきっかけ

大学を卒業後、美容関係の仕事に就いた鮎子さん。父の文男さんは移動養蜂を営む養蜂家ですが、両親の大変さを見ていた鮎子さんは、養蜂の世界に入るつもりは全くなかったといっています。しかし30代半ばに実家に戻ったことをきっかけに、両親の仕事を手伝うことに。美容の世界とは正反対の地味な仕事でしたが、「お宅の蜂蜜を探して買いに来た」というお客さんの声を聞くうちに、こだわりを持って蜂蜜を作っている両親の仕事に「自分なりに守っていかなければ」という思いが芽生えます。娘の通う保育園が食育に熱心だったことも、蜂蜜の価値を再認識するきっかけとなりました。



花園養蜂の蜂蜜

自身の役割

鮎子さんは文男さんとともに飼育部門を担当する傍ら、ホームページ等での発信や商品開発も行っています。自宅に併設された店舗には、母の洋子さんが店番に立ってお客さんに対応しています。

飼育技術は、父の文男さんから現場で



移動用の10トントラック

写真：花園養蜂場

直接教わりました。蜂群は一番多い時期になると1000群近く。内検するだけでも大変な作業ですが、「群数が多い分、早く経験を蓄積できた」と鮎子さんは言います。それでも一人で内検できるようになるまで4年かかったとのこと。蜂を移動させるトラックを運転するため、36歳で大型の免許も取得。また、蜜源植物を育てるにあたり、トラクターが必要で大型特殊免許を取得、フォークリフトの免許も取得しました。

採蜜シーズンの4月から8月中旬にかけては、埼玉県と長野県を行き来します。夜明け前に出発し、夜明けとともに採蜜します。花園養蜂場では現地絞りをせず、巣箱から引き上げた蜜枠は別のスタッフが自宅に持ち帰り、自宅で待機している母が分離器にかけて蜜を絞ります。

採蜜シーズンが終わると、秋にかけてスズメバチ対策に追われ、11月に入ると越冬の準備が始まります。10カ所の蜂場に置かれている巣箱に、1つずつ保温カバーをかける作業も、時間と労力のかかる作業です。1月には400箱ほどを越冬させるため、高知県まで鮎子さんと文男さんが交代で蜂を載せた10トントラックを走らせます。片道16時間の長旅です。

母として・家族として

繁忙期の一日は明け方から始まります。朝3時半～4時頃に現場に入ってその日の作業の段取りをし、6時半に自宅に戻って朝食を作り、小学生の娘を学校へ。その後、農協や道の駅などの納品先を回り、昼食をすませて再び現場に入ります。夕方になると娘を迎えに行き、夕食を準備します。娘は鮎子さんの仕事を理解していると言いますが、「なぜうちには他の友達のように休日に遊びに出かけないの」と聞かれたことも。「娘に寂しい思いをさせていることに母として葛藤がある」と鮎子さんは言います。娘の担任の先生には、「目が行き届かないことがあるかもしれない」と、自分の仕事のことを説明してあるそうです。

また、「家族経営ははじめをつけるのが難しい」と感じることもあります。親方である父が働いていると家族も休みにくく、プライベートの時間を持ってないのが悩みと言います。父は、従業員も研修員も皆家族同様であるとの方針で、以前は母が全員分の食事を作っていました



自宅に併設された店舗

が、さすがに大変だと感じた鮎子さんが方針を変え、お昼は皆の分のお弁当を取るようになりました。養蜂経営全般について、守り継ぐべきところを引き継ぎつつ、今後はより効率的に行う必要があるのではないかと、鮎子さんは考えています。

飼育届と養蜂協会への登録は、文男さんと鮎子さんが1人ずつ申請しています。後継者として期待されている鮎子さんですが、将来の規模や経営展開についてはまだ模索中とのことでした。親方である父と、父を全面的にサポートする母を見ながら、鮎子さんなりに、自分の取り組み方や会社の在り方を真剣に考えている様子が窺えました。

養蜂を取り巻く環境

以前、自宅前の耕作放棄地に蜜源植物を植えて蜂を置いていたところ、近所の人や中古車展示場からミツバチのフン害の苦情を受け、やむを得ず巣箱を引き揚げたことがありました。ところがその後、「また畑を使ってほしい」と言われ、「蜂のために蜜源を植えていたのに、理解されていなかったのか」と驚いたといいます。当初は200群置いていた自宅前の蜂場は、今は、20群ほどに縮小せざるを得ませんでした。

一方で、近所で野菜を作っている人から「この間お宅の蜂が来ていたよ」と声をかけられ、苦情かと構えたところ、「うちは生り物を作っているから助かっている」と言われ、ほっとしたこともありました。

耕作放棄地に蜜源植物を蒔くといっても、まずはトラクターを入れて整備するなど、機械も人手も時間もコストもかかります。また、ミツバチは生き物で、ミツバチのルールに従って生きています。養蜂を取り巻く環境が変化する中で、地域社会の理解をどのように得ていくか、大きな悩みのようにでした。



鮎子さんの発案で新しく開発した蜂蜜石鹸

写真：花園養蜂場



都内のデパート向けに新しくデザインしたラベル

写真：花園養蜂場



蜜源となる菜の花畑。
耕作放棄地に種を播いて育てた

写真：花園養蜂場

地域や消費者とのつながり

鮎子さんは、蜂蜜だけでなく養蜂そのものをもっと理解してほしいという思いから、イベントへの出展や自宅での採蜜体験会を積極的に行っています。鮎子さんが養蜂を始める前は、情報発信はほとんど行っていませんでしたが、今は評判を呼び、最近の体験会では、市外や都内から100人近くの参加者が集まりました。

また、地元の深谷市では、花園養蜂の蜂蜜がふるさと納税の返礼品となっています。返礼品に養蜂の体験ツアーを組み込む企画も検討中で、鮎子さんは、自治体を通じてより広く養蜂への理解が深まることを期待しています。

最近では、深谷市の高校の生徒が取材に訪れたり*、小学生が体験学習の一環で養蜂場を訪れたりする機会もありました。鮎子さんは、「親の世代が養蜂について知らない分、子どもたちや若い世代を通じて、養蜂の魅力を地道に伝えていきたい」という思いを強くしています。



コラム 1 女性が活躍するモンゴルの養蜂

遊牧の国モンゴルでは、近年、養蜂が盛んです。モンゴルの養蜂の歴史は浅く、1950年代に旧ソ連から国営農場に導入されて始まりましたが、社会主義体制が崩壊した1990年代初頭に一度はほぼ壊滅しました。しかし、その後復活、2017年には養蜂家数は700軒以上、蜂群も16000群を超え、今も拡大中です（モンゴルは人口318万人、88.6万世帯。約1200世帯に1軒が養蜂を行っている計算。日本は5500世帯に1軒）。

このモンゴル養蜂の急成長を支えているのが女性たちです。モンゴルの養蜂場を訪れると女性の姿が目立ち、多くの養蜂グループで女性がリーダーを務めています。全国レベルの組織であるモンゴル養蜂協会のトップは女性、養蜂が最も盛んなA県の養蜂組合の代表も女性、その隣のB県でも、13の養蜂団体のうち9団体が女性のリーダーです。また、そのうち1つでは、21名のメンバーのうち17名が女性です（2019年2月聞き取り）。

モンゴルの養蜂家に女性が多い理由はいくつか考えられますが、その1つとして、養蜂は初期コストがそれほどかからず、副業として始めやすいことが挙げられます。また、あるモンゴル男性は、「社会主義時代に主流だった産業が崩壊し、それらを支えてきた男性たちが呆然としている時に、女性たちは、自分たちで何とかしようと考え、工夫をしながら生計を支えた。養蜂も、そのような生計手段のひとつとして女性が着目したのではないか」と推測していました。そうして女性が養蜂分野のフロントランナーとなったことが、その後の女性の参加をさらに促したといえそうです。

※国際農林業協働協会は、モンゴルにおいて、2015年から2018年に国際協力機構（JICA）草の根技術協力事業「養蜂振興による所得向上プロジェクト」を実施しました。2019年からはそのフォローアップとして「地方での生計維持を目指した養蜂振興プロジェクト」を実施します。

* 深谷市第一高校の放送部の生徒が花園養蜂を取材。これをもとに制作したビデオ作品は、2017年の埼玉県高校放送コンクールで最優秀賞を受賞した。

高田美穂さん、孝子さん

～いつの間にか、ミツバチのいる毎日に～



【養蜂の概要】

住 所：埼玉県秩父市寺尾

蜂群数：50群

蜂 場：秩父周辺の4ヵ所

労働力：高田勇氏（66）、高田美穂氏（34）、高田孝子氏（63）

生産物：蜂蜜

主な販売先：JA 直売所、消費者への直販

事業の開始：2015年

URL：たかだ養蜂 facebook <https://www.facebook.com/takada83.chichibu>

始めたきっかけ

美穂さんの曾祖父が趣味で蜂を飼っていた影響で、父の勇さんも若い時から蜂に触れており、サラリーマン時代も趣味で10群ほど飼っていました。当時は、平日の朝や週末に世話をしていましたが、退職後、62歳で起業し、現在に至ります。

美穂さんは東京でOLをしていましたが、30歳前後でいったん退職して実家に戻ります。たまたまそのタイミングで勇さんが起業したため、起業の準備や商品開発を手伝うことに。「私はパソコンができるし、商品開発は楽しそう」と思ったといいます。

父を手伝っているうちに、気がつけば現場でのサポートも行うようになっていました。それまで飼育の経験はなく、「蜂は幼いころ刺されたことがあり怖かった」という美穂さん。もともと現場での仕事には消極的だったといいます。

「本当に嫌なら辞めていただろうし、やってみたらできたという楽しさもあり、どこかに前向きな気持ちがあったのだと思う」と振り返ります。



完成巣の保管庫の前で

美穂さんの役割

美穂さんは現在、商品開発、経理、現場での父のサポートを担当しています。採蜜の時期は、朝4時半から作業が始まります。蜂蜜を直売所に卸しに行く作業もあり、昼食と夕食を挟んで夜まで作業が続きます。蜂場は複数あるため、4日かけて一周します。2018年は花が一気に咲いてしまったため、採蜜のシーズンは休みなされたそうです。

「養蜂は天候に左右されるため、その日に蜂場に行くかどうかは父の判断次第。採蜜の時期は予定が立たず、休みの日も気持ちが落ち着かない」と美穂さん。友人からの誘いがあってもなかなか約束ができないそうです。「勤務時間に融通が利いてしまうのは、家族同士だからだと思う。従業員であれば、もっときちんと管理できていると思う」とも感じています。

現場では飼育管理だけでなく、蜂場の立ち上げから手伝うこともあります。土地の地ならしから巣箱を覆う骨組みや網の設置まで、この作業も重労働です。

孝子さんの役割

母の孝子さんは公務員の仕事をしていたのですが、結婚当初から夫が蜂を飼っていたため、採蜜の時期だけ作業を手伝っていました。当時は仕事と娘二人の子育て、家事との両立で休む間もなかったといいます。採蜜は、夏場にビニールハウスの中で行うので、暑くて過酷な作業でした。分離機を回すと空気が動き、その風が救いを感じられるほどだったと孝子さんは振り返ります。

夫の起業後は、家事全般に加え、瓶詰め、商品の包装、商品の発送、直売所への配達を行っています。

美穂さんから見る養蜂経営

「日本には養蜂技術を開発する部門が少なく、養蜂家が各々で工夫してやっている。女性が作業しやすいような効率的な方法や道具を開発してほしい」と美穂さんは感じています。

また、蜂は人を刺したりフンをしたりするので、「人様に迷惑がかかる」という肩身の狭い思いがどこかにあるとのこと。孝子さんも、「スズメバチ対策にしても、ミツバチがスズ



雨・暑さ除けのカバー



スズメバチ対策用のネット

メバチを集めているのではないかと思われるので、言いづらいところがある」と感じています。

「もっと蜂の役割について一般の人に知ってもらいたい」と話す美穂さん。「犬と同じで、蜂も飼い方を間違えなければ刺さない。その感覚が共有されれば、養蜂も一気に広まるのでは」と感じています。養蜂を身近に感じてもらうための具体策はないかと聞いてみると、本格的な養蜂ではなく野菜や花を庭先で育てる感



市内の人から要請を受け、スズメバチの巣を駆除

写真：たかだ養蜂

覚で気軽に始められる「プチ養蜂」を提唱する、イチゴ狩りに来た人にミツバチの受粉の役割を説明する、アニメや絵本などでミツバチをキャラクター化して理解を促す、などのアイデアが挙がりました。

女性ならではの課題

「現場の仕事は、女性にとっては体力的に非常に過酷」と話す美穂さん。「もともとこういう仕事がしたくて始めた女性はよいかもしれないけれど、すべての女性ができることではない」と感じています。父と一緒に動いていると家事は一切できず、母に任せきりになってしまいます。「母を含めた3人体制だからできている」と美穂さんは言います。

養蜂協会の会合や研修には、勇さんが参加しています。「現場のことは父が決めるし、会合には同世代の女性がないので自分が行っても浮いてしまう」と美穂さん。県内での講習会に参加したことがあるそうですが、同世代の女性は少なかったとのこと。女性が参加する研修があれば、ヨコのつながりができるのでは、と感じています。

養蜂を取り巻く環境

秩父では昔、アカシアがよく採れたそうですが、今は少なくなり、現在は百花蜜が中心です。

スズメバチは年々増えており、対策に苦労しています。時期も早まっており、例年は9月頃に出てくるところ、2018年は8月中旬から出始めたとのこと。この時期は毎日（多い日は1日2回）、蜂場に足を運び、虫取り網やラケットで根気よく退治しています。

消費者を大切に

美穂さんに言わせると、父は「“経営者”というよりは“養蜂家”。蜂そのものに興味があり、趣味を拡大するために起業したようなところがある」ようです。売り上げや商品についてもあまりこだわりがなく、蜂蜜の価格や商品開発に関しては美穂さんが、売り上げや市場の状況を見ながら父に提案しています。娘と母は、市場に見合った価格にしたい、商品としてのクオリティを上げたいという思いがありますが、父は価格を上げたり、商品化に時間と

コストをかけすぎること気にします。たとえば孝子さんは、蜂蜜を消費者に宅配する際、同じダンボールでも食品の入っていた箱を選び、一筆入れて発送したいと考えますが、勇さんは「中身がよければ言わなくても分かる」と言います。孝子さんは「対・人」でものを考えています。

商品に関しては、ビンの蓋やサイズを変える、箱に入れてギフト化する、店舗ごとに売れ行きを見ながら卸す品物や値段や蜜源を変える、巣蜜入りの蜂蜜を出してみる、などの工夫を重ねています。

孝子さんが直売所に配達に行くと、お客さんから「蜂蜜が固まってしまう」「なぜ他と値段が違うのか」などの質問を受けます。そういう時は、花によって結晶具合が違うことや、家族経営で定地養蜂のため価格を抑えられる、などと説明し、理解してもらっています。

蜂蜜の生産量は年によって異なり、採蜜してみるまで分かりません。2017年にはよく咲いた山の藤が、2018年は咲かず、蜜も採れなかったといいます。予約をしてもらっても、約束どおりの蜂蜜が届けられるとは限りません。その年の気候や植生に大きく左右される養蜂ですが、孝子さんは「それが蜂蜜の面白いところだと思ってもらえるとありがたい」という思いを持ちながら、その年の特徴についての丁寧な説明を添えて、お客さんに蜂蜜を届けています。



たかだ養蜂の百花蜜



飯田典子さん

～ミツバチの世界に魅せられて～



【養蜂の概要】

住 所：東京都国立市

蜂群数：8 群

蜂 場：東京都八王子市

労働力：飯田典子氏（60）

生産物：蜂蜜

主な販売先：消費者への直販、道の駅

事業の開始：2011年

URL：ミツバチ日記（飯田さんブログ） <https://beelove88.exblog.jp/>

始めたきっかけ

もともとフォトジャーナリストが本業の飯田典子さん。20代の頃はフィリピン・ネグロス島に滞在し、現地の貧困問題やそこで暮らす子どもたちを取材していました。50代に入り、新たな写真のテーマとしてバラを撮影している時、バラに訪花するミツバチの世界に惹かれていきます。養蜂家取材するうちに、「自分で蜂を飼えばもっと写真が自由に撮れる」と思った飯田さんは、国立市のNPO法人（くにたち富士見台人間環境ステーション：以下KF）が主催する養蜂の連続講座に参加し、そこで一緒に学んでいた女性と養蜂を始めることになりました。

市民養蜂家として

当初は国立市内の畑に巣箱を置いていましたが、地主さんが蜂に刺されてしまい、1シーズンで巣箱を引き揚げることに。ちょうどその頃、NPO法人KFと三鷹市のNPO法人みつばち百花、地元農家の協働で、市内の梨園跡地を活用した蜜源ガーデンの構想が立ち上がり、2012年の春、「くにたち蜜源ガーデン」が誕生します。飯田さんたちはここで養蜂を再開しますが、2013年春には、それぞれ別々に飼うことに。飯田さんは2群から再スタートし、2016年には約10～15群から300kg近く採蜜できるまでに拡大しました。

2014年の春に、ミツバチが大量死したことがありました。国立市には2軒の梨



ラベンダーの花とミツバチ

農家があり、梨の花が散ったときの農薬散布が原因と思われたため、翌年からは散布日を事前に知らせてもらい、散布日には巣門を閉めて対策し、何とか乗り切ることができました。

蜜源ガーデンには110種類以上のハーブや蜜源植物が植えられ、4年目にして、養蜂も順調に行くようになってきましたが、2016年の春に地主さんが急逝され、2016年末で閉鎖されてしまいます。巣箱の移転先を探してもなかなか見つからず、飯田さんは養蜂を諦めかけますが、直前にやっと八王子市の雑木林に移転することができ、現在、8群を飼っています。

養蜂をめぐる課題

「養蜂を始めるのに一番大変だったのは、住宅が密集し、巣箱を置く場所がないということ。少ない農地もどんどん宅地になり、開発で蜜源も減少する一方。農地があっても農薬問題などもあり、ミツバチを取り巻く環境は厳しいものです。蜜源が少ない状況で、養蜂業への新規参入はとてもハードルが高いと思いました」と飯田さん。

蜜源ガーデンで採れた蜂蜜は、国立市のNPO法人（地域自給くにたち）を通じて学校給食に提供したり、地元野菜の販売店に卸したりと、養蜂を通じて地域とつながりも生まれました。「NPO法人KFの一橋大学の学生たちが、市内の小中学校でミツバチ講座を開催していたので、子供たちの養蜂への関心も高かった。地域産業を知るための授業で、小学3年の女子が5人、養蜂場見学に来て、あれこれインタビューしていったこともありました。しかし、一般の人は蜂蜜は大好きでも、蜂や養蜂への関心や理解はまだまだ足りない」と飯田さん。

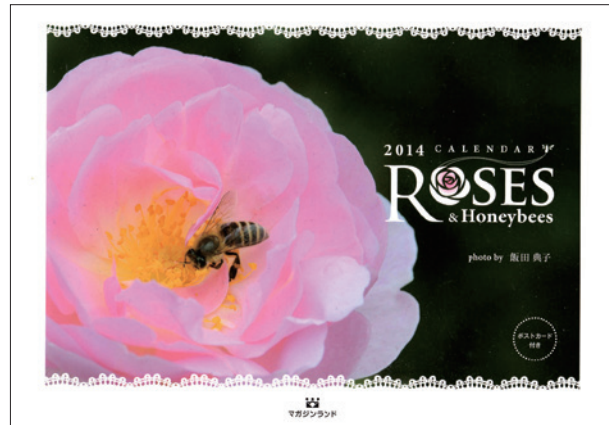


蜜源ガーデンでの採蜜風景



八王子の蜂場

2014年にバラとミツバチを撮影した写真カレンダーをバラ園のお店に持ち込んだところ、「バラはいいけれど、蜂はちょっと……」と断られたこともあり、「養蜂は環境問題を考える良いきっかけになりますが、一般の人に向けた情報発信がもっと必要だと思います」。



養蜂の可能性

「ミツバチを8年間飼ってみて、さまざまな問題や課題に直面しましたが、ミツバチの魅力に助けられて続けることができました。現在、採蜜を手伝ってくれているのは、40代～70代の女性たちです。私の蜂蜜を食べて、採蜜に興味を持ち、みな楽しみながらやっています」と飯田さん。女性ならではの工夫は搾った蜂蜜を五升缶に入れていること。一斗缶（24kg）の半分の容量のため、女性一人でも運ぶことができるといいます。

「現在、群馬県に住む母の介護に通いながら、八王子の蜂場に通っています。いつまで養蜂ができるかわからないけれど、この8年間の養蜂体験はとても貴重なもの。ミツバチの写真はまだ撮り足りないけれど、インターネットを通じて各国の養蜂の様子を知ることができて、世界が広がった」と飯田さん。

これまで、開発途上国で仕事をしてきた経験がある飯田さんは、「巣箱を置かせてもらえる場所と蜜源があれば、養蜂は元手がそれほど要らない。特に開発途上国では、女性の副業に適しているのでは」と、養蜂の可能性を語ってくれました。

(Photo by Noriko Iida)



くにたち蜜源ガーデンで採れた蜂蜜

川端美穂さん、可兒優さん

～父の蜂蜜を受け継いで～



【養蜂の概要】

住 所：岐阜県本巣市木知原591

蜂群数：約480群（採蜜用・花粉交配用を合わせた最大数）

蜂 場：岐阜県本巣市

労働力：川端美穂氏（43）、可兒優氏（33）、筑間幸代氏（71）

生産物：蜂蜜、貸し蜂

主な販売先：蜂蜜……消費者への直販、JA、道の駅、食品専門店

貸し蜂…梨・柿・イチゴ農家への貸し出し（養蜂組合の事業として）

事業の開始：創業1984年、設立2010年

URL：チクマ養蜂 <http://www.chikumayouhou.com/>

養蜂を始めたきっかけ

1984年頃、美穂さんと優さんの祖父が趣味で養蜂を始めたのがチクマ養蜂の始まりです。その後、父の孝成さんが事業を引き継ぎ、母の幸代さんが事務や蜂蜜の瓶詰め作業を行っていました。美穂さんも20代の頃から家の仕事を手伝っていましたが、蜂を本格的に見た経験はありませんでした。ところが2009年、孝成さんが事故で急逝してしまいます。残された600群の蜂群を、美穂さんが右も左も分からず引き継ぐことになりました。美穂さんは幼い子ども3人を保育園に預け飼育部門を、四女の優さんが姉をサポートしながら販売部門をそれぞれ担当し、母の幸代さんが会社の代表を引き継ぎました。

二人の役割

美穂さんは、父と交流があった養蜂家の方を「師匠」として、飼育技術を一から学びました。飼育の現場は過酷で、体



チクマ養蜂の蜂蜜

写真：チクマ養蜂



自宅に併設された直売所

調を崩して不眠症になったことも。「家族の協力でこの時期を乗り越えることができたから、今がある」と美穂さんは話します。2018年10月には、長年力を入れてきたトチ蜜が、岐阜県のはちみつ共進会で農林水産大臣賞を受賞するという嬉しい出来事もありました。

それまで蜂蜜の販売ルートはJAが中心でしたが、父の代よりも規模が縮小した分、蜂蜜の良さを伝えて付加価値を付けていこうと、優さんは商品展開を広げ、イベント出展や体験学習を積極的に行うようになりました。蜂蜜のラベルもデザイナーの友人に依頼して「女性らしい品の良いイメージ」に一新しました。最近では、イチゴやカキなど「花粉交配で実をつけるフルーツ」と蜂蜜を組み合わせた加工品を試作中です。

女性ならではの課題

養蜂組合は年配の男性がほとんどで、女性であり若い世代の美穂さんは発言しづらいこともあったようです。養蜂を始めて、4～5年ほど経った頃から少しずつ認めてもらえるようになってきました。

毎年行われる日本養蜂協会の表彰式では、養蜂の講習会が開催されます。養蜂技術に関する内容ですが、優さんも「お客さんから養蜂のことを聞かれるので、基本的なことは勉強しておきたい」参加しています。

美穂さんにとって、飼育の現場で一番きついのは「夏の暑さ」です。また、蜂場にはトイレがないことも、女性にとっては問題です。水分の摂取を控えたり、必要な場合は家まで戻ったりしています。また、巣箱は、軽ければ一人で運べ



写真：チクマ養蜂



農林水産大臣賞を受賞したトチ蜜（上）とトチの花（下）

写真：チクマ養蜂



現在試作中の柿の蜂蜜漬。特殊な製法により、歯ごたえのある食感が残されている

ますが、採蜜群の重い箱は男性の力が必要です。「女性でも扱いやすいような道具があれば」と美穂さんは話します。男性など力の強い人にとっては作業効率が落ちる道具であっても、従業員や家族の女性、体を痛めた場合などに助けとなる道具があれば、それを喜ぶ人や喜ぶケースがあるでしょう。

美穂さんの地域には、「蜂屋は、創業者の血族であって地元に住み続けている人が継ぐべき」という不文律があり、結婚して市外に移り住んだ美穂さんも、このことを指摘された経験があるそうです。外に嫁ぐ女性や若手の参入者には厳しいルールであり、蜂場などを守ることが出来る一方で、新しい市場や情報発信手段とのつながりが希薄になる恐れもありそうです。



山に囲まれた本巢市の蜂場

写真：チクマ養蜂

養蜂を取り巻く環境

本巢市の山林では、熊の被害が出ています。養蜂家にとっては避けることができないことであり、巣箱を置く場所や方法を工夫するなどして共存しています。また、最近では蜜源となるトチの木が材木用に高く売れるという理由で伐採されたり、山にソーラーパネルが設置されて蜂場を追われたりすることもあります。「養蜂家は蜜源が急になくなるリスクと常に隣り合わせ」と美穂さんは言います。また、一般的に巣箱の外で待ち構えてミツバチを攻撃するキイロスズメバチが、気候の変化のせいか、2018年は個体が小さく、巣箱に入り込んで蜂を攻撃したケースもありました。

今後に向けて

「国産の蜂蜜は手が届かないというイメージがあるので、消費者の関心をもっと高めていきたい」と優さんは考えています。美穂さんからは「ミツバチの生態や全国各地の養蜂を少しずつ紹介するようなテレビ番組があったら興味を持ってもらえるのでは」とのアイデアも挙がりました。

「姉は本当に頑張っている」と話す優さん。「大変なことも色々あったけれど、それ以上によい出会いがたくさんあり、支えてくれる人たちがいる。そうした人たちとのご縁を大切にしていきたい」と思いを語ってくれました。

榎本佐和子さん

～蜂蜜の美味しさに魅せられて～



【養蜂の概要】

住 所：愛知県豊川市御津町

蜂群数：採蜜用35群（2018年6月時点）、ポリネーション用3～5群

蜂 場：豊川市に1ヶ所

労働力：榎本佐和子氏（45）

生産物：蜂蜜、貸し蜂

主な販売先：蜂蜜……消費者への直販、スーパーマーケット、ホテル、直売所など
貸し蜂…市内のイチゴ農家

事業の開始：2012年

URL：榎本はちみつベリーファーム <https://www.enomoto-farm.com/>

養蜂を始めたきっかけ

榎本さんは7年前に、新規就農者として農業と養蜂を始めました。きっかけとなったのは、農家だった夫の祖父の畑の一角で、夫と趣味で始めたブルーベリー栽培です。その翌年に花粉交配用のミツバチを導入したところ、ミツバチが増えて蜂蜜が採れるようになり、蜂蜜の美味しさに魅せられたといいます。採れた蜂蜜を知り合いにプレゼントすると、世代を問わず喜んでもらえたことも嬉しかったそうです。



榎本はちみつベリーファームの百花蜜

写真：榎本はちみつベリーファーム

榎本さんはそれまで勤めていた市役所を2012年に退職し、本格的に農業と養蜂に取り組むことを決意。作物の種類と蜂群を少しずつ増やし、現在はブルーベリーやブラックベリー、ラズベリー、野菜類、イモ類、小麦などを栽培する傍ら、畑の一角に巣箱を置いて養蜂を行っています。

女性一人で就農して

榎本さんの住む豊川市はイチゴやバラ、トマトなどの施設栽培が盛んな地域です。一方、養蜂家は他におらず、養蜂団体との結びつきも薄いため、飼育技術は本やインターネットで学びました。蜂が病気で全滅した年もあり、毎年、試行錯誤しながら独学で乗り越えてきたといいます。もともと農業は夫の夢だったこともあり、休日は夫も積極的に作業を手伝って

くれます。

飼育の現場は夏の暑さや巣箱の重さが難点です。榎本さんには刺されるとひどく腫れる体質のため、夏場でも全身防護服を身に着けて作業します。苦労はあるものの、「義父や夫が手伝ってくれる。群数が多い專業の人はもっと重労働だろうと思う」とのことでした。

榎本さんは、農林水産省が推進する「農業女子プロジェクト」に参加しています。ここで出会った仲間と一緒にイタリア野菜の栽培を学んだり、地域リーダー育成塾に参加したりして、ネットワークを広げています。育成塾で知り合った人からイベントの講師に呼ばれることもあります。作業着や農機具など、使ってみて良かったものの情報があつという間に共有され、作業の一コマを楽にしてくれることもあります。一方、養蜂では女性同士のつながりがなく、情報のやり取りもできません。新規就農した時も、「養蜂で就農する女性は非常に珍しい」と県の担当者に言われたそうです。

毎年、春から夏にかけての繁忙期には外に出かけることができませんが、お盆の時期を過ぎて少し余裕ができると、サツマイモの収穫体験会を行ったり、新規就農者の農場見学を受け入れたり、農業女子プロジェクトや農林水産省の女性農業コミュニティーリーダー塾に参加したりと、活動の幅を広げています。

榎本さんは、現在中学生の2人の子どものお母さんでもあります。就農した頃は幼子を抱えて大変だったのではないかと聞くと、「家で仕事ができるようになったので、フルタイムで働いていた頃よりも時間の融通がきくようになった」とのこと。お子さんたちも、母の仕事を間近で見てよく理解しており、袋詰めやラベル貼りを時々手伝ってくれるそうです。

養蜂を取り巻く環境

養蜂場周辺は周辺に山がなく、ここで採れる蜂蜜は菜の花やレンゲ、クロガネモチ、ミカ



蜂場の前で

写真：榎本はちみつベリーファーム



畑の一角に置かれた巣箱



白菜やイタリア野菜など、約10種類の冬野菜が育つ畑

ンなどの百花蜜です。地元の年配の人からは、「昔食べた味で懐かしい」という声をよく聞くそうです。周りに養蜂家がおらず、また祖父が農家だったおかげで周辺の農家との調整も図りやすく、蜂場の確保については恵まれていることでした。

一方、養蜂は天候や季節に影響されるわりに露地野菜と比べて投資額が高いこと、蜜源によって蜂蜜の単価が大きく異なること、農作物と違って仲卸しのような販売ルートがないこと、新規参入者が技術を学ぶ場所がないことが難点であるとのことでした。また、近所の人々が蜂に刺されないような配慮も必要です。榎本さんは畑の周りに防風ネットを張り、ミツバチが高い位置を飛んで巣箱に帰ってくるように工夫しています。

今後に向けて

榎本さんは以前、ミツバチの社会を人間の会社に見立てた文章をブログで発信していたことがあり、読者から大きな反響があったそうです。最近では蜂蜜への関心が高まっており、蜂蜜の効能やレシピがメディアでよく紹介されるようになりましたが、榎本さんは、ミツバチや養蜂そのものへの理解も深めていく必要があると感じています。そのため、養蜂家の視点から、養蜂そのものに関心を持ってもらえるような発信を工夫していきたいと考えています。実は、以前は蜂蜜が苦手だったという榎本さん。自分なりにこだわりを持って、自分が自信をもって美味しいと言える蜂蜜を、商品のストーリーも添えて消費者に発信しています。

夫も定年後は就農を考えているとのこと。夫婦で農業と養蜂に取り組む日々に向けて、一歩一歩、着実にその基盤を作っています。



農作業の時は日焼け対策を万全に。このマスクは上下に分かれているので、そのまま水を飲むこともできて便利とのこと



箱の手前にかかっている金具は、内見中に巣枠を引っかけておくためのもの。巣枠を地面に置かなくて済むので重宝している

廣田亮子さん

～養蜂から見えるもの～



【養蜂の概要】

住 所：山口県下関市秋根新町13-24

蜂群数：約200群（採蜜用）

蜂 場：下関市周辺に1ヵ所

労働力：廣田道久氏（50）、廣田亮子氏（47）、臨時スタッフ数名

生産物：蜂蜜、貸し蜂

主な販売先：蜂蜜……消費者への直販、道の駅、食品専門店
貸し蜂…市内のイチゴ農家

事業の開始：2008年

URL：廣田養蜂場 <http://hirota-beefarm.com/>

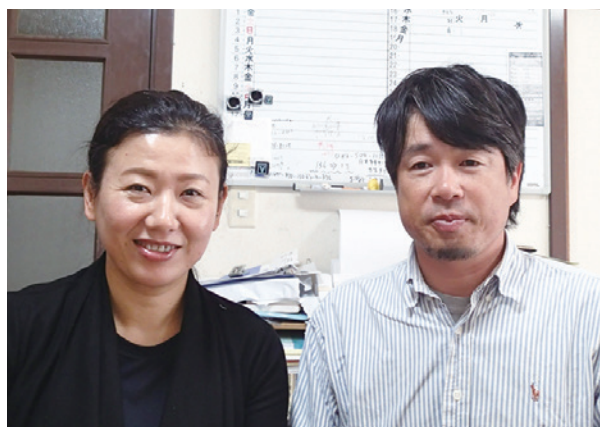
始めたきっかけ

短大を卒業後、一度は会社員として働いていた亮子さんですが、一念発起して看護学校に入り直し、看護師の資格を取得。看護師として働いていた20代後半に、道久さんと結婚しました。道久さんは当時サラリーマンで、兼業の養蜂家だった父の仕事を手伝っていました。亮子さんもその頃から貸し蜂の配達などを時々手伝っていましたが、夫婦で養蜂業を営むことになるとは全く想像していませんでした。しかし道久さんは、結婚8年目に脱サラして養蜂家となることを決意。子育てのため休職していた亮子さんは、いずれ看護師に復帰するつもりでいましたが、夫の決断を受け入れ、一緒に養蜂の世界に入りました。

夫婦の役割分担

飼育部門は道久さんが一手に担い、亮子さんは商品の販売・広報を担当しています。「もともと養蜂を知らない消費者」であり、常に生活者目線に立って情報発信しているとのこと。「女性」の視点や医療の知識もここで生かされています。ホームページや商品のデザインは、「たまたま縁があって出会った」という岡山県の男性デザイナーに依頼しています。

仕事の上では自分は「広報担当」であり、夫は「会社の代表」。夫婦ではあるものの、立場を意識して接するように心



亮子さんと道久さん

がけています。新しいことを提案する時も、目的や熱意を整理して、代表に「プレゼン」します。また、養蜂業を始めた頃、「自分が目指す養蜂のレベルが『富士山』だったのに対し、夫が目指しているのは『エベレスト』だった」と気づいて愕然としたことがあったそうです。それ以来、亮子さんは5年後、10年後の見通しを折に触れて道久さんと共有するなど、意識的にコミュニケーションを取るようになっているそうです。

地域と共存しながら

養蜂を始めて間もなくの頃、蜂が全滅してしまったことがありました。周辺の水田に散布される農薬の影響と思われ、一時は廃業も考えましたが、「花粉交配用の蜂がいなくなるとは困る」と困惑したイチゴ農家の協力で、農薬散布との調整を図り、被害を乗り切ることができました。こうした経験から、道久さんは「農家との共存や地域の協力があって、自分たちの生活がある」と考えています。亮子さんも「せっかく養蜂が再開できたのだから、美味しさだけでなく『安全』に徹底的にこだわった蜂蜜を作りたい」という思いを強くします。

義父は開拓して蜂場を確保し、養蜂を始めましたが、その後立ち退きを3回繰り返すことになりました。今は、廣田養蜂場では、標高100mの山に蜂場を持ち、土づくりからこだわった蜜源の農地を作っています。先代は百花蜜のみでしたが、亮子さんたちは市場をリサーチしながら、商品を拡大してきました。食べて美味しくて自分でも採ってみたいと感じたショウシ蜜、子供のころ食べていたレンゲ蜜、蜂場の山に8月上旬一斉に咲く烏山椒の蜜など、こだわりの蜂蜜を生産しています。蜂蜜は味や熟成度を基準に6段階にランク分けし、付加価値を高めています。温度管理を徹底し、一度も加熱しない高付加価値蜂蜜の生産も始めました。

もともと実家が食品販売を営んでおり、自身も食べるのが大好きという亮子さん。普段から食べるものにもこだわり、味覚が鈍らないように心がけているとのことでした。自分が自信をもって勧められるもので商売する、という姿勢を貫いています。

女性ならではの課題

養蜂団体には道久さんのみが加入しており、亮子さんは飼育やデザインの研修は受けたことがありません。首都圏では蜂蜜に関する講座が頻繁に行われていますが、遠方だと参加のハードルが高く、



温度管理した専用保管庫で寝かせて熟成させた「プレミアムナチュラルハニー」シリーズ



最上級ラインの「極」シリーズ

繁忙期はなおさらです。「東京にいたら全部参加してみたい」と話す亮子さんは、「オフシーズンにエリアを絞って開催すれば、女性も参加できるのでは」と感じています。

看護師には復帰せずに養蜂の世界を選んだ亮子さんですが、「常に最善の選択をしてきたつもりなので、後悔は全くない」といいます。同じような道を歩む女性へのアドバイスを聞くと、「自分が持っているものを生かすために、まず自分自身を知ること」「自分がやりたいことではなく、周囲やお客さんが求めていることを知り、それに応えていくこと」と答えてくれました。

今後に向けて

将来的には、海外への輸出も視野に入れて、より熟成度の高い蜂蜜のラインを新たに作りたいと考えています。現在は、欧米の市場や有機認証などについて勉強を重ねているとのことでした。

廣田養蜂場のある下関市は本州の最西端に位置しており、蜂場のある山は三方を海に囲まれ、さまざまな蜜源に恵まれています。はぜや烏山椒などの自然の植物に加え、種をまいて育てたショウシや周辺で栽培されているミカンも蜜源となります。

ミネラルを含んだ海風を受けるため、蜂蜜にも塩味を含んだ独特の風味があります。しかしその海も、最近では魚が獲れなくなるなど、環境が変化してきているとのこと。亮子さんは今、「海を育てている山を育てて、下関の大地を守りたい」という究極の夢を抱いています。養蜂家が見る地球の姿に、日本の市民が関心を寄せる時代がすぐそこまで来ています。



下関の山々をバックに





コラム 2

家畜保健衛生所と養蜂協会の役割

2012年6月、養蜂振興法が改正され、すべてのミツバチ飼育者が都道府県に届け出ることが義務付けられました。この改正は、趣味養蜂の増加や蜜源の減少に伴う蜂場トラブルを防止するとともに、衛生的な飼養管理によって蜂病の蔓延を防止すること等を目的としたものです。ミツバチ飼育者は、毎年1月1日現在の飼育状況と年間飼育計画を、管轄の家畜保健衛生所を通じて住所地の都道府県知事に提出する必要があります。

他の家畜と同様、ミツバチが病気になれば周辺の蜂場にも大きな影響を及ぼします。家畜伝染病（法定伝染病）に指定されている腐蝕病^{ふそ}や、届出伝染病に指定されているチョーク病、バロア病、ノゼマ病、アカリシダ二症の兆候が見られた場合には、直ちに管轄の家畜保健衛生所に報告する必要があります。

また、各都道府県にはそれぞれ養蜂協会（組合）が組織されており^{*1}、会員相互の経営・技術の交流、蜜源増殖の推進、ミツバチの転飼調整、養蜂に関する講演会や情報紙の発行、蜂蜜・ローヤルゼリーの消費宣伝などの活動を行っています。会員になると、講習会への参加や情報誌の入手、会員同士の交流などを通じて、養蜂技術を含めたさまざまな情報を入手することができます。家畜保健衛生所による病虫害防除の講習なども行われることがあるようです。

ある蜂群が病原体に侵されていると、直線距離で600m離れていても、迷い蜂によって水平感染するとの研究報告もあり^{*2}、地域全体で病虫害防除に取り組む必要があります。地域の養蜂協会（組合）や家畜保健衛生所の役割は、ますます大きくなっています。

※1 一般社団法人日本養蜂協会の下部組織

※2 第41回ミツバチ科学研究会特別講演1「福岡県におけるミツバチ衛生管理強化のための対策」（福岡県農林業総合試験場 資源活用研究センター副センター長 浅田研一氏）

参考：各都道府県の養蜂協会（一般社団法人 日本養蜂協会ウェブサイト）

<http://www.beekeeping.or.jp/about/memberlist>



埼玉県養蜂協会では、養蜂の飼育技術や衛生管理に関する講習会を定期的に行っている

4. 付属資料

1 | 養蜂経営における女性の貢献調査事業 事業評価検討委員 名簿

鈴木 晴雄 埼玉県養蜂協会 会長

中村 純 玉川大学 農学部 教授

◎西川 芳昭 龍谷大学 経済学研究科 教授

服部 朋子 NTC インターナショナル株式会社
技術本部 地球環境部 部長

室屋 有宏 桃山学院大学 経営学部 教授

山時 文昌 一般社団法人日本養蜂協会 常務理事

米川 安寿 草木のはちみつ専門店 事業主

◎は座長

(五十音順：敬称略)

養蜂に関係する皆様へ：アンケート調査ご協力をお願い

公益社団法人国際農林業協働協会（JAICAF）

養蜂には、内検や採蜜など、様々な作業があります。そして、用具の準備、蜂蜜の充てんや販売、採蜜に合わせた食事の用意などの小さな作業もまた、養蜂を支えているのではないのでしょうか。



養蜂の現場で、女性は活躍していますか。「あまり活躍していない」と思う人もいるかもしれません。でも、もしかしたら、そうした小さな作業のなかに、**女性の活躍が隠れている**かもしれません。

このアンケートは、“**女性がどのように養蜂に関わっているか、関わったら良いと考えているか**”を明らかにするために実施するものです。

農業分野では、女性の活躍や労働に関する調査が早くから行われ、その結果、夫婦が協力し合う農業経営や直売所の活動などにつながりました。

養蜂の分野でも、この調査によって、**女性がこれまで以上に、楽しく、積極的に養蜂に関われるようになることを期待**しています。



養蜂にとって繁忙期であるこの時期にアンケート調査をお願いし、誠に恐縮ですが、ご理解、ご協力くださいますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

女性が見えないところで貢献していることがよくあります。わが家では女性は養蜂に関与していないと思われる場合も、ぜひ、アンケートにご参加くださいますよう、重ねてお願いいたします。

ご回答いただいた内容および個人情報、厳重に管理し、この調査の目的のみに使用します。
また、個人が特定されるようなことは行いません。いただいた回答については、個人が特定されない形で分析を行い、2019年3月末を目途に、分析結果を公開・郵送させていただきます。

返信用封筒にて、下記を目途にポストに投函ください。

2018年7月31日(火)

アンケートの内容についてのご質問、ご意見は

公益社団法人国際農林業協働協会（JAICAF）業務グループ：**西山・森・田中**まで

TEL：03-5772-7880／FAX：03-5772-7680

E-mail：西山（deske@jaicaf.or.jp）・森（m.mori@jaicaf.or.jp）・田中（m.tanaka@jaicaf.or.jp）

※アンケートの構成と目的は裏面をご参照ください。

※アンケートの内容と構成

アンケートは3つに分かれています。

I. 養蜂への女性の関わり

- 目的：「女性がどのように養蜂に関わっているか」を明らかにする
- 答えていただきたい人：女性の皆さん（該当者複数の場合、それぞれ回答いただければ幸いです。）
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
養蜂との関わり（始めたきっかけ、経験数、時間、発言）	I-1～I-5 (p.1)
お客さんとの関係（販売、消費者情報、販売方法、情報発信）	I-6 (p.1、p.2)
研修・技術習得の状況	I-7～I-8 (p.2)
他の養蜂に関わる女性との関係	I-9 (p.2)
今後の希望1（継続、内容、研修）	I-10～I-12 (p.2、p.3)
今後の希望2（ネットワーク）	I-13～I-14 (p.3)
今後の希望3（改善の希望）	I-15 (p.3)
回答者の情報	I-16～I-17 (p.3)
実際の仕事、作業の分担	I-18 (p.4)

II. 養蜂事業の概要

- 目的：養蜂は生産の有り様が様々であるため、IおよびIIIの回答分析の基礎情報とする
- 答えていただきたい人：養蜂・ミツバチ飼育のことが分かる人（関係者であればどなたでも）
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
養蜂形態（専業、兼業、趣味的）	II-1 (p.1)
届出者	II-2 (p.1)
飼育概要（蜂群数、移動、経験）	II-3～II-5 (p.1)
生産物、販売、売上金	II-6～II-8 (p.1)
5年前との変化（収入、多角化）	II-9～II-11 (p.2)
労働負担、労働力	II-12～II-13 (p.2)
団体登録	II-14 (p.2)
経営の課題	II-15～II-16 (p.2)
法人、後継者	II-17 (p.2)
回答者の情報	II-18 (p.2)

III. 女性の経営参画に関する意向

- 目的：女性の経営参画のための環境整備に必要な事項を明らかにするとともに、農林水産省が実施する男女共同参画意向調査に沿った質問によって、他部門との比較を行う。
- 答えていただきたい人：女性と男性双方それぞれ
- 質問の構成

質問の内容	質問番号
回答者の情報	III-1 (p.1)
養蜂経営への女性の理想的な関わり	III-2～III-3 (p.1)
家族経営協定について	III-4 (p.1)
女性の経営参加促進に必要な環境整備	III-5 (p.1)
男女の養蜂・地域活動・家事育児介護への理想的な関与	III-6～III-7 (p.2)
報酬の在り方	III-8～III-9 (p.2)

Ⅰ. 養蜂への女性の関わり

※飼育者である女性、あるいは、養蜂家庭内の女性にお尋ねします。

I-1. あなたは養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関わっていますか

はい いいえ

→ 「いいえ」の場合、質問I-2～質問I-9（黄色）を飛ばして、質問I-10（緑）からお答えください。

※ I-1で「はい」と答えた方にお尋ねします。

I-2. 養蜂を始めたきっかけは何ですか？

I-3. 養蜂に関わるようになって何年くらい経ちますか _____年くらい

I-4. 一日のうち、養蜂に割く時間はどのくらいですか？

繁忙期： _____時間 _____分程度 / 閑散期： _____時間 _____分程度

I-5. 養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関して、自分の意見を言い、それが採用されることがありますか

よくある 時々ある あまりない ほとんどない 分からない

I-6. あなたとお客さん（消費者・顧客）との関係について、お尋ねします。

I-6-1. ハチミツなどを販売することがありますか はい いいえ

I-6-2. 販売している場合、消費者の情報や顧客ニーズをどこから得ていますか（複数回答可）

消費者から直接 知り合いの養蜂家などから SNSを通じて
TVから インターネットから 書籍から
地域の養蜂団体から 養蜂関連のイベントで 地域のイベントで
その他（ _____ ）

I-6-3. これまで、新しい販売方法を提案／実行したことはありますか はい いいえ

「はい」の場合、誰かに相談しましたか はい（誰に _____）

いいえ

I-6-4. 消費者への情報発信は、どのようなことを行っていますか（複数回答可）

チラシの配布 養蜂体験会等を開催 地域のイベント等を活用
 SNS で発信 ホームページを開設 カフェや直売所に置かせてもらう
 特に何もしていない その他（ ）

I-7. 養蜂全般に関する情報や飼育技術に関する情報は、どこから得ていますか（複数回答）

家族・社内で 知り合いの養蜂家などから 地域の養蜂団体から
 家畜保健衛生所から 養蜂関連のイベントで SNS を通じて
 TV から インターネットから 書籍から その他（ ）

I-8. 飼育技術研修について、お尋ねします。

I-8-1. これまで飼育技術研修を受けたことがありますか 有る 無い

※「**有る**」と答えた方は、質問 No. I-8-2 へ／「**無い**」と答えた方は、質問 No. I-8-3 へ

I-8-2. 「**有る**」場合、研修は満足できるものでしたか

満足できた 不満だった

I-8-3. 「**無い**」場合、それはなぜですか（複数回答可）

研修を受ける時間がない 研修が近くで開催されない 研修の機会がない
 受けた内容ではない 必要を感じない 一人で行くのは不安
 何となく行きづらい その他（ ）

I-9. 相談できる女性養蜂家（養蜂に携わっている女性）はいますか いる いない

※養蜂に関わっているかいないかにかかわらず、すべての方にお尋ねします。

I-10. 今後も養蜂に関する活動を続けたい、あるいは、今後やってみたいと思いますか

そう思う そうは思わない どちらともいえない

I-11. 養蜂で、あなたが 主体となって 今後やってみたい仕事や、拡大していきたい仕事があれば教えてください（複数回答可）

ミツバチ飼育 貸し蜂業務 商品開発 販路開拓 商品販売・販売促進（PR）
 社会的活動（地域での蜂蜜に関するイベント開催や教育現場でのレクチャーなど）
 特にやってみたいと思わない その他（ ）

I-12. 受けてみたい研修がありますか、ある場合それは何についてですか（複数回答可）

飼育技術 ミツバチの生態 養蜂経営（顧客管理、経理等含む）
 販売促進（広告、ホームページ、ネット取引、デザイン等含む） 社会・教育活動
 特に受けてみたいと思わない その他（ ）

I-13. 下記のような消費者との交流に関心がありますか（複数回答可）

庭先やネット販売で交流したい 展示会やマルシェ（市場・マーケット）に出店してみたい
 地域でのイベント等でミツバチや養蜂を紹介したい 教育現場で教えてみたい
 特に関心はない その他（ ）

I-14. 今後、女性養蜂家を対象としたイベント等があれば、参加したいと思いますか。

そう思う そうは思わない どちらともいえない

I-15. あなたが養蜂に関する活動を行う、あるいは、拡大するとしたら、何が問題ですか。家内の仕事を含めて、改善したい点、不満な点などがあれば教えてください。

※ お答えくださっている方についてお尋ねします。

I-16. あなたの年齢を教えてください。

～20 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80～

I-17. 経営主（飼育責任者）から見てあなたは？

本人 配偶者 娘 息子の配偶者 母親 配偶者の母
 その他親戚 従業員・研修生

I-18. 裏面「養蜂の仕事80ー女性の関わり」に記載のある80の仕事について、お答えください。

「養蜂の仕事80」は、女性の作業の実際を見るために作成した表です。例えば、「採蜜」と言っても、そこには様々な準備や後始末、周囲の環境整備等があり、目に見えにくいけれども女性が活躍していることもあります。

家事についても、養蜂作業を支えるものが行われていると思います。

養蜂に関わっていないとお答えいただいた方も含め、日々の作業を振り返って、あなたの各作業への関わり方について教えてください。

I-18. 養蜂の仕事 80 - 女性の関わり

下表に取り上げた業務について、実際の関わり方について最も適切なものにチェック (✓) を入れてください。

- ◎ 主に自分（女性）が実施している
 - 誰かと協力しながら実施している・相談しながら実施している
 - △ 誰かを手伝っている
 - × 他の人がやっていて、自分はやっていない
- ※ 作業が該当しない場合は、チェックを入れないでください。

<例>

✓	作業記録を整理する
△	
×	

経営・販売	何を販売するか決める	どこに販売するか決める	いくらで販売するか決める	採蜜したハチミツを保管する	包装容器を調達する	ハチミツをびん詰めする	マスク・衛生帽等を準備する	ラベルのデザインを決める	
	ラベルを貼付する	お客さんに販売する	伝票を作成する	委託先と交渉する	商品在庫を管理する	蜂群の購入を決める	実際に蜂群を発注する	納品された蜂群を受取る	
	今年度の経営方針を決める	従業員の勤怠管理を行う	経理事務を行う	確定申告の準備をする	確定申告書類を提出する	HPを作成・更新する	SNSで発信する	養蜂協会の会合に出席する	
家事	作業に合わせて食事を作る	作業に合わせて配膳する	作業に合わせて食事を片付ける	作業に合わせて洗濯する	作業に合わせて掃除する	作業に合わせて日用品を調達する	状況に応じて家計をやりくりする	隣近所との付き合いに気を配る	
養蜂	飼育	内検する	巣を合同する	巣箱を保温する	巣箱の保温材を取り除く	建勢のタイミングを決める	給餌する	給餌用の花粉や糖液を準備する	継箱を乗せる
		新しい女王バチを作る	育成箱を準備する	巣板・巣箱を清掃する	巣板・巣箱を保管する	ハイツールを点検・保管する	蜂場を清潔に保つ	保管場所を清掃・整頓する	作業記録を整理する
	移動	届出書類を作成する	届出書類を確認する	巣箱を運搬用に荷造りする	巣箱をトラックに運ぶ	巣箱を荷台に積む	転出先蜂場を整える	移動のための運転する	転出元蜂場を片付ける
		病害虫の情報を収集・共有する	薬剤の購入を決める	薬剤を発注し、受取る	薬剤を保管・在庫管理する	薬剤を使用する	異常な巣を抜く	疾病管理を記録する	家畜保健衛生所に連絡する
	採蜜	採蜜のタイミングを決める	採蜜する巣を抜く	採蜜する巣を運ぶ	分離機を回す場所を清潔にする	分離機にかける	分離機を保管・管理する	蜜蓋を切る	切った蜜蓋を処理する
	貸し蜂	農家から注文を受ける	顧客管理を行う	蜂群の貸し出し計画を作る	蜂群を配達する	蜂群を回収する	伝票を作成する	農家に蜂群の扱いを伝える	農家から相談を受ける

II. 養蜂事業の概要

※飼育関係者であれば、どなたにお答えいただいても構いません。

あなたの養蜂についてお尋ねします。

II-1. 最もあてはまる養蜂形態は何ですか（1つ選択）

専業養蜂家 兼業養蜂家（主業） 兼業養蜂家（副業） 趣味的養蜂家

II-2. 飼育届出者は誰ですか

届出者の性別 男 女

届出者は実質的な経営主ですか はい いいえ

（趣味的養蜂家の場合は 届出者は飼育責任者ですか）

届出者は世帯主ですか はい いいえ

II-3. 届出蜂群数は何群ですか（2018年1月1日時点） _____ 群

II-4. 蜂群の移動はありますか 移動する 移動しない

II-5. 養蜂を始めたのはいつ頃ですか（例：○代前、昭和／平成○年頃～、約○年前）

II-6. どんな生産物（商品）を扱っていますか（該当する項目を○で囲む。複数回答有）

そのうち、主たる産品／商品は何ですか（1つに◎）

はちみつ 花粉 蜂群（販売） 蜂群（貸し蜂） 蜜ろう プロポリス
ローヤルゼリー 蜂産品加工品 蜂産品を利用した飲食 その他（ ）

II-7. 採った蜂蜜をどうしていますか（複数回答有）

プレゼントとして利用 自家消費 消費者に直接販売 小売店へ直接販売
委託販売（お店に置かせてもらうなど） 蜂蜜専門メーカー・問屋へ販売
一般食品製造業へ販売 食品以外製造業へ販売 学校給食へ納入
他産業と連携（製造業、研究・教育機関、外食産業等との共同研究・開発等）
その他（ ）

II-8. 販売している場合、その売り上げは誰のものになりますか

法人のもの（法人経営） 飼育届出者個人のもの 飼育届出者以外の個人のもの
飼育届出者世帯のもの 養蜂関係に利用 管理していない

II-9. 5年前と比べて、飼育群数は増えていますか

増えている 減っている あまり変化はない 該当しない

II-10. 5年前と比べて、売り先や買ってくれる人は広がっていますか

広がっている 狭まっている あまり変化はない 該当しない

II-11. 5年前と比べて、扱う生産物や商品の種類は増えていますか

増えている 減っている あまり変化はない 該当しない

II-12. 養蜂に関する仕事で、最も負担が大きいものは何ですか（1つ選択）

経営管理 蜂群の移動 採蜜 飼育管理 疾病管理
 物品調達 販売 連絡調整 貸し蜂
 その他（ ）

II-13. 労働力は何人ですか

_____ 人

そのうち、女性は何人ですか

_____ 人

II-14. 地域の養蜂団体に参加している場合、登録メンバーは誰ですか

（ ）カッコ内は、そのうちの女性の人数

経営主のみで1人 （ ） 経営主と経営者以外 合計 _____ 人（ ）
 養蜂団体には加入していない

II-15. あなたの養蜂に関する課題は何ですか、将来の希望や計画は何ですか（自由記載）

II-16. 日本の養蜂に関して、課題やあるべき姿は何だとお考えですか（自由記載）

II-17. あなたの養蜂経営が法人経営である場合、申告は青色申告ですか

はい いいえ

II-18. 後継者はいますか

いる いない

II-19. II-1~II-18 にお答えいただいた方についてお尋ねします。

性別： 男 女 年齢： _____ 才 お住まい： _____ 都道府県

Ⅲ. 女性の経営参画に関する意向

※女性と男性の双方がそれぞれお答えください。

回答に当たっては、お互いに相談せず、ご自身の考えをお答えください。

Ⅲ-1. あなたの性別と年齢を教えてください。

男 女

～20 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80～

Ⅲ-2. 養蜂経営において女性が重要な役割を果たしている、あるいは、果たした方が良いと思いますか。

思う 思わない どちらでもない

Ⅲ-3. 女性は、養蜂経営にどのようにかかわるのが望ましいと思いますか。女性は“あなたの希望”について、男性は“あなたの意見”について、最も近いものを 1つ選んでください。

- 経営者として主体的に経営方針の決定に携わる
- 共同経営者として主体的に経営方針に携わる
- 共同経営者として特定の部門を責任もって経営する
- 経営方針決定は夫あるいは親等が行うが、女性の意見も反映させる
- 指示された作業にだけ従事する
- 作業が忙しい時だけ手伝う
- 外での作業は行わず、経理等の事務作業に携わる
- その他 ()

Ⅲ-4. “家族経営協定”について、聞いたことがありますか。

※農林水産省では、家族単位で農業に取り組む経営体に向けて、各世帯員が意欲とやりがいをもちて経営に取り組めるよう、役割分担や就業条件等を家族で決める“家族経営協定”の締結を支援しています。

聞いたことがある 聞いたことはない 既に締結している

Ⅲ-5. 女性が養蜂経営方針の決定に参画しやすい環境を整えるうえで、最も必要だと思うことを 1つ選んでください。

- 家族経営協定等により経営方針への女性のかかわり方について取り決めるを行う
- 養蜂技術・経営等に関する知識を習得する
- 家事・育児・介護等の負担を軽減する
- 家事・育児等は女性の仕事という固定的役割分担の意識を変える
- その他
- 特になし

III-6. 女性が、養蜂、地域活動、家事・育児・介護等に携わる時間は どのようなものが望ましい と思いますか。
それぞれ1つ お答えください。

- | | | | | |
|--------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 家事・育児・介護の時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |
| 養蜂に携わる時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |
| 地域活動に携わる時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |

III-7. 男性が、養蜂、地域活動、家事・育児・介護等に携わる時間は どのようなものが望ましい と思いますか。
それぞれ1つ お答えください。

- | | | | | |
|--------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 家事・育児・介護の時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |
| 養蜂に携わる時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |
| 地域活動に携わる時間を | <input type="checkbox"/> 増やす | <input type="checkbox"/> 減らす | <input type="checkbox"/> どちらともいえない | <input type="checkbox"/> 今のままでよい |

III-8. 家族養蜂経営における家族各人の報酬の在り方は、どのようなものが望ましい と思いますか。1つ お答えください。

- 家族各人が定期的（月給、四半期給など）に定額の報酬を受け取るべき
- 家族各人が養蜂収益に応じて一定割合で報酬を受け取るべき（収益分配）
- 家族の話し合いにより、必要な時に報酬を各人が受け取るべき
- 普段から経営主が収益を管理し、その判断に基づいて各人に報酬を配分すべき
- 家族各人への報酬は必要ない
- その他

III-9. 女性が養蜂経営に自立的に携わるために、女性の個人名義で所有したい（所有すべき）資産はどれだと思いますか。（複数回答）

- | | | | | |
|--|--------------------------------|---|-----------------------------|-------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 預貯金 | <input type="checkbox"/> 家屋 | <input type="checkbox"/> 宅地 | <input type="checkbox"/> 土地 | <input type="checkbox"/> 生命保険 |
| <input type="checkbox"/> 機材・機械 | <input type="checkbox"/> 農業者年金 | <input type="checkbox"/> 養蜂作業施設・蜂産品加工施設 | | |
| <input type="checkbox"/> その他（ | | | | ） |
| <input type="checkbox"/> 資産等を所有したいと思わない／資産等を所有すべきと思わない | | | | |

もしも、お名前とご連絡先を、調査者に教えても構わないという方がおられましたら、下記もご記入ください。

お名前： _____ お電話番号： _____

ご住所： _____

- ◆ お名前とご連絡先をご記入いただいた方には、調査者から、ご回答いただいた内容について更に詳細をお尋ねすることや、聞き取り調査へのご協力をお願いすることがあります。（ご記入いただいた方すべてに、お伺いするというものではありません。）

3 | アンケート集計データ

SA = 単回答
MA = 複数回答

ト1. あなたは養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関わっていますか（SA）

カテゴリー名	n
はい	63
いいえ	18
無回答	1
計	82

ト2. 養蜂を始めたきっかけ（MA）

カテゴリー名	n
実家の家業	6
結婚を機に参加（結婚時に相手が養蜂を実施していた）	3
結婚後に夫などの影響で開始	24
夫以外の家族の影響で開始	5
自分の関心・趣味	13
就職先	1
地域活動	5
その他	3
無回答	4
計（I-1で「はい」+「無回答」）	64
非該当 A（I-1で「いいえ」）	18

ト3. 養蜂に関わるようになって何年くらい経ちますか（記述式）

分類	n
1年未満	5
1-5年	18
6-10年	21
11-15年	4
16-20年	4
21-25年	2
26-30年	2
31-35年	0
36-40年	3
41年以上	2
無回答	3
計	64
非該当 A	18

ト4. 一日のうち、養蜂に割く時間はどのくらいですか（記述式）

分類	n
30分未満	4
30分	3
1時間	9
2時間	9
3時間	3
4時間	4
5時間	2
6時間	2
7時間	1
8時間	7
9時間	1
10時間以上	10
無回答	9
計	64
非該当 A	18

ト5. 養蜂（飼育、採蜜、販売、道具類の購入、PR、加工品づくりなどを含む）に関して、自分の意見を言い、それが採用されることがありますか（SA）

カテゴリー名	n
よくある	23
時々ある	14
あまりない	9
ほとんどない	10
分からない	4
無回答	4
計	64
非該当 A	18

ト6-1. ハチミツなどを販売することがありますか（SA）

カテゴリー名	n
はい	55
いいえ	7
その他	2
計	64
非該当 A	18

1-6-2. 販売している場合、消費者の情報や顧客ニーズをどこから得ていますか (MA)

カテゴリー名	n
消費者から直接	48
知り合いの養蜂家などから	7
SNSを通じて	4
TVから	5
インターネットから	6
書籍から	5
地域の養蜂団体から	4
養蜂関連のイベントで	4
地域のイベントで	9
その他	9
無回答	2
該当回答数	55
非該当 B (I-1で「いいえ」+販売無し)	27

1-6-3a. これまで、新しい販売方法を提案／実行したことはありますか (SA)

カテゴリー名	n
はい	15
いいえ	35
無回答	5
計	55
非該当 B	27

1-6-3b. 新しい販売方法を提案／実行したとき、誰かに相談しましたか (SA)

カテゴリー名	n
はい	9
いいえ	3
無回答	3
計	15
非該当 C (I-1で「いいえ」+販売無し+提案なし&無回答)	67

1-6-3c. 誰に (MA)

カテゴリー名	n
夫	8
夫以外の家族	3
友人知人 (女)	0
友人知人 (男)	0
友人知人 (性別不明)	1
関係団体・組織	0
その他	0
無回答	1
該当回答数 (I-6-3b の無回答含む)	12
非該当 D (I-1 で「いいえ」 + 販売 & 提案 & 相談なし)	71

1-6-4. 消費者への情報発信は、どのようなことを行っていますか (MA)

カテゴリー名	n
チラシの配布	7
養蜂体験会等を開催	4
地域のイベント等を活用	13
SNS で発信	7
ホームページを開設	9
カフェや直売所に置かせてもらう	27
特に何もしていない	20
その他	5
無回答	3
該当回答数	55
非該当 B	27

1-7. 養蜂全般に関する情報や飼育技術に関する情報は、どこから得ていますか (MA)

カテゴリー名	n
家族・社内で	28
知り合いの養蜂家などから	32
地域の養蜂団体から	13
家畜保健衛生所から	5
養蜂関連のイベントで	8
SNS を通じて	4
TV から	10
インターネットから	16
書籍から	18
その他	2
無回答	9
該当回答数	64
非該当 A	18

1-8-1. これまで飼育技術研修を受けたことがありますか (SA)

カテゴリー名	n
有る	17
無い	41
無回答	6
計	64
非該当 A	18

1-8-2. 「有る」場合、研修は満足できるものでしたか (SA)

カテゴリー名	n
満足できた (1-8-1の無回答1名含む)	12
不満だった	3
無回答/どちらでもない	3
計	18
非該当 E (研修経験なし+無回答5名)	64

1-8-3. 「無い」場合、それはなぜですか (MA)

カテゴリー名	n
研修を受ける時間がない	6
研修が近くで開催されない	3
研修の機会がない	6
受けた内容ではない	3
必要を感じない	18
一人で行くのは不安	1
何となく行きづらい	1
その他	13
無回答	2
該当回答数	42
非該当 F (研修経験なし)	40

1-9. 相談できる女性養蜂家 (養蜂に携わっている女性) はいますか (SA)

カテゴリー名	n
いる	4
いない	53
無回答	7
該当回答数	64
非該当 A (うち2件が「いない」と回答、1件が「いる」と回答)	18

I-10. 今後も養蜂に関する活動を続けたい、あるいは、今後やってみたいと思いますか (SA)

カテゴリー名	n
そう思う	50
そう思わない	9
どちらともいえない	16
無回答	7
計	82

II-1. 養蜂で、あなたが主体となって今後やってみたい仕事や、拡大していききたい仕事があれば教えてください (MA)

カテゴリー名	n
ミツバチ飼育	24
貸し蜂業務	1
商品開発	13
販路開拓	15
商品販売・販売促進 (PR)	23
社会的活動 (地域での蜂蜜に関するイベント開催や教育現場でのレクチャーなど)	15
特にやってみたいと思わない	24
その他	1
無回答	12
該当回答数	82

I-12. 受けてみたい研修がありますか、ある場合それは何についてですか (MA)

カテゴリー名	n
飼育技術	29
ミツバチの生態	24
養蜂経営 (顧客管理、経理等含む)	11
販売促進 (広告、ホームページ、ネット取引、デザイン等含む)	17
社会・教育活動	14
特に受けてみたいと思わない	20
その他	1
無回答	15
該当回答数	82

I-13. 下記のような消費者との交流に関心がありますか (MA)

カテゴリー名	n
庭先やネット販売で交流したい	15
展示会やマルシェ (市場・マーケット) に出店してみたい	16
地域でのイベント等でミツバチや養蜂を紹介したい	23
教育現場で教えてみたい	8
特に関心はない	25
その他	2
無回答	17
該当回答数	82

I-14. 今後、女性養蜂家を対象としたイベント等があれば、参加したいと思いますか (SA)

カテゴリー名	n
そう思う	20
そう思わない	21
どちらともいえない	27
無回答	14
計	82

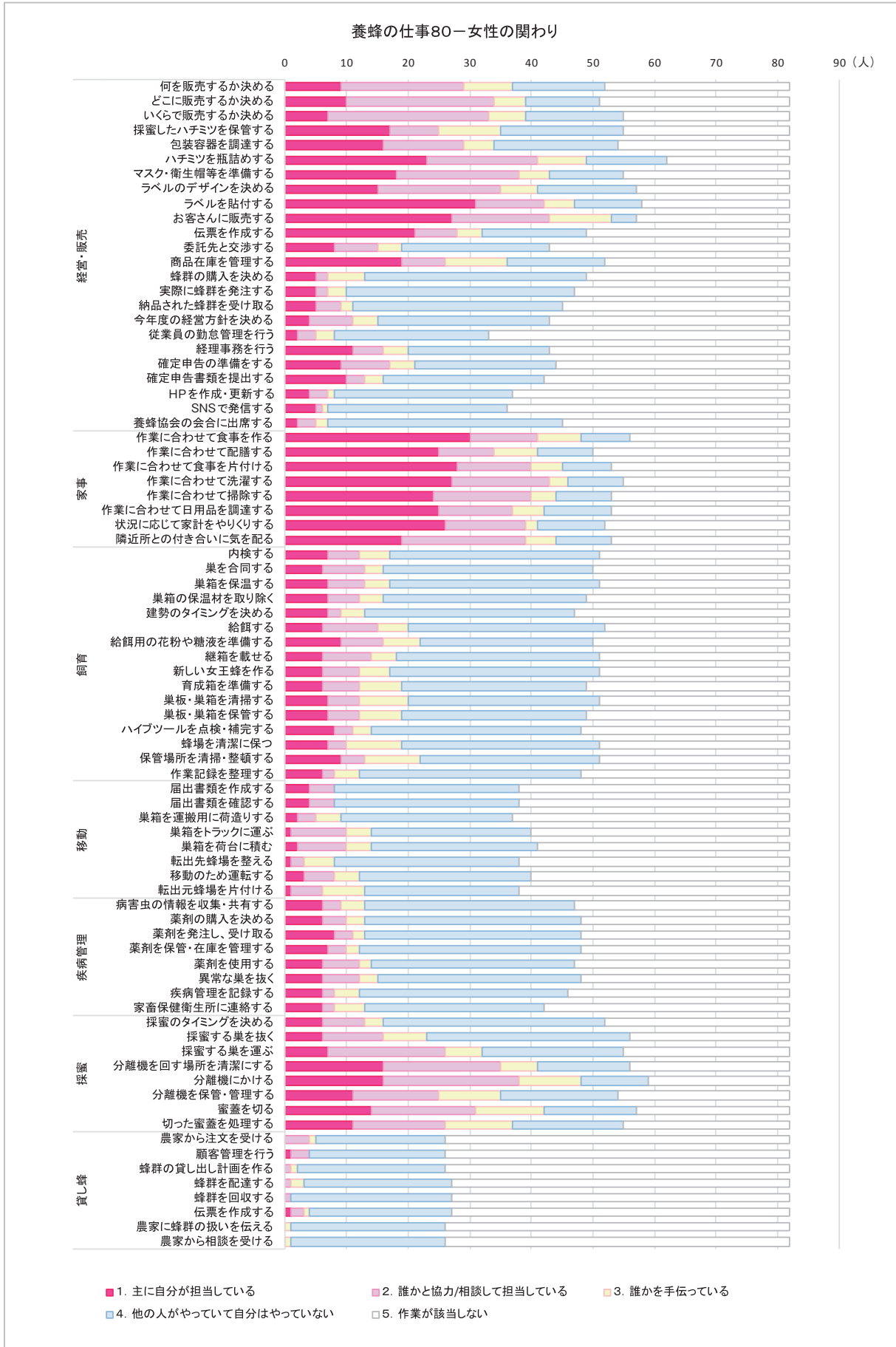
I-16. あなたの年齢を教えてください。(SA)

カテゴリー名	n
～20	0
20代	0
30代	6
40代	7
50代	10
60代	29
70代	17
80～	2
無回答	11
計	82

I-17. 経営主（飼育責任者）から見てあなたは？ (SA)

カテゴリー名	n
本人	9
配偶者	48
娘	4
息子の配偶者	0
母親	3
配偶者の母	0
その他の親戚	2
従業員・研修生	4
無回答	12
計	82

ト18. 養蜂の仕事80（各カテゴリーの人数をグラフ化）



II-1. 最もあてはまる養蜂形態は何ですか (SA)

カテゴリー名	n
専業養蜂家	14
兼業養蜂家 (主業)	6
兼業養蜂家 (副業)	25
趣味的養蜂家	45
計	90

II-2. 飼育届出者の性別 (SA)

カテゴリー名	n
男	87
女	3
計	90

II-2. 届出者は実質的な経営主ですか (SA)

カテゴリー名	n
はい	81
いいえ	1
無回答	8
計	90

II-2. 届出者は世帯主ですか (SA)

カテゴリー名	n
はい	80
いいえ	6
無回答	4
計	90

II-3. 届出蜂群数は何群ですか (記述式)

分類	n
10群未満	45
10～49群	33
50～99群	5
100～199群	2
200群以上	2
無回答	3
計	90

II-4. 蜂群の移動はありますか (SA)

カテゴリー名	n
移動する	23
移動しない	65
無回答	2
計	90

II-5. 養蜂を始めたのはいつ頃ですか (記述式)

分類	n
1959年以前	2
1960～1969年	11
1970～1979年	7
1980～1989年	9
1990～1999年	7
2000～2009年	32
2010年～	22
計	90

II-6. 主たる産品 / 商品 (SA)

カテゴリー名	n
はちみつ	70
花粉	1
蜂群 (販売)	2
蜂群 (貸し蜂)	0
蜜ろう	0
プロポリス	0
ローヤルゼリー	0
蜂産品加工品	1
蜂産品を利用した飲食	0
その他	0
無回答	16
計	90

II-7. 採った蜂蜜をどうしていますか (MA)

カテゴリー名	n
プレゼントとして利用	54
自家消費	63
消費者に直接販売	44
小売店へ直接販売	11
委託販売（お店に置かせてもらうなど）	34
蜂蜜専業メーカー・問屋へ販売	3
一般食品製造業へ販売	4
食品以外製造業へ販売	2
学校給食へ納入	1
他産業と連携（製造業、研究・教育機関、外食産業等との共同研究・開発等）	1
その他	2
該当回答数	90

II-8. 販売している場合、その売り上げは誰のものになりますか

カテゴリー名	n
法人のもの（法人経営）	6
飼育届出者個人のもの	30
飼育届出者以外の個人のもの	1
飼育届出者世帯のもの	23
養蜂関係に利用	9
管理していない	0
無回答	2
該当回答数	71
非該当 F（II-7で「プレゼント」「自家消費」のみを選択した人）	19

II-9. 5年前と比べて、飼育群数は増えていますか (SA)

カテゴリー名	n
増えている	29
減っている	15
あまり変化はない	31
該当しない	8
無回答	7
計	90

II-10. 5年前と比べて、売り先や買ってくれる人は広がっていますか (SA)

カテゴリー名	n
広がっている	38
狭まっている	5
あまり変化はない	25
該当しない	16
無回答	6
計	90

II-11. 5年前と比べて、扱う生産物や商品の種類は増えていますか (SA)

カテゴリー名	n
増えている	11
減っている	3
あまり変化はない	48
該当しない	20
無回答	8
計	90

II-12. 養蜂に関する仕事で、最も負担が大きいものは何ですか (SA)

カテゴリー名	n
経営管理	1
蜂群の移動	2
採蜜	11
飼育管理	48
疾病管理	7
物品調達	0
販売	2
連絡調整	0
貸し蜂	2
その他	1
無回答	6
複数回答	10
計	90

II-13. 労働力は何人ですか（記述式）

分類	n
1人	46
2人	30
3人	4
4人	2
5人	1
6人	1
7人	1
無回答	5
計	90

II-13. うち女性の労働力（記述式）

分類	n
0人	27
1人	37
2人	4
4人	1
無回答	21
計	90

II-14. 地域の養蜂団体に参加している場合、登録メンバーは誰ですか（MA）

カテゴリー名	n
経営者のみで1人	59
経営主と経営者以外	6
加入無し	7
不明（複数回答1件、矛盾回答1件含む）	18
計	90

II-17. あなたの養蜂経営が法人経営である場合、申告は青色申告ですか（SA）

カテゴリー名	n
はい	13
いいえ	21
無回答	56
計	90

II-18. 後継者はいますか（SA）

カテゴリー名	n
いる	7
いない	75
無回答	8
計	90

II-19. 回答者の性別 (SA)

カテゴリー名	n
男性	69
女性	10
無回答	11
計	90

II-19. 回答者の年齢 (SA)

カテゴリー名	n
30代	3
40代	7
50代	5
60代	28
70代	33
80代	5
無回答	9
計	90

III-1. あなたの性別と年齢を教えてください。

カテゴリー名	女性 n	男性 n
30代	4	2
40代	7	7
50代	8	5
60代	20	25
70代	9	34
80代	1	7
無回答	1	2
計	50	82

III-2. 養蜂経営において女性が重要な役割を果たしている、あるいは、果たした方が良いと思いますか。(SA) 女性

カテゴリー名	n
思う	29
思わない	3
どちらでもない	17
無回答	1
計	50

III-2. 養蜂経営において女性が重要な役割を果たしている、あるいは、果たした方が良いと思いますか。(SA) 【男性】

カテゴリー名	n
思う	56
思わない	3
どちらでもない	21
無回答	2
計	82

III-3. 女性は、養蜂経営にどのようにかかわるのが望ましいと思いますか。女性は“あなたの希望”について、男性は“あなたの意見”について、最も近いものを1つ選んでください。(SA) 【女性】

カテゴリー名	n
経営者として主体的に経営方針の決定に携わる	2
共同経営者として主体的に経営方針に携わる	6
共同経営者として特定の部門を責任もって経営する	7
経営方針決定は夫あるいは親等が行うが、女性の意見も反映させる	5
指示された作業にだけ従事する	6
作業が忙しい時だけ手伝う	9
外での作業は行わず、経理等の事務作業に携わる	3
その他	3
無回答	4
複数回答	5
計	50

III-3. 女性は、養蜂経営にどのようにかかわるのが望ましいと思いますか。女性は“あなたの希望”について、男性は“あなたの意見”について、最も近いものを1つ選んでください。(SA) 【男性】

カテゴリー名	n
経営者として主体的に経営方針の決定に携わる	9
共同経営者として主体的に経営方針に携わる	16
共同経営者として特定の部門を責任もって経営する	9
経営方針決定は夫あるいは親等が行うが、女性の意見も反映させる	9
指示された作業にだけ従事する	3
作業が忙しい時だけ手伝う	20
外での作業は行わず、経理等の事務作業に携わる	2
その他	6
無回答	1
複数回答	7
計	82

III-4. “家族経営協定”について、聞いたことがありますか。(SA) 【女性】

カテゴリー名	n
聞いたことがある	7
聞いたことはない	39
既に締結している	1
無回答	3
計	50

III-4. “家族経営協定”について、聞いたことがありますか。(SA) 【男性】

カテゴリー名	n
聞いたことがある	14
聞いたことはない	67
既に締結している	1
無回答	0
計	82

III-5. 女性が養蜂経営方針の決定に参画しやすい環境を整えるうえで、最も必要だと思うことを1つ選んでください。(SA) 【女性】

カテゴリー名	n
家族経営協定等により経営方針への女性のかかわり方について取り決めるを行う	4
養蜂技術・経営等に関する知識を習得する	19
家事・育児・介護等の負担を軽減する	4
家事・育児等は女性の仕事という固定的役割分担の意識を変える	6
その他	0
特になし	13
無回答	1
複数回答	3
計	50

III-5. 女性が養蜂経営方針の決定に参画しやすい環境を整えるうえで、最も必要だと思うことを1つ選んでください。(SA) 【男性】

カテゴリー名	n
家族経営協定等により経営方針への女性のかかわり方について取り決めるを行う	6
養蜂技術・経営等に関する知識を習得する	34
家事・育児・介護等の負担を軽減する	8
家事・育児等は女性の仕事という固定的役割分担の意識を変える	6
その他	4
特になし	20
無回答	2
複数回答	2
計	82

III-6. 女性の家事・育児・介護の時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	0
減らす	11
どちらともいえない	21
今のままでよい	11
無回答	7
計	50

III-6. 女性の家事・育児・介護の時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	2
減らす	17
どちらともいえない	23
今のままでよい	25
無回答	15
計	82

III-6. 女性の養蜂に携わる時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	5
減らす	2
どちらともいえない	19
今のままでよい	17
無回答	7
計	50

III-6. 女性の養蜂に携わる時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	17
減らす	1
どちらともいえない	21
今のままでよい	28
不明 (無回答14、複数1)	15
計	82

III-6. 女性の地域活動に携わる時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	8
減らす	2
どちらともいえない	12
今のままでよい	19
無回答	9
計	50

III-6. 女性の地域活動に携わる時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	12
減らす	4
どちらともいえない	22
今のままでよい	23
無回答	21
計	82

III-7. 男性の家事・育児・介護の時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	11
減らす	1
どちらともいえない	14
今のままでよい	15
無回答	9
計	50

III-7. 男性の家事・育児・介護の時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	13
減らす	2
どちらともいえない	19
今のままでよい	31
無回答	17
計	82

III-7. 男性の養蜂に携わる時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	4
減らす	6
どちらともいえない	11
今のままでよい	20
無回答	9
計	50

III-7. 男性の養蜂に携わる時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	17
減らす	4
どちらともいえない	16
今のままでよい	36
無回答	9
計	82

III-7. 男性の地域活動に携わる時間 (SA) 【女性】

カテゴリー名	n
増やす	8
減らす	2
どちらともいえない	12
今のままでよい	19
無回答	9
計	50

III-7. 男性の地域活動に携わる時間 (SA) 【男性】

カテゴリー名	n
増やす	8
減らす	6
どちらともいえない	20
今のままでよい	30
無回答	18
計	82

III-8. 家族養蜂経営における家族各人の報酬の在り方は、どのようなものが望ましいと思いますか。(SA) 【女性】

カテゴリー名	n
家族各人が定期的（月給、四半期給など）に定額の報酬を受けるべき	3
家族各人が養蜂収益に応じて一定割合で報酬を受け取るべき（収益分配）	13
家族の話し合いにより、必要な時に報酬を各人が受け取るべき	7
普段から経営主が収益を管理し、その判断に基づいて各人に報酬を分配すべき	10
家族各人への報酬は必要ない	3
その他	6
無回答	7
複数回答	1
計	50

III-8. 家族養蜂経営における家族各人の報酬の在り方は、どのようなものが望ましいと思いますか。(SA) 【男性】

カテゴリー名	n
家族各人が定期的（月給、四半期給など）に定額の報酬を受けるべき	7
家族各人が養蜂収益に応じて一定割合で報酬を受け取るべき（収益分配）	19
家族の話し合いにより、必要な時に報酬を各人が受け取るべき	19
普段から経営主が収益を管理し、その判断に基づいて各人に報酬を分配すべき	12
家族各人への報酬は必要ない	4
その他	10
無回答	11
計	82

III-9. 女性が養蜂経営に自立的に携わるために、女性の個人名義で所有したい（所有すべき）資産はどれだと思いますか。(MA) 【女性】

カテゴリー名	n
預貯金	21
家屋	2
宅地	4
土地	7
生命保険	3
機材・機械	5
農業者年金	4
養蜂作業施設・蜂産品加工施設	10
その他	4
資産等を所有したいと思わない / 資産等を所有すべきと思わない	14
無回答	7
該当回答数	50

III-9. 女性が養蜂経営に自立的に携わるために、女性の個人名義で所有したい（所有すべき）資産はどれだと思いますか。(MA) 【男性】 【複数回答】

カテゴリー名	n
預貯金	33
家屋	3
宅地	2
土地	8
生命保険	9
機材・機械	6
農業者年金	5
養蜂作業施設・蜂産品加工施設	12
その他	5
資産等を所有したいと思わない / 資産等を所有すべきと思わない	14
無回答	16
該当回答数	82

平成30年度 養蜂経営における女性の貢献調査事業 調査結果

2019年3月発行
作成

公益社団法人 国際農林業協働協会
〒107-0052 東京都港区赤坂 8-10-39
赤坂 KSA ビル 3階
TEL : 03-5772-7880
FAX : 03-5772-7680
www.jaicaf.or.jp

ISBN : 978-4-908563-42-3 print
ISBN : 978-4-908563-43-0 pdf

【平成30年度日本中央競馬会畜産振興事業】

